女鑑第百九拾六號

目録

女鑑臨時發行豫告

何とかや呼するゝあやしき主義の流行は我が神州の淑女をして滔々として輕佻浮薄にのみ趨らしめたりし秋にあたり本社同人衷心深く憂慮する所あり明治廿四年八月本誌を發行し女教の要專之を萬邦無比なる歴史に徵し之を祖先の遺範に稽へ優麗貞淑なる日本女子固有の特性を啓發することを本旨とし以つて忠良なる日本臣民の賢母良妻たる婦女子の伴侶たらしめむことを務めてより年を閲すること九年号を重ぬること百九十六號に及びぬ

今や世運の推移は海內諸般有形の事物概皆舊観を改め更に國威の伸張は內外の人雜居して等しく大御稜威に賴るにいたれりまことに前古未曾有の時期に遭際せり是に於いてか吾人同人の益々奮勵盡碎を要する者また多く加はりぬ玆に三月五日發行すべき本誌第二百號を**臨時發行**となし女子問題に熱心なる諸家の剴切精覈なる意見を蒐め又厚く**賞を懸け**て緊切なる問題の解釋を求め汎く歌文を募りて其の精を選び萃を集め以つて大冊となし一は刻下の急に應し一は多年愛讀者諸媛の厚誼に酬いむとす其の詳細にいたりては本誌附錄なる應募心得に讓りてこゝに臨時發行のことを豫告す

源雅通の女



女鑑

第百九拾六號

天つ日嗣の高御位は天地のむだ動なく皇國の御榮はいや年のはに榮えゆかんとあらたまの年のもしめのことはぎ聞え申そになん

愛國心

我が日本は神國なり。我が日本は君子國なり。げに、かけまくもかしこき天祖大神の、此の國をうませ給ひてより、君は、たゞ民をもとゝし、世治まり、國安かれとのみ、天御心をくだき給へば、人民は、たゞふして思ひ、起きてかぞへ、以つて、君が代は千代ませ八千代ませと祈り奉る。さるは、即ち國を愛し、民をいつくしませ給ふにて、又即ち國を愛し、君をあがめ奉るなり。故に、一旦事あれば、君神慮をこがし給ひて、以つて民を救はんとし給ふ。民は仰をかしこみて、以つて君を安んせんとし奉る。日本小なれども君臣大和す。故に内よく治まり、外あなどりをふせぐなり。さはいへ。むかしは二三の士、たゞ天下國家を論ずるのみにて、他は、たゞ知らず〳〵法とり化せしも、不思議なる神國の靈、不思議なる神民の徳にこそ。しかるを、今日に至りては、士は云ふまでもなく、商工農に至るまで、國家を憂ひ、公益を廣めん事をはかるもの〻多きぞありがたき。之即ち教育の普及、智能の發達による所ならし。愛國とは何ぞ。即ち、よく君が勅を

奉じ、つねに父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、學を修め、業を習ひ、以つて智能を啓發し、德器を成就する等、下し給へる勅語にのつとり、人の人たるの道を守り、已が職分をつくす。即ち、政事をなす人は、國を治め、世を治むるを旨とし、國家のみだれをふせぎ、軍人は、一意に兵をつかさどり、外のあなどりを防ぎ、學者は學をしき、文を講じ、しきしまの大和錦、盛んにおりしき、教育者は、よく人を敎へ導きて、智をみがゝしめ、能を發せしめん事をつとめ、商人は賣買を廣くして、我が國家を利せん事をはかり、工人は其の工をみがききはめて、我が國の器物、各、他に劣らざらん事をはげみ、農者は農をはげみて、國家を飢ゑざらしめんと志す。婦人、婦人は即ち、家を治め、父母舅姑に孝、夫に貞、子を慈愛し、孝女となり、良妻となり、賢母となり、よく夫を助け、子を敎へ、各、其の性を善良賢智ならしめて、國を裨益し、家を裨益せしめん事をはかる。即ち愛國心にて、此の念、げにゆめの間も忘するべからざるなり。



日本女子今後の覺悟（十二）

三輪田　眞佐子

新玉の年につれて、榮え行く大御世の御惠に潤ひつゝ、今年も、亦、讀者と共に、文の林に分け入りて、言の葉を藻鹽草かき集め、をちこちの心のともと相交るこそ樂しけれ。そも〱老の將に至らんとするを知らずして、年の改まるを歡ぶものはなにが故ぞ。月新なるがためか。月は去年の月に異ならず。日新なるがためか。日は昨日の日に異ならざりとて、霞、いまだたゝず、花、なほ開かざるものを。蓋し、これを壽ぐ所以のもの他ならず。將に舊惡を棄てゝ、新善を行はんがためなり。若し果して、年と共に、惡を去り、善に就くを得んか。などか老を悲まん。實に古人の、朝に道を聞きて夕に死せんも可なり、と曰ひけるか如き心地こそすれ。されば、おのれは、いよ〱いそしみ勵み、讀者と共に、女の踐むべき道をしをりせんとてなむ。

前に、交際の得分をものしけるが、若し、單に交際は、かゝる得分のみあるものと信じて、人事は、交際だにせば、足りなんと思はゞ、反りて弊害なきにあらず。

凡そ、得分のあるところには、必ず、弊害の潜むものなれば、これを戒めざるべからず。即ち、交際は、智を博むる得分ありと雖も、交際より得し智は、自ら實驗せし智の如く、確乎たらざるべし。

元來、女子は輕信し易き癖あれど、能く、これを

戒むべし。然らざれば、他言半解より、如何なる誤を生ぜんも知るべからず。剰へ智に良きものあり。邪になるものあり。これを辨別せざれば、交際の結果として阿諛姦佞に長ずるものともならん。巧色を習ひて、以て長者を欺き、劣者を淩ぐ、一種いふべからざる惡婦ともなるべし。

交際は、人生の自然に基くものなれば、必ず、これには、一種の愉快あるは明かなれども、一朝交際の愉快に恍惚として、一も交際、二も交際と夜を日につぎて、交際を事とせんか。遂には、必要と正當との區域を脱して、奢侈淫逸に流れんも知るべからず。現時世俗の、華美と放恣とに趣く所以のものは、主として肉欲を無限に滿足せしめんとするに由ると雖、傍ら、交際が媒介となりて、この惡風を釀するものなれば、固く心を執りて、中庸を失はざるこそ肝要なれ。

なは、處世の道は交際に由る外なきものと誤了して、權要に媚び、甚しきは、道を曲げ、義を破りて、非理に與みし、以つて、その立身を謀るものあり。醜の、最も惡むべきものぞかし。おのれは、義と道との許す範圍内に於いて、交際をつとめ、以つて、自暴自棄に陷る勿れと祈るのみ。むかし、達巷黨の人曰ひけらく、大なる哉孔子、博く學んで、名を成すところなしと。夫子、之を聞き、門弟子にのたまふやう、吾何をか執らん。御を執らんか、射を執らん乎。吾は、御を執らんと。實に獨立獨行して、敢て、自ら求めざるこそ望ましけれ。彼の、處世の方便として、交際する輩は、既に交際の本意をうしなひたるものなり。

試に、交際の本義を言へば、人の天性や、社交的なれば、おのづから、人を愛し、友を求むる感情の盛なるもの内にありて、そが、沛然と外に發し、

以つて、友誼の端を開き、終始、信を以つて、變せざるにあり。彼の手を覆せば雲となり。手を翻せば雨となる輕薄流の、表に甘言を装ふ如きは、交際の敵なるべし。されど、交際の要は、接するに信を以てし、久しくするに敬を以てすべし。苟も、交際を學ばんと願ふものは、つねに、この二字を念頭より放つべからず。

夫と妻（承前）

有馬祐政

取り扱ふ事件、履み行ふ道路より云へば、必ずや夫妻別あるを要す。夫は表たるべく、外たるべし。妻は裏たるべく、内たるべし。されど一致する所なければ、表裏の差も立つるによしなく、はた一物なればこそ、却りて内外の別も設けらるゝものなれ。一本の手、一枚の紙、一軒の家、皆、この道理に依らざるはなし。夫婦相和せよとの勅語はげにこの點を示し給ひしやう覺えらる。さて夫婦相和するとは、いかなることにか。又いかにしてうべきことなるか。即ち余が平常考ふる所を記るして、諸子の同意を望むになん。

一物たり、一体たり、一致する所あるものなりと云ひしばかりにては、未だ以て相和するの義を表し得たりと爲すべからず。そはむしろ相和することをうべき由縁を說き明かせるに過ぎざるのみ。しかれど相和するとは、そも〳〵何事ぞや。余は寔に同情の一語を以つてこれに答ふ。

同情とは、相互に想ひやりをなすことなり。夫は能く妻の心情を解り、喜憂を慮るべく、妻も、亦、當に夫の喜憂を察み、心情を推し量るべし。一身の事、一家の事、一族の事、世間の事、かたみに、その腦裡に起ゝしてとも〳〵、なにもかも、うちあ

かして、相爲めに謀りゆけよ。
かくなせそ、自から相憐相愛、遮る雲もなく、隔つる霞もなし。淸らかなる團圞の月は常へに兩人の胸に照り渡りて、温かき一陣の風、千代萬代にその家庭を吹き和ぐべし。此に至りてか、琴瑟相和して、同枝連理、眞にこよなう樂しき園は、面前に現はれ來べきなり。
しかのみならで、夫と妻とは、かさねて亦何れよりも、等しく是至極會心の友、知己の侶たるべし。若し、この同情をもて、相互に想ひやりをなさむ、恐らくは、求めずして、相互に心を會し、已を知るの伴侶たることをえん歟。
然るに飜りて世俗の有樣を視るに、動作の上において別ある者尠からざれども、眞に心情を推し量り、喜憂を相共にし、同心同氣、相愛相憐、暖かく、かつ淸らけく、和ぎ合ふ者に至りては、余輩は偏へに一のうるはしき龜鑑を認めえざるを悲しまずんばあらず。
こは、そも何が故ぞ。畢竟夫妻が智識の間隔甚だしき、是なりと信ず。かの歐米諸國においては、比較的、その差少く、相倶に同一専門學に通曉する者さへあり。貞淑和順の婦道より論ずれば、快らぬ節なきにあらねど、智識の進達に依りて、妻の夫に同情を致すことの親切なる點は、本邦婦人の執りて、以て摸範と爲すべきことにぞある。見よ、男子の敎育は、普通となく、専門となく、年を逐ひて、榮え行けども、女子の敎育に至りては、全國を通じていと振はず。普通においてすら、學に就けるは學齡者の十分の五六に過ぎず。高等女學校の類は、公立のもの、日本國中僅に二十有餘、本年の初め、文部省は、各府縣に向つて必ず三ヶ年の中に一二校を設くべきことを嚴令せ

しも、目下の狀態は、甚遺憾に堪へざる者あり。私立にかゝるもの、少からず存すれども、大抵宗敎的學舍にして、不具か、偏曲か、二者何れかを免がれざるものゝみ。而して其が男子のと、次第に遠ざかりゆきて、隨つて、夫たる者と、妻たるる者との智識、霄壤の如く隔絶り去らんとす。これがために、別いよ〳〵どこまでも別に趨り過ぎて、同情の氣風、もはや起るに由なく、終に眞實和樂なる家庭は、永久に現はれずして止まんかな。されば、敎育は同情をうるの基礎として必要なること、言ふを俟たざるなり。

綿綿數百言を費やしたる余が鄙見を總括すれど、行爲の上にては、飽くまでも、正しくその分に應じて別を立つべきも、この別は、則ち同心一體なればこそ、初めて云ひうべきものなれ。かるがゆゑに、その心して、かたみに、同情同氣、以て相和すべし。これにて、夫妻のなからひ完かるべく家庭のうち圓かなるに至らんこと、火を睹るよりも明かなり。ざれど、かゝるうるはしき境界に到り届くには、まづ、敎育の力に依りて、夫妻が智識の間隔を僅少ならしめ、以て同情の念を惹き起し、想ひやりを致さしむべし。將に妻たらん子等は云はずもがな。既に嫁ぎたる女達も、夫婦唱和の道を全うせんがためには、その他の點にも倍して、眞に同情を致しうるまでに、充分に普通敎育の感化を受くるやう、勉められんことを、祈るになん。

（完）

女德の完全

秋鹿

女性は柔順なるべし。夫に對しては、其の命を奉じ、舅姑に事へては、善く其の意を迎ふ。奉

措は須らく閑雅なるべく、言辭は必ず、温和たるべし。以上は何れも、女性に取りて、あしき德とはいふべからず。必ず有せらるべき、好個の淑德たること、論なし。然れども、これ等の德をのみ具へたるを以て、直ちに、婦德の完きものと言はむは、われに於いて肯せざる所なり。

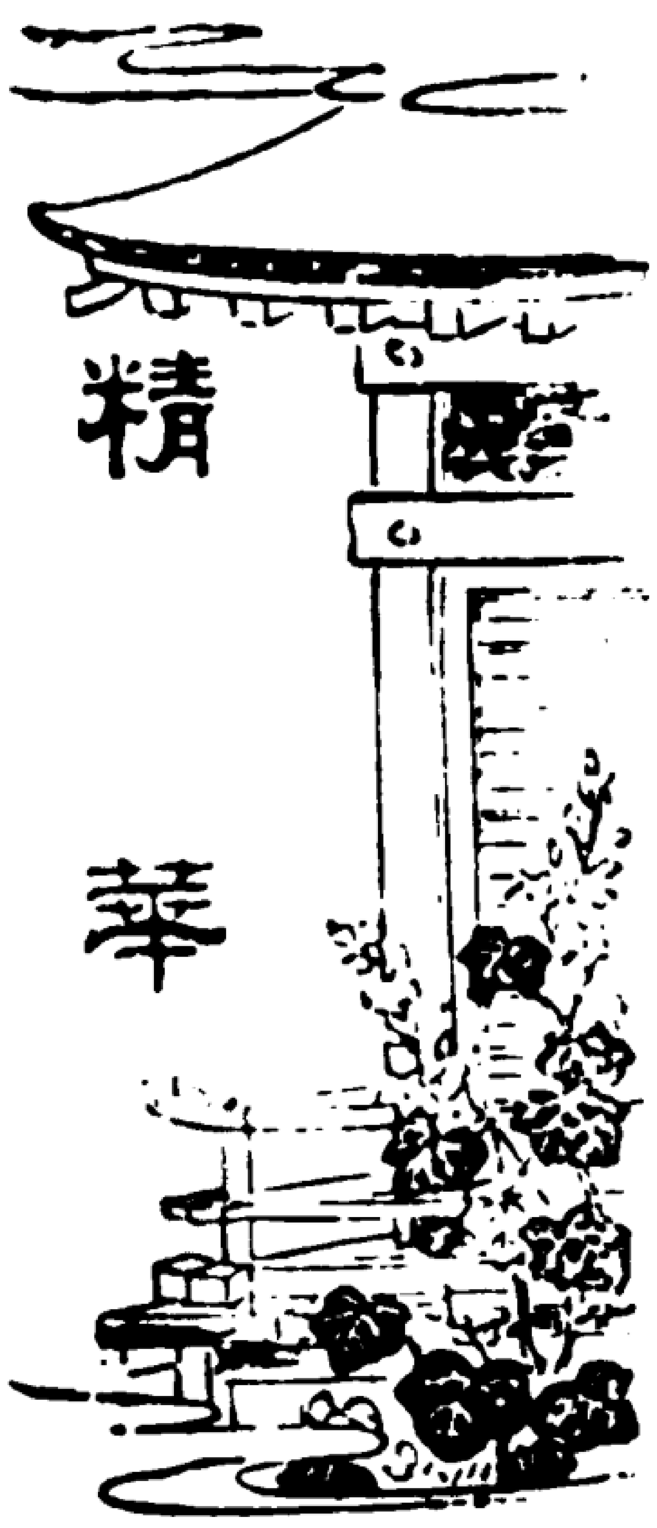
女德は、之を要するに、貞の一字を以て、之を総ぶ可し。夫に逆はざるも、舅姑を喜ばしむるも、他人に辱かしめられざらむを勤むるも、歸する所はこの一字、貞の德を全うするに在りて存ず。されど、この德を全うするの道たるべくむど、普通世間の認めて以て、婦德にあらざるが如くに感ずるものも、亦、之を遂行せざるべからず。例令へど、夫事に營むとき、之に助力をあたへ、夫辱かしめられむとき、自ら進みて、之が仇を報ずるが如き、時に或は、婦德を害するの嫌あるべしと雖ども、敢て顧慮せざるべきなり。余は之を名けて、婦德の剛の方面といはむとす。

剛の德も、亦、嘉みすべきの德なり。然れども、これのみを全うするは、喜ぶべきのことにあらず、剛も半面なり。柔も半面なり。何れも共に五たり。兩者を合せずむど、十全の德には至り難し。

十人十面、面異りて、心同じからず。或は、剛に稟けたるもあるべく、或は柔の性なるもあるべし。互に自ら鑑みて、相加味する所無くむば、婦德の完きを得ざるべし。

我が見にして、謬ると甚しからざるを得ど、東洋的の女子教育に於ては、柔を重ずるにすぎ、西洋的の女子教育に於いては、剛を尙ぶに失したるを感ず、夫を內助するは淑德たりと雖ども、夫と共に、社會的活動の內に混じ、政治を談じ、時事を論ずるが如き、決して中を得たらず。夫に服從する

は美徳たる、疑を容れずと雖ども、常に其の意を、これ迎へ、絶へて、之を省慮改悛に導くなきは、余の賞揚に躊躇する所なり。



本邦固有の道義に基き、優婉貞淑なる女徳を涵養し、世の婦女子をして、賢母良妻たらしむることは、女鑑初刊以來常につとむるところなり。然れば、論説に漫錄に、さては雜錄にいたるまで、皆この主旨によらざるはなしといへども、近時世態人情の變遷するにつけ、感ずるところありて、從來の史談に、特に修身の一項を加へ之を精華と稱し、先づ東久世伯の聖諭略解を掲げぬ。これより、つぎつぎ聖諭の大旨の顯彰祖述し、以つて國體の精神を發揮し、人心の嚮向するところを一にせむことをはかる。もしそれ、漫錄其の他の諸欄にいたりては、嚴に其の材料を選び、誠意わが主旨を貫徹せしめむことを期す。

聖諭略解

東久世通禧　謹述

明治二十三年十月三十日に、天皇陛下の、ひろく萬民をさとし給へる大御言の御旨を、おし奉るに、我が　皇祖の神々は、申すも更なり、歴代の　皇上は、天地わかれし初より、この國土を、をさめ成し給ひて、いよいよ、榮えゆくべき基を立て給ひ、なほ、代々かぎりなき御めぐみを垂れさせ給へるは、いとも、深く厚き御事なり。さて、我が臣民も、大御惠を蒙りて、祖先以來、いつの世にも、ひたすら、忠孝を勵み、ことごとく、心を一にして、かりそめにも、この大道をはなれず、一筋に、大君に仕へ奉りしは、これ、我が國體の、此の上もなく、美しき善きありさまなり。

されど、この後も、ながく、このよき風を傳へ、基を、こゝに立てゝ、子孫を敎へ導け。

爾等臣民、專、誠の心をむねとして、親に事へては、孝行をつくし、兄弟は、長幼の序を守りて、互に相信愛し、夫婦の間は、禮を失はずして、共に相睦み、朋友の交には、信義をつくしあひて、人倫の道を、正しくふみ行ひ、なほ、我が身持をつゝしみ、質素を旨として、輕々しく、うはべにながれず、まづ、一族知人よりはじめて、力の及ぶかぎりは、博く世の人の災厄をも、たすけ救ひて、只管、慈悲の行をせよ。又、學問技藝を修め、智慧才能をみがきて、人たる面目を保て。かくて、まことの心、内にみち／＼、才智藝能すぐれたらむ人となれ。

人倫の道を、正しくふみ行ひ、才智藝能たけたらむには、ひとり、わが身、我が家のことのみに止まらず、かねて、ひろく、世の爲をもはかり、多くの人々をも益することをせよ。これぞ、人たる面目なる。さて、また、各ひとしく、國法を守らむは、國家安寧の基なれば、只管に、國の掟に遵ひ奉りて、犯さゞらむこそ、まことに、國家の良民なれ。もし又、不慮の變あらむには、各、本分を守り、我が身をかへりみず、額には、矢は立つとも、背には、立てじと、勇み進みて、國の御楯となれ。安けき御代にも、波風あらき時にも、かく一途に、つとめはげみて、この天地と共に窮なき、吾皇孫命の天日嗣の御榮を、扶け奉れ。かくてこそ、まことに、朕が親愛撫育する大日本國の忠臣なれ。又、一つには、幾千萬年來、まめやかに仕へ奉りし汝等が祖先の心にもかなひ、おやの遺せるよき風を、ます／＼彰せる孝子にこそあれ。これ、忠孝二つながら全きものぞ。

忠孝を本として、至善を備へ盡したるこのよき道は、まことに、我が　皇祖　皇宗のはじめ給ひて、遠く萬世に、遺し垂れたまへる御をしへにて、子孫たらむもの丶、何時のさきまでも、遵ひ守るべき道ぞ。古と今と時こそかはれ、人として、この道に遵ひよるべきことは、かはることなし。また、我が國の内は更なり、世界のはてといふはてまで、施き及ばせども、何處とて、さはりはあるべからず。實に、比もなく、高く、廣く、大なる道ぞ。あはれ、朕も、汝等臣民と共に、わが　皇祖　皇宗の遺し給へるこの大道を、かしこみつ丶しみて、まもり行はむに。およそ、この皇國の土に生れたらむものは、君臣上下ことごとく、この一すぢの御敎にしたがひて、ひたすら、違はざらむことこそ、ねがはしけれ。これぞ、朕が御心なる。

と宣はせ給へるなるべし。實に、かぎりなく、尊き大御言にこそ。

源雅通の女

塩井こく子

嫉妬は、女の疾、女の意志とよまる丶ぞ憎くき。女は、しか、嫉妬深きか。むかし、魏王、楚の國より容顔すぐれたる美人を得たり。魏王の后を鄭袖と云ひけるが、王が、その美人を愛するを見て、つゆ妬むさまなく、殊に王の氣に合はんために、その美人をいつくしむ事、王にもまされり。王の曰く、女の嫉妬は、是れ定まれる情なり。しかるに、鄭袖、吾が愛する心を知つて、妬まざるのみならず、之を愛する事、吾れに過ぎたりとて、大に后の心を感じよろこべり。鄭袖、誠に嫉妬なきか、實に國后のたしなみ、國母のかゞみ、仰ぎてもな

はあらりあるべきを。鄭眞誠は畏るべき蝮蛇の心、鍼を外にあらはさずして、遂に人を毒刺す。あるとき、その美人に云ふやう、汝が容貌世に類なし。王、たゞ、汝が鼻をのみ醜しとおぼす。汝、王に逢ふ毎に鼻を掩ふべしと。美人、その言を誠として、之より王に見ゆる毎に、鼻を掩ひたり。王之をあやしみ問ひけるに、后聞ゆるやう、彼は、君がにほひを忌みて、かく鼻を掩ふなりと。王、大に怒り、忽ち、其の鼻をそぎたりとぞ。閩の王延輸が妻は、其の性の妬みによりて、人をころす八十四人と。嗚呼、嫉妬は、誠に女の疾なるか、意志なるか、一犬狂す、萬犬これうたがはる。しかして、或る人云ふ。女は少しく嫉妬ある方よし、あまりに他處に見て、男の放埒するも知らぬ顔なるは、中々に、男のためわろしと云ふ人あれど、そは、ものをしらぬ田夫野人が、嫉妬と諫めとを同

一視したるあやまりの言葉にて、女子、其の誠を以て、男を諫むるはよし。ゆめ、人をうらみそねむをよしと云ふ道理のあるべき。大和の女が、風吹かば興津しら浪の歌を聞きて、その夫と共に姫たちもとく感じ給ひしならん。源雅通の女、又、それにもおとらぬ心ぞへにこそ。その名は何と呼びけん。藤原定頼朝臣にすみけるが、朝臣外心ありて、あだし方にのみ通ひ、此の女が許へは、かれがれ、はや道もなきまであれ行きたれど、女はさらにうらむけしきもなかりしを、定頼來らば時々はひきとゞめてもおけかしと、ある人の云ひけるに、

わりなしや心に叶ふ泪だに
　身のうき時はとまりやはする

口ずさみたるを、聞く人深く感じけるが、のち定頼朝臣、此の事を聞きて、いみじう感じあはれみ

けるとなり。かゝるを誠の女、疾なき女とこそ云ふべけれ。げに心だに我が思ふにも叶はぬに、人をうらみんことわりぞなき。叶はぬを世の道理とし、あはれ姫たちよ。うつくしき姫たちよ、たゞ疾なきうつくしき庭の撫子とさき出で、めでたき床衣とかはり給はん事こそ、わが此の春よりの願ひなりけれ。

澤橋兵太夫が母

田島利三郎

關ヶ原の戰は、遂に東軍の勝利となりぬ。西軍の諸將、或は戰沒し、或は斬せられ、世は徳川のおもふまゝとなれり。浮田秀家、もとより西軍の渠魁なれど、死を免るべき者ならざりしかど、夫人は前田利家の女なり。之に加へて、島津氏の哀を乞ひし等によりて、其の子八郎と共に、八丈島におくられて、僅に餘生をぬすむことを得たり。八郎といふは、いまだいと幼かりき。人の心の頼むべからざることは、この頃も、今にかはらざりけむ。秀家が五大老の一人として、さしも世に時めけるをりは、此の若君の御爲には身をもさゝげむ。命をも惜まじと、人毎に皆言ひけるを、さて遠き島根に逐られむとする時にいたりては、其の折の人々の殘れるも多からむに。いで御爲にと言ひいづる人もなし。養ひ稚子には、めもなきものといはるゝ乳母さへ、疾くに逃げ失せてあらざりき。幼き人は、如何にかなりゆくらむ。あはれ、さりとも物のこゝろ知られむ者は、いたましと思はざるものあらむや。果して、一人の女は、徒跣にて日々廳に來りて、八郎君の御供して、彼の島に行かむことをゆるされたしとて、くりかへし、其

の事のみを冥願ふものありき。其の女も、亦、幼き者を懐にせり。

孤島に逐ひやらるゝ人に御供など、背つて例も聞かぬことなれば、役人もかなはぬ由言ひ聞せては歸らしむれど、直に引きかへし來ては、また同じことを歎き聞えぬ。果は、この事ゆるされずば、生きて御上を歎き思はむより、死してこの苦痛を免れむと、既に自害せむとしけれど、役人ども、大に驚き、幼子が目前、さては行末のあはれなど語り聞せて賺しとゝむれど、この幼兒は諸共にとこそ思へ。あはれとても候はじ。唯、わが願をゆるさせ給ふやいかにと、いつかな、刄を放たず。役人も、今は困じはて、詮議しけるは、こゝに、彼の女に死なれ、自然その事、上にも聞えなば不愍のことをしてけるよ。其の節、などて、其の由を申さゞりしぞと、御とがめもあらば如何せむ。とかくは、この事を聞えあげ、上の思召すまゝにうちまかせてむと、事のよしを具に上申しけり。

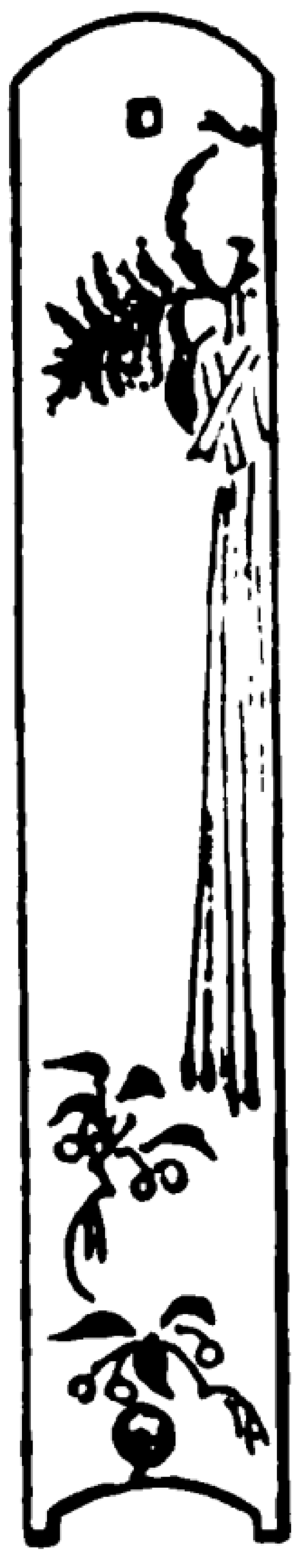
誠の心は、巖石をもつらぬくといふ。家康、これを聞きて、いとあはれなることかな。女一人はゆるさむとて、其の由を傳へしめけり。女の喜びは如何ばかりなりけむ。

彼は、澤橋某が妻にて、夫死去りて後、彼の八郎の乳母の介添にて、俗にさしと呼ばるゝことをつとめたるものなりき。

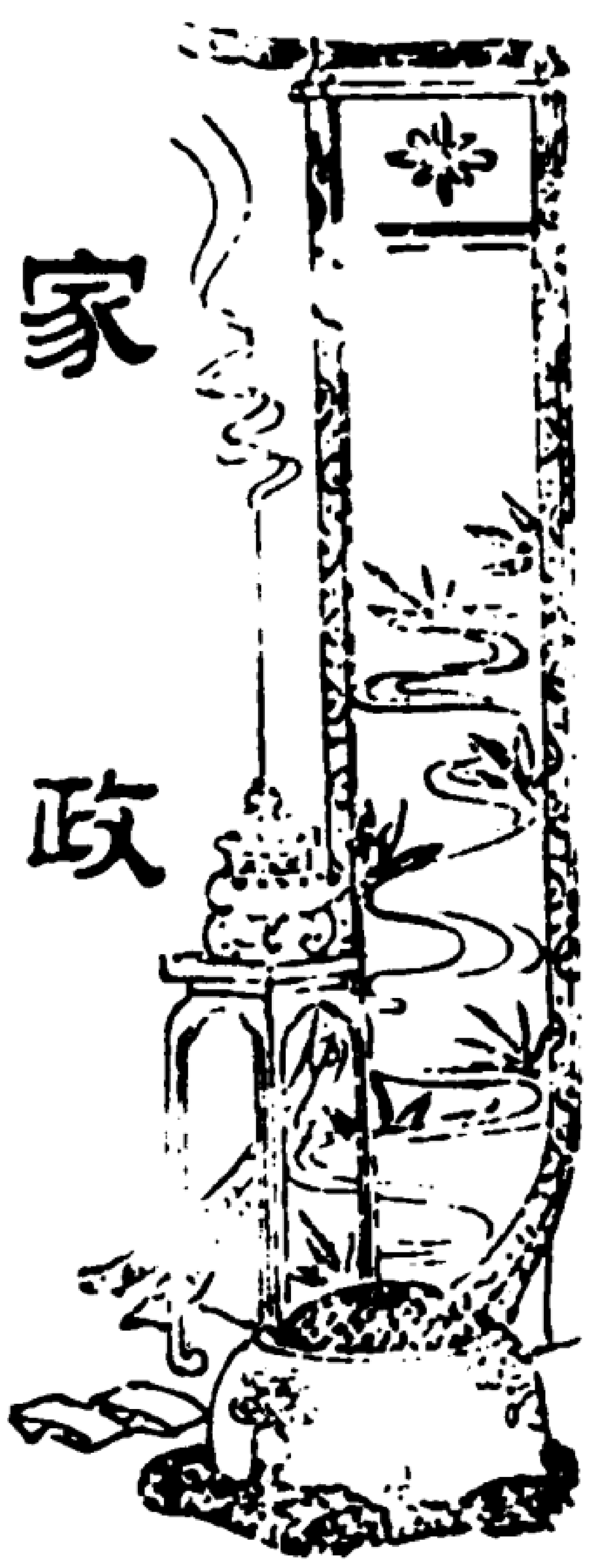
かくて、御供をゆるされ、いよ／＼出でたつ際になりしかば、わが子をいだき秀家の夫人の前にゆきぬ。若君の御上、あまりの御いたはしさに、一度は、この幼兒諸共死なむとさへ覺悟きはめ候ひしものから、斯く、わが願のゆるさるれば、さすがに、是が上もいとほしう。まことに、女々しき心と嗤はせ給ふらむも耻しかれど。且つは、亡夫

の遺子とて、思ひすてがたくなむ候ふ。このたびのことを恩がましうと、世の嘲も恐しうは候へど、もし御側の人々に仰せられて、たよりなきものを人ともなし給はらむと、涙をおとしてたのみ聞えけり。よし鬼なれぞとて、この女のたのみをぞ、むげに得しりぞけむや。夫人も、この物思はおなじことなりき。ことには、彼が眞情を、神とも佛とも頼みきゆる身には、なでう違背のあるべき。まことにわが子とこそ思はめ。疎略あらじと、くれ〳〵も慰められければ、いと喜びて、あまたゝひ、其の恩を謝し、さて八郎を抱き秀家にしたがひて、八丈島におもむきぬ。

（未完）



家政

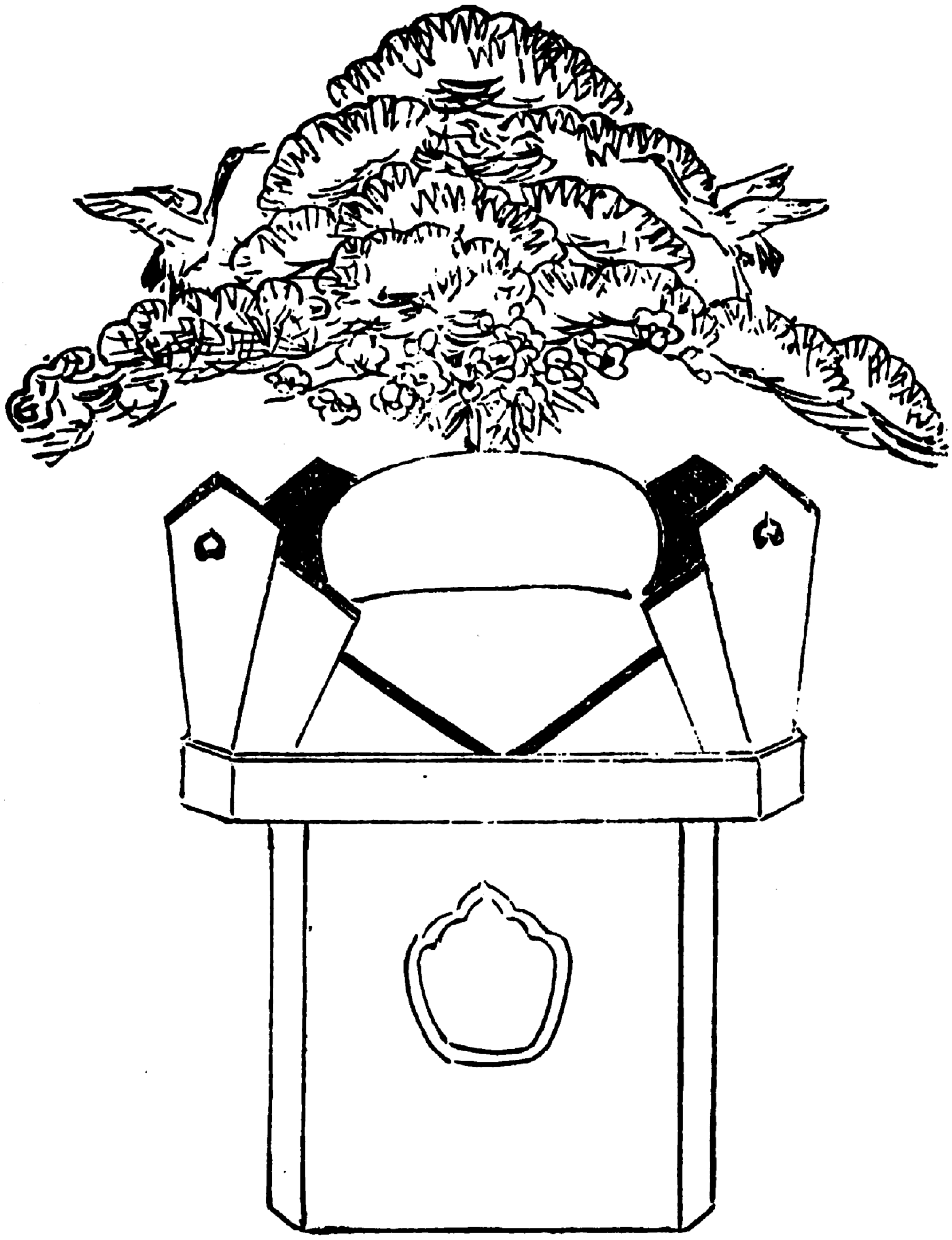


初春の慶賀

有住常子

鏡餅の圖

此の餅蓬萊は、婚の節に神ゆかにそなへまつる物のさまにして、餅は三方の大きさによりて、八寸にも、九寸にも、壹尺にもつきて、又四すみの紙は表を大奉書にて、うらを紅奉書にて折なして、つくるなり。餅の上には、作り花を立て、其の花は、松、白き梅の花と、小笹をもそへて、そが枝



にまひたる鶴、およびすでもりをもおきて、あるは龜のかたをも餅の上に置くべし。此のさまを春の初なればうつし出しつ。



松上の鶴の御だいの心にも、かなふべけれどとて。



臨時の客の應接（六）

三石直子

程なく盃も納るべき樣子ならば、間を見合せ、一寸勝手方へ、茶の事を心づけおくべし。さて、いよ／＼盃納りたりとも、主人の差圖うけたる後ならでは、銚子德利を引くべからず。

客人飯にかゝり、主人より、もりかへて上ぐべしとの云付あらば、給仕通盆を出す。もし客人、それに及はすとあらば、そろ／＼盆を引き、其のまゝ元の座に戻り、直に勝手方にゆき、手早く盆の上へ土瓶敷を置き、茶土瓶をのせ持ち出づべし。

主人より客人へ、御茶漬にと挨拶あらば、茶土瓶を盆に載せたるまゝ、客人の前に持ち出で、茶をかくるとかけざるとは、客人の心にまかせ、元の座へ持ち下りおくべし。但し、茶をかくる時は、茶漬茶碗を盆へうけとり、自分の前に置き、飯の上一面にかくる樣にし、兩手にて盆を持ち、膳の脇へ出すべし。

給仕の時は、即ち、通盆をわが前に置き、飯鉢は通盆の右に、茶土瓶は我が左の方におきて、備をすべし。但し客人と主人との居所によりて、差略あるべきことなり。

酒の肴、小皿の類は、他の給仕して下げしむべししかし、客人の膳のまわりの小皿等は、そのまゝにおくべし。若し、他に人なき時は、早手廻などして、給仕の間をぬすみては、追々に下ぐる等のことあるべからず。客人に心せわしくおもはせ、はなはだ失禮なり。給仕は、たゞ客人の茶碗へ心をつけ給仕すべし。

主人より御飯を御替なされといふ。此の時は、給仕飯鉢と盆とを前の通り持ち添へ、客人の前へ

出で、自分の脇へおき、客人の膳の右の脇へ盆を出し、飯茶碗をうけとり、自分の前におき、飯鉢の蓋を両手にて取り、仰向にして飯鉢の脇に置き、茶碗の縁へ指の障らぬ様に両手して通盆より取りあげ、左の手の平へ載せ、右の手にて、茶碗の眞中を目當に、二杓子半ほどに飯を盛り、杓子を飯鉢の縁へかけて中へ入れ、飯茶碗を両手にて盆にのせ置き、また、両手にて元の通飯鉢の蓋をして、さて飯茶碗を盆に載せたるまゝ、客人の取りよき様にして、膳の右の脇へ出すべし。飯を盛る時、飯鉢の中を堀る様にすべからず。又、飯のかたまりは、飯の替前に手透を見合せ、向より手前へ、かき寄する様にして、杓子にて二三度にほぐし置くべし。この時といへども、飯鉢の蓋、杓子等の取扱は、勿論前の如くなるべし。

折方

玉包

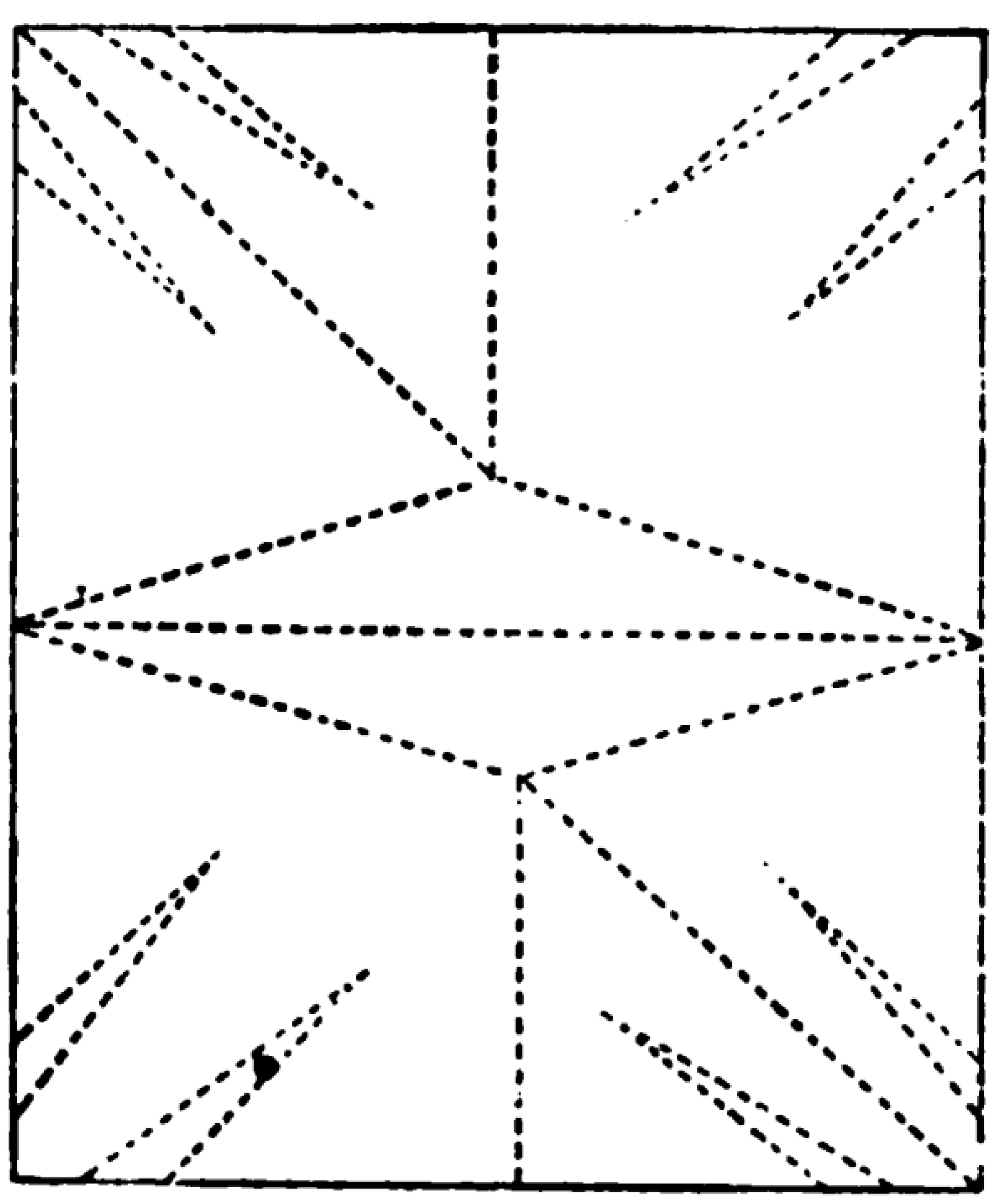
有住くわう子

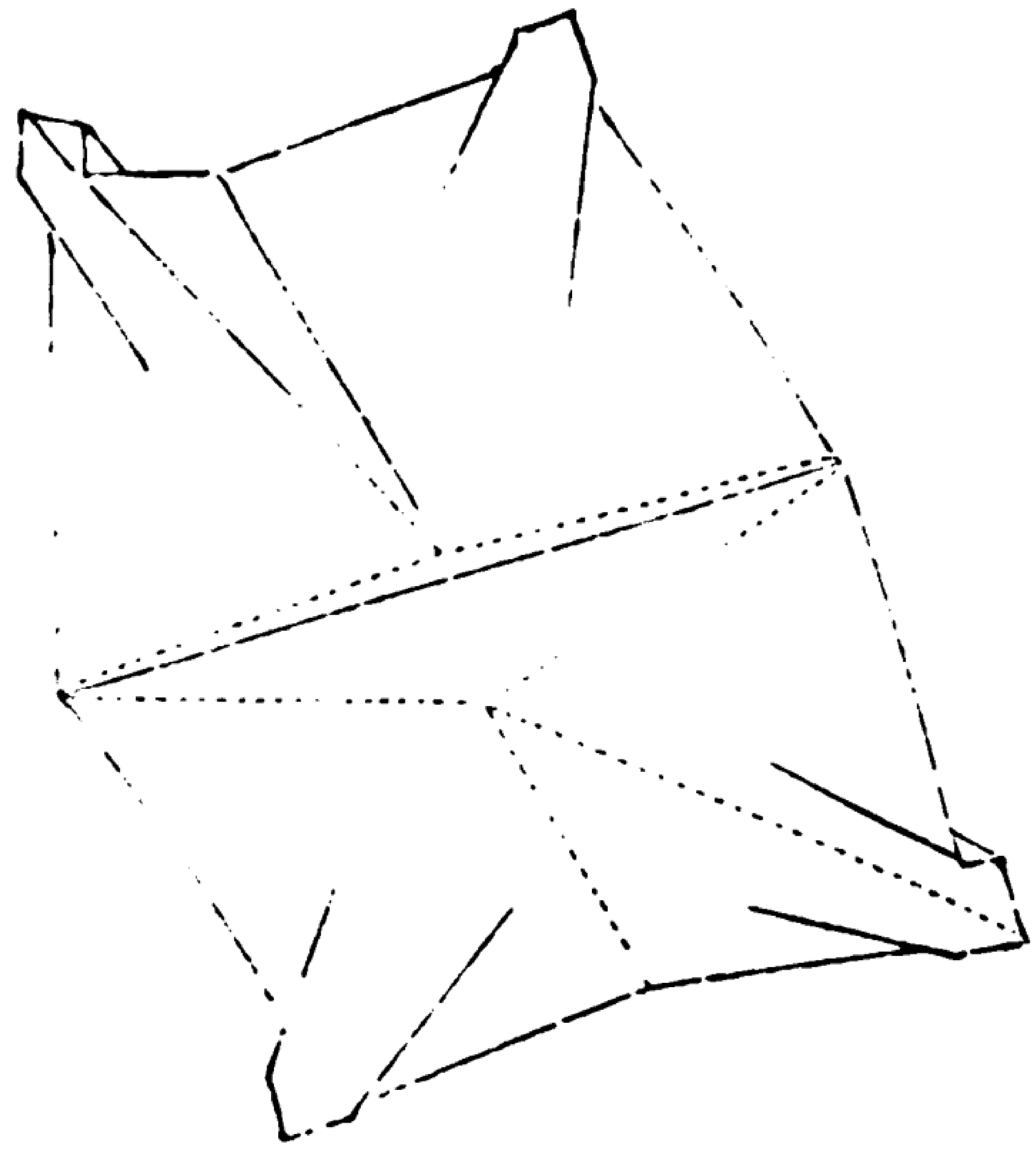
此の内に入る品は

一みかん　一かや　一かちくり　一からし　一たちばな　一ごまめ　一こんぶ　一梅ぼし　一ころ柿　一ところ

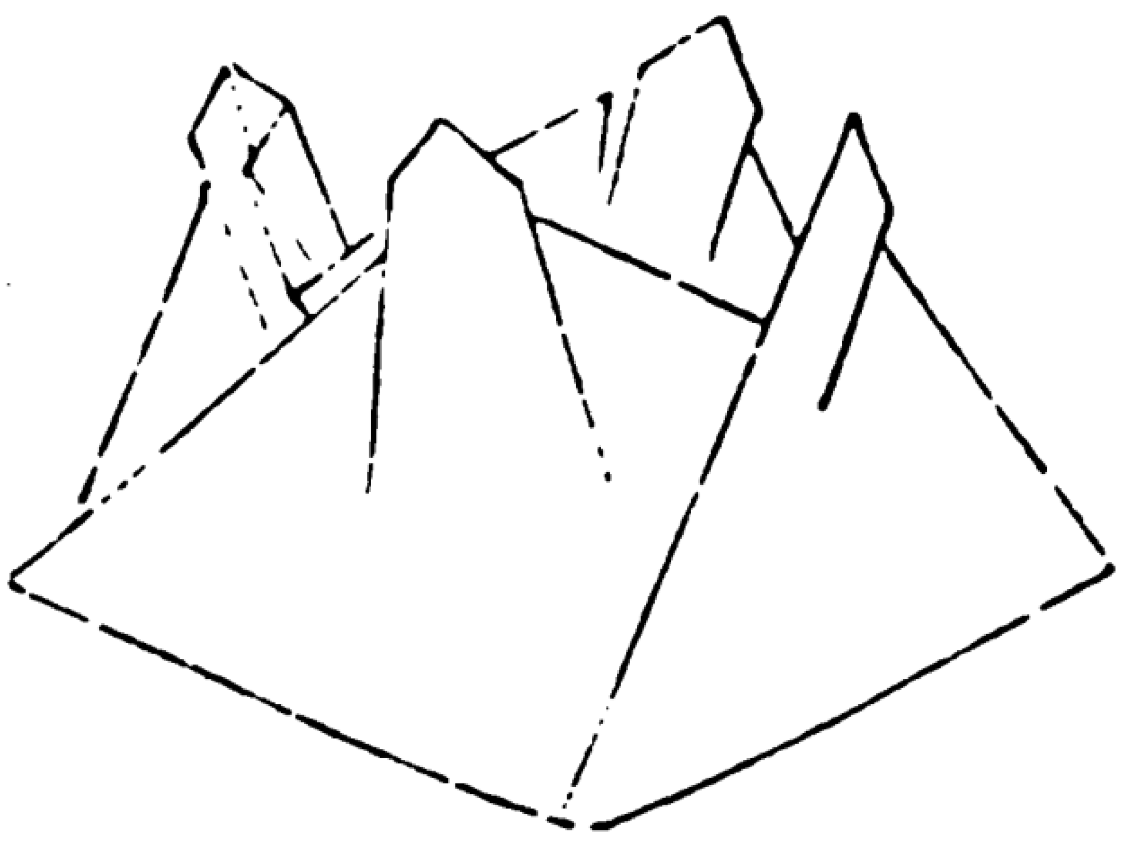
これら、十種を入れて、正月の餅蓬萊の上に置くなり。

(第一圖)

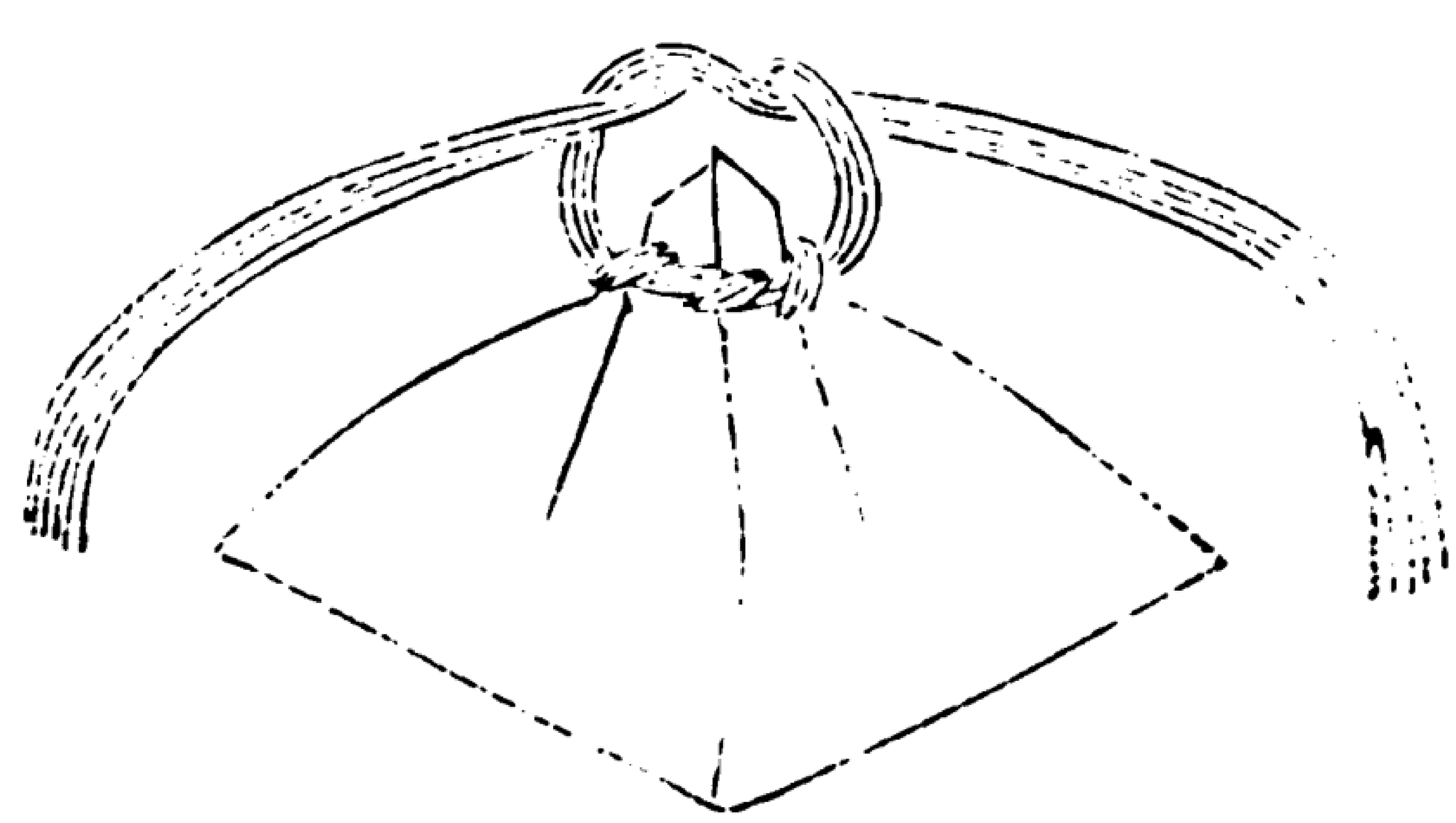




（第二圖）



（第三圖）



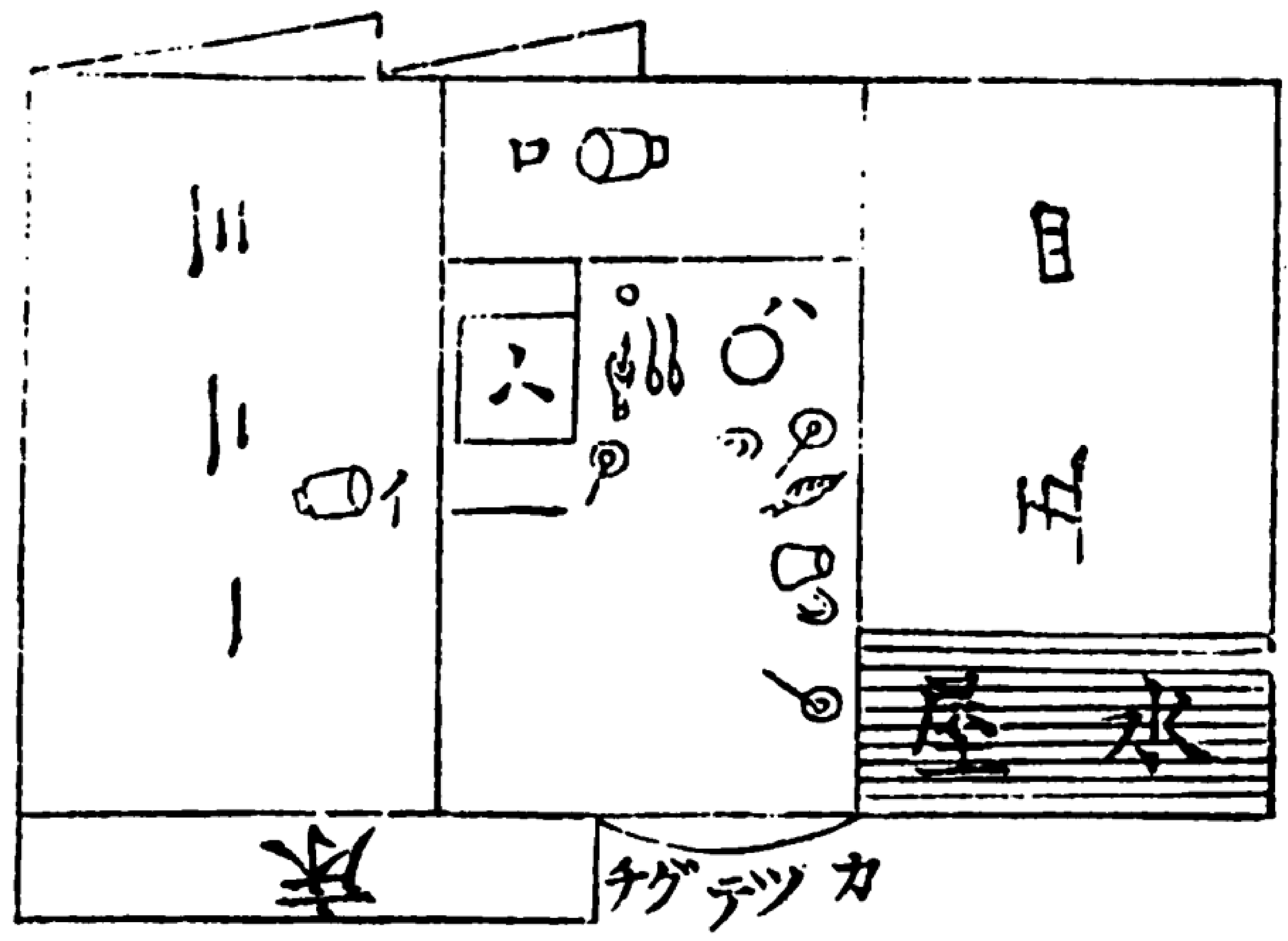
（第四圖）

茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵碌仙齋不羨
關 葦雄

久田宗全好三疊、此の席は、特に異評に至て、

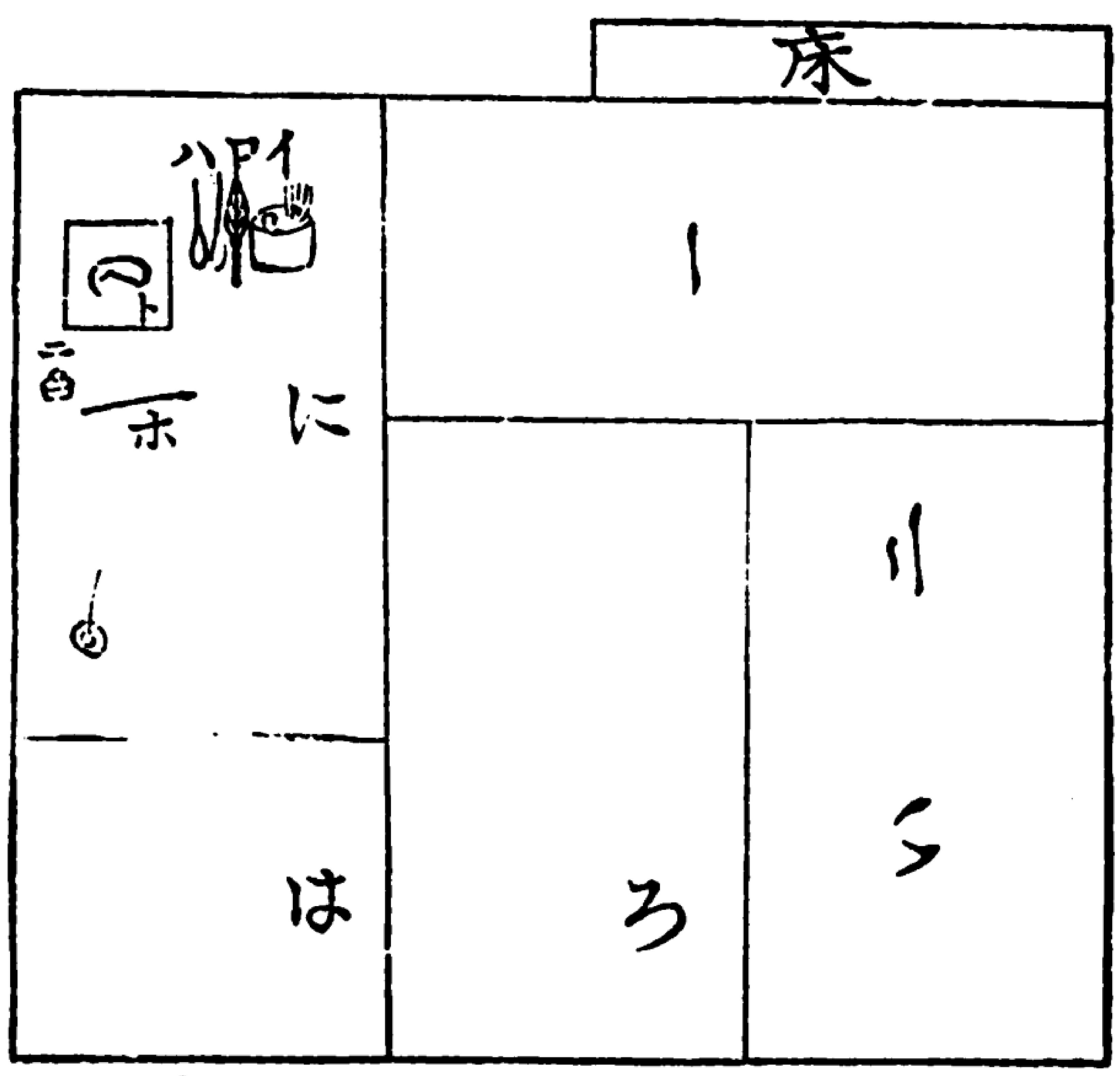


洒落なるものの故に、爰に掲げ、猶炭手前を示教す。點前を中に取りて、左右に客を列坐せしむ。頓と向切左手前の通り故、別に示さず。

一二三以下は客員の並び方なり。

風爐置方、及、炭手前及疊名稱

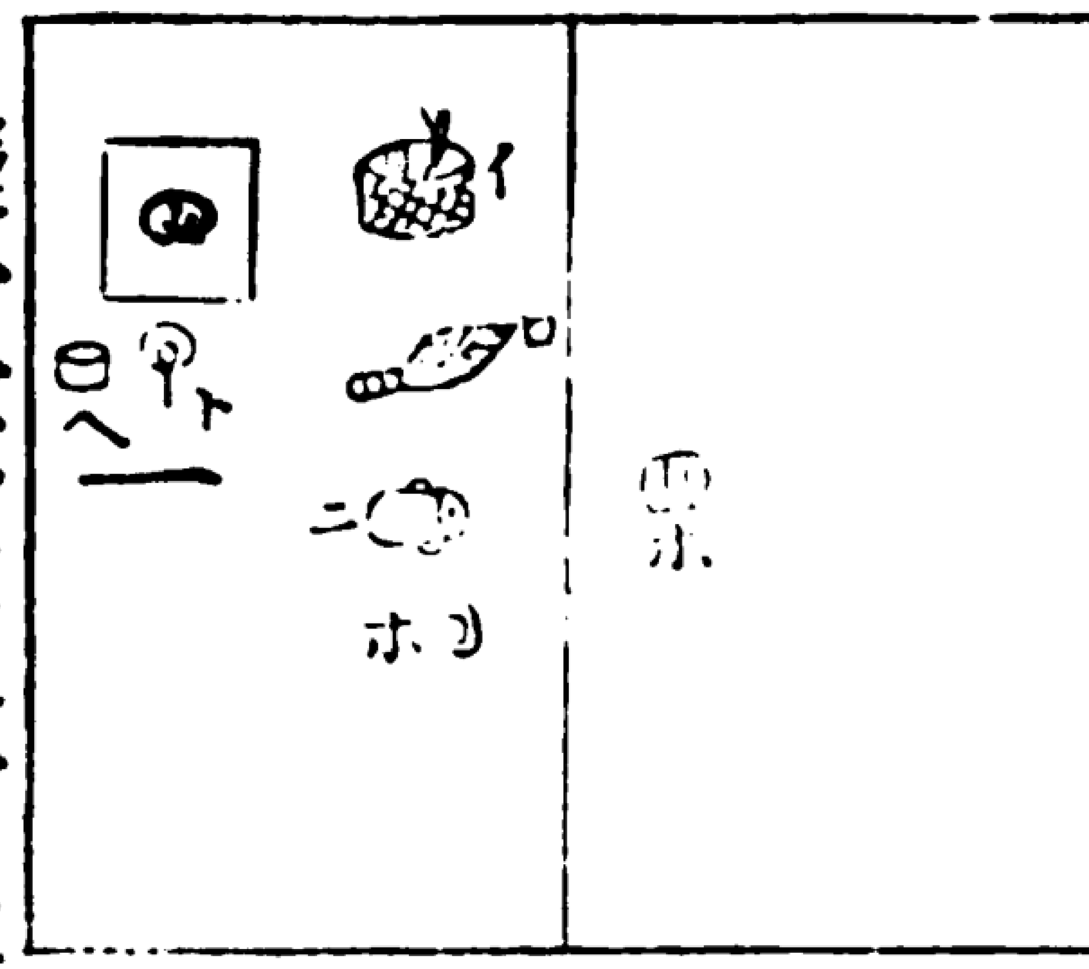
一、貴人疊　二、客疊　ろ、爐疊　は、踏疊　に、道具疊



イハ炭斗
ロハ三ツ羽
ハハ火箸(但シ拔張)
ニハ香合
ホハ主居前風爐ノ正面
ヘハ灰爐錄
但シ以下疊數ハ必要ノ外略ス。

風爐置方は四疊半なれど小板の向角疊の此點の間三尺を二つ折にして其眞より一寸向へ出して置なり左り方壁付は九つ目七つ目等疊の織目にて敷を取風爐の大小と水指又は棚物の大小により折衷して置合なり。

風爐炭手前



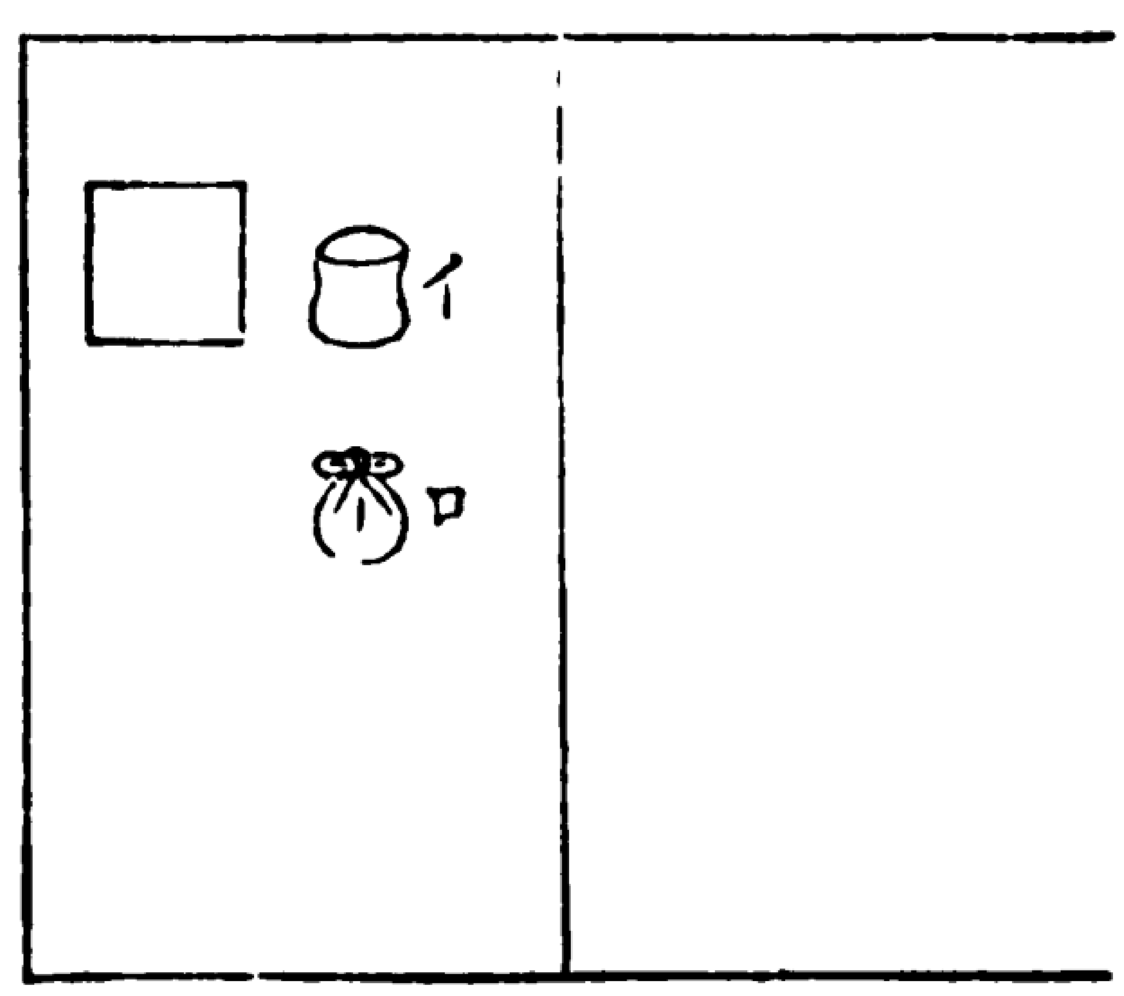
第二 イ、炭斗 ロ、三ツ羽 ハ、釜ニ鐶 ホ、香合 ヘ、香 ト、方六

香合の蓋は、膝の前、又、香合好まれたらば、圖の處へ出す、客方返却するも、同じことなり。風爐の炭手前は、下火を前の方へ片付け、胴炭は、向の方へ入る。枝炭砲鉄へ假置なし。故に炭取へ枝炭組入時、炭の上へ不載様にすべし。釜の鐶も火箸ハ不掛鉄と鉄とは不面白故なり。

濃茶入飾付

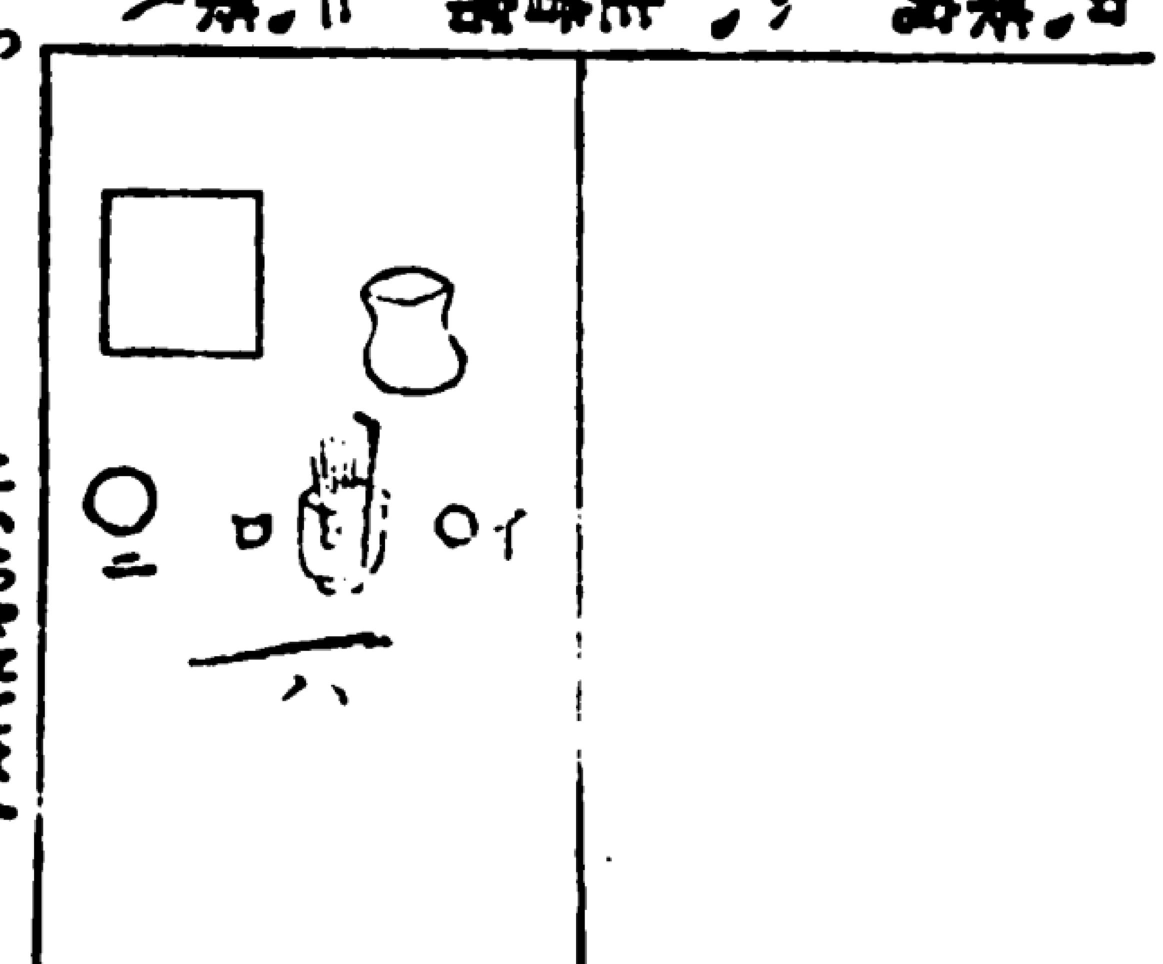
客へ案内す
水指は釜の環付を眞に取置合、茶入は水指の眞中

イ、水指 ロ、濃茶入



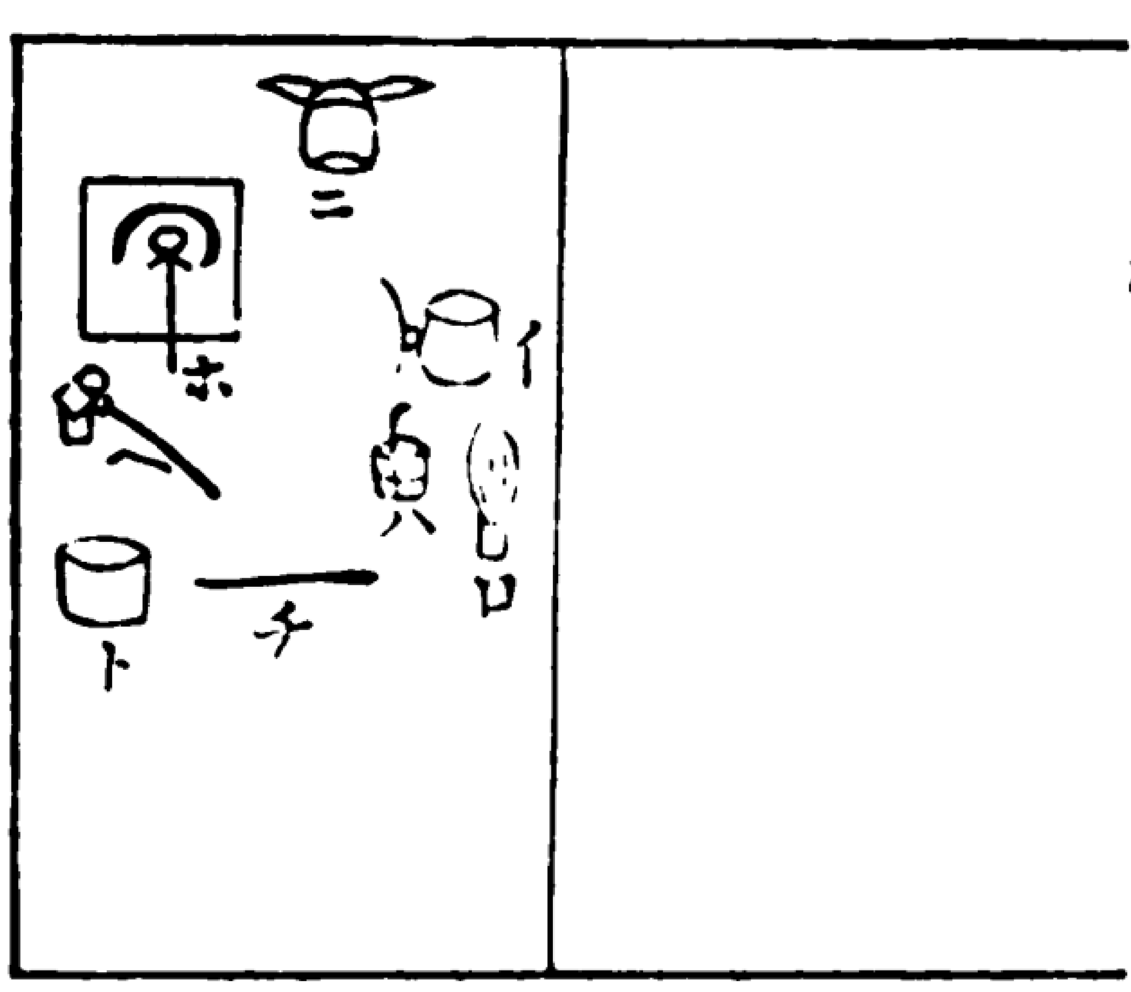
客方席入して、亭主茶碗持出、假置濃茶器、右方へ寄せ、茶碗置合たる處
居前は疊の眞中

イ、茶碗假置タル處 ロ、茶器 ハ、主居前 ニ、茶入



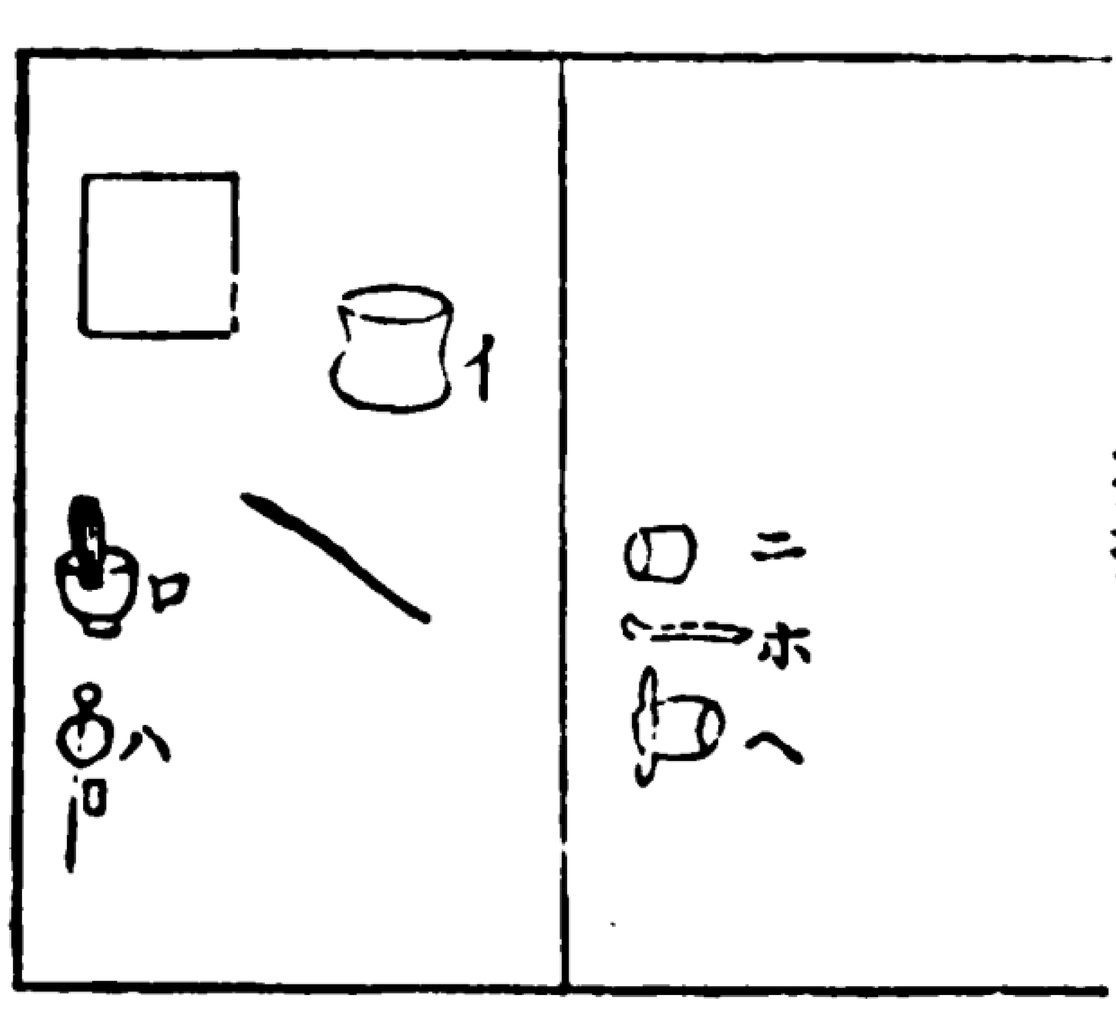
茶入茶碗は水指と三鉄輪に置合

イハ水指 ロハ茶筌 ハハ茶入 上ニ茶杓蓋ノ洲アラハ客付へ向ル ニハ袋 ホハ釜ニ掛タル柄杓ヘハ蓋置柄杓 トハ建水 チハ居前 リハ茶碗 ヌハ帛紗



濃茶點前置合

イハ水指 ロハ茶碗假置 ハハ柄杓建水蓋置 ニハ茶入 ホハ茶杓 ヘハ盆三器客へ方出シタル茶杓

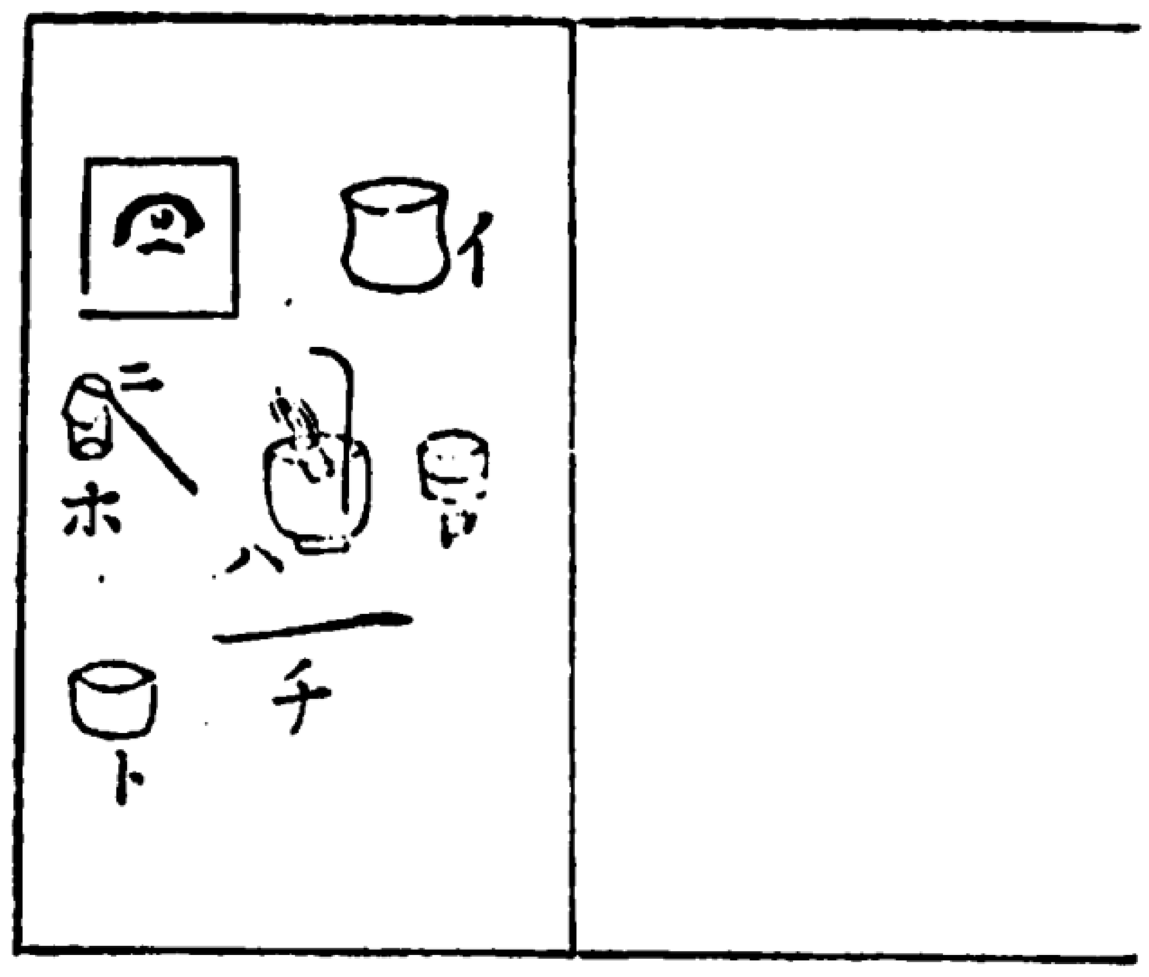


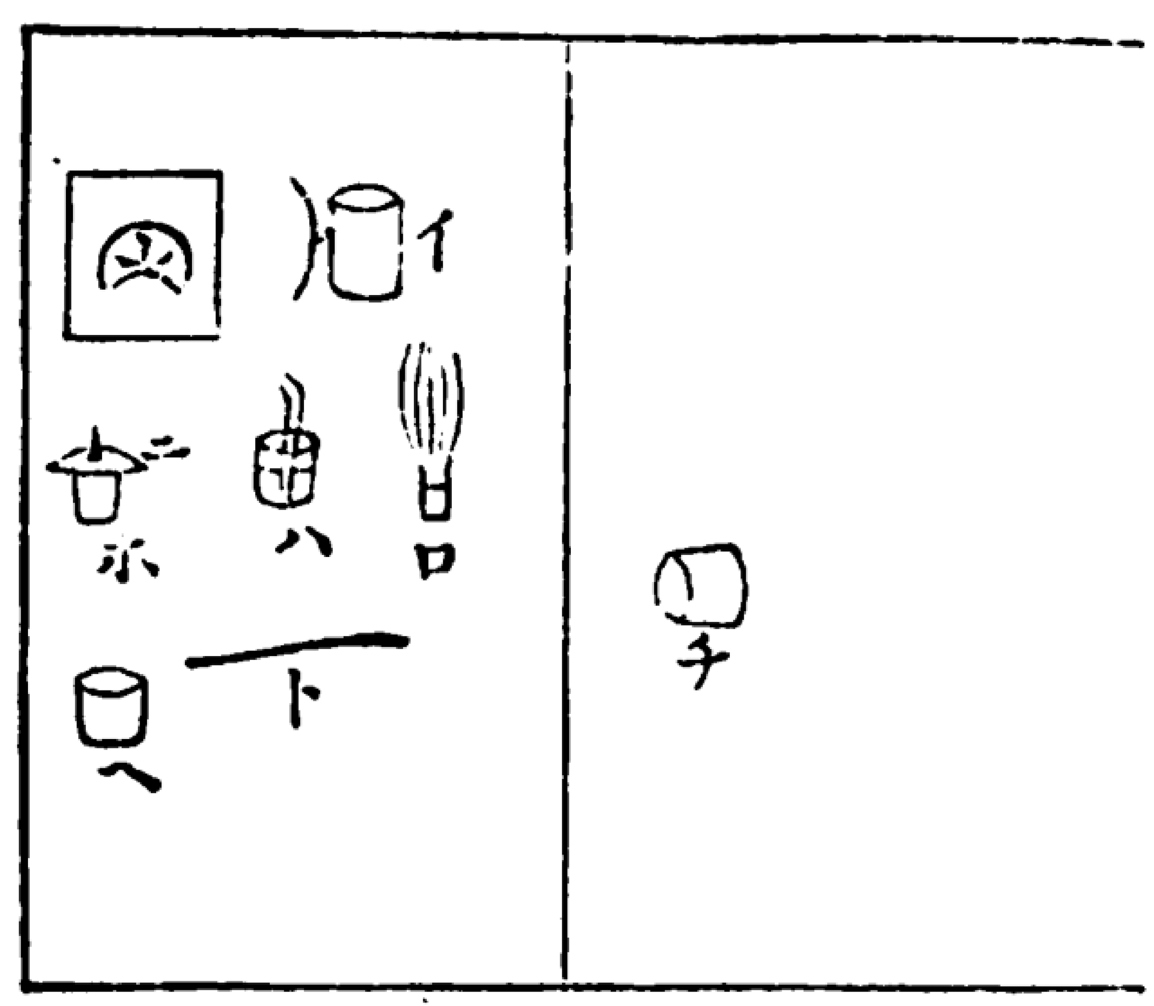
柄杓置ハ勝手付壁ノ方縁ヨリ三ツ目小松ノ方モ三ツ目程見斗　返すは此の反對

風爐には中仕舞とて、我居前の正中へ茶入と、※

風爐薄茶手前

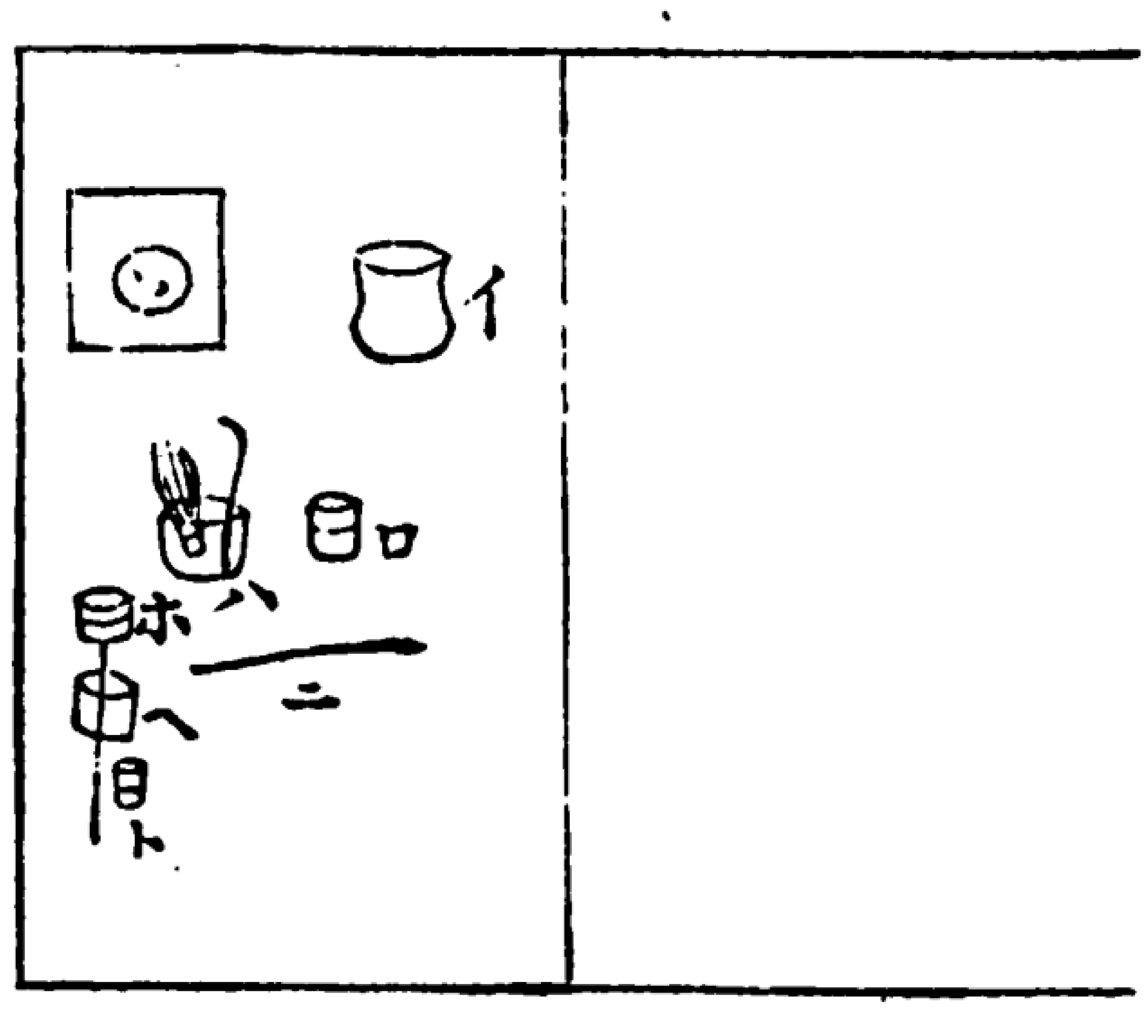
イハ水指　ロハ薄茶器　ハハ茶椀内ニ茶巾茶筌茶杓　ニハ柄杓
ホハ蓋置　ヘハ翫器　チハ居前



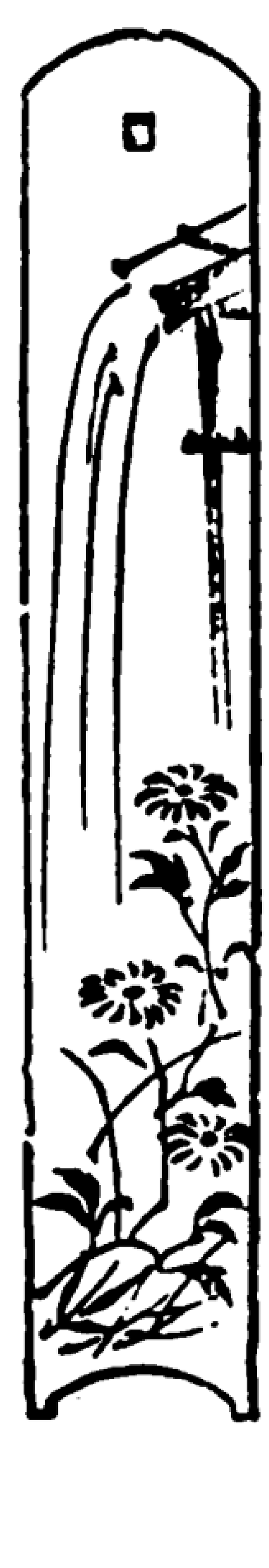


イハ水指　ロハ茶筌　ヘハ薄茶器上ニ茶杓　ニハ釜ノ蓋　ホハ蓋置　ヘハ翫　トハ居前　チハ茶椀出シ場

＊茶椀を置合する事あり。此の時は、茶杓を掛けて、直に右手にて、茶椀の左りの膝頭の邊に置、又、直に右手にて茶入を茶椀と置合、而后に帛紗を拂ひ、腰間に付くべし。風爐は中仕舞無レ之、直に客方へ、一膝朱引の見當に、客方へ向ふべし。又、服加減も如何なと、客方へ挨拶すべし。茶銘詰主も問はれたらむ答ふべし。例の上林竹田酒田抔云ふたぐひなり。



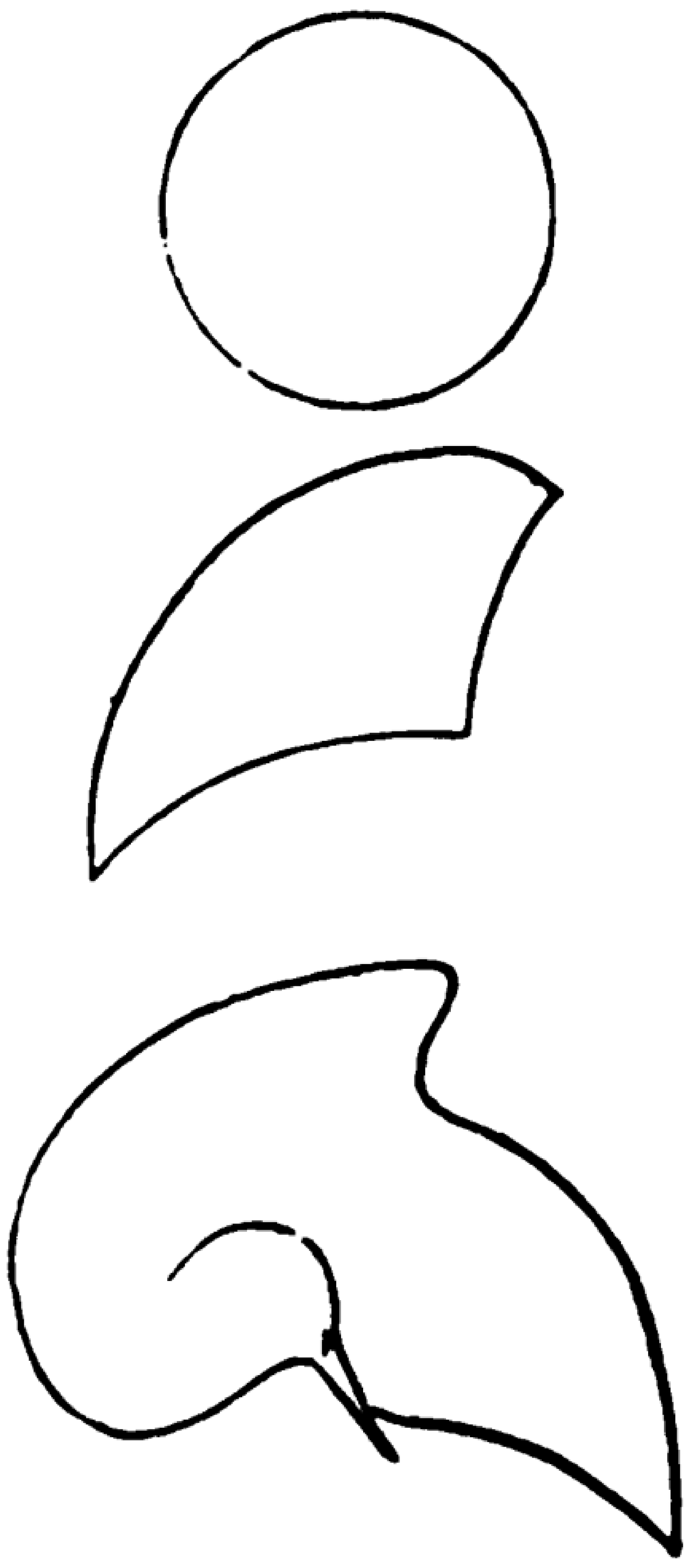
イハ水指
ロハ薄茶器
ハハ茶椀茶巾茶筌茶杓
ニハ居前
ホハ柄杓
ヘハ翫器
トハ蓋置



たちぬひ

西山たん子

背負守（承前）日の出に鶴



圖中頭にあたるすぢは切りおくなり

まづ厚紙を、右の形に切るべし。丸きものは太陽に形どりたるものなれば、之には綿少許を入れ、緋縮緬などの紅き切をはりつけ、鶴は、白ちりめんか、白絹か、何にても白き切をよしとす。胴になる所を、綿を厚く入れ、尾、翅のさき等は次第にうすくし、嘴は厚紙の切めよりは、少し大きに切り、口むしの切のさゝくれぬやうに、よく裏がは合せに、のりにてはりつけ、翅、尾とも、ぐるりと裏がはに返し、のりにてはりつけ、今一つの翅にも、綿を入れ、切をはり、其の上に、胴をはり返し、すみにて、羽のすぢと尾と、首とを畫がき額に朱を入れ、日の出の上にはりつくべし。

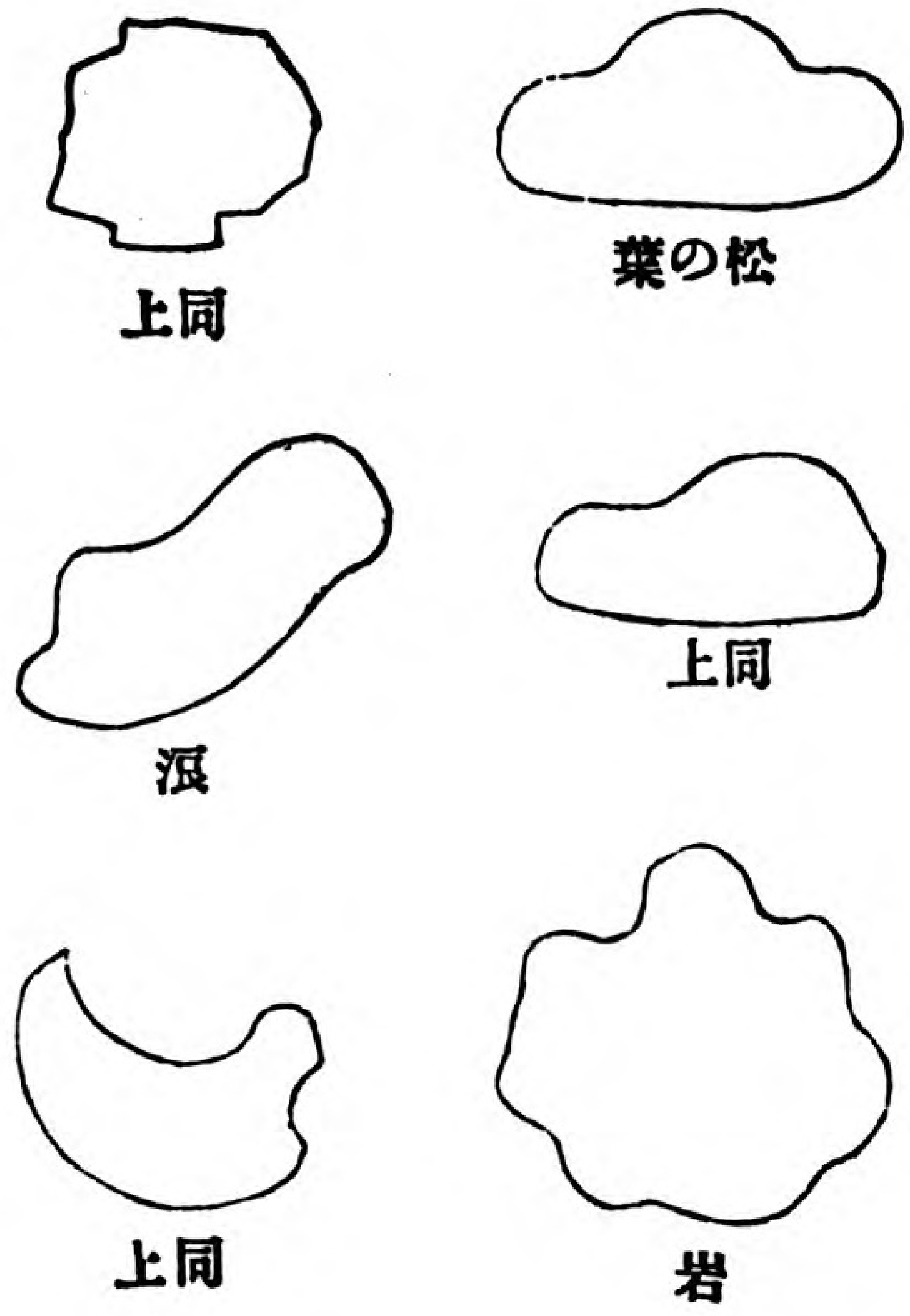
左の圖を見て、よろしく推し給ふべし。



あたまの頂をあかくすべし

鶴亀

鶴と日の出とを、前圖の如くつくりおき、亀をも、亦た、前回にものせし如くつくりおき、之に松、及び、浪等をそへて、恰好よくするなり。左の圖の如く、松浪等を厚紙にて切り、綿を入れ、切をはるなり。



松葉はみどり色の濃さと、うすきとがよろしく、巖は、かむ色などよろしく、浪は、水淺黄等の切を用ふべし。而して、松葉、浪等を墨、金等にて畫がき、巖にも、すみ又は、みどりもて、こけやうのものを畫くべし。さて、それを鶴と亀との間にはさみ、のりにてはりつけ、裏をも切にてはりつくべし。圖を見てくみ合すべし。



鶴の上なるまろきところと鶴と岩亀松との間とは日の出のかたちなればあかくすへし

だいどころ

季節料理

栗のきんとん

生栗の皮を剝き、澁を去り、水につけ置、これを、鍋にいれ、火にかけ、沸騰ちなせ、直におろし、ふたをなし、二十分間程蒸し置時は、栗は、軟らかくなるなり。(軟らかくなるまで、湯煮する時はくずるゝものなり。)これを、砂糖のあくを去りたる汁にいれ、食鹽少量を加へ、文火にて、廿四五分間煮たる後、栗を、器にあげ、さつま芋の皮を去り、二三分程に、輪切になし、ゆで　、裏漉にかけ、前の如き、砂糖の汁に、鹽を加へ、鍋に入れ、其の中へ、漉したる芋を入れ、あんをねる如くかきまわし、能煮つめて、能程になりたる時、前の栗を入れてくるむなり。

又、かち栗にて製る時は、十分間程、湯煮して後前の如く、鍋に」ふたをなし、蒸し置なり。

カステーラ玉子

きす又は、海老の類の、皮を去り、肉を、能くたたき、摺鉢にてすり、裏漉にてこし、又、摺鉢に入れ、鷄卵、少しつゝ入れ、能すり交せ、これに、味淋食鹽を加へ、味をつけ、玉子燒にて、燒たる後、布巾にて置き置て、小口より五分位にきりて用ゆべし。

たゝき小鳥

小鳥の毛を去り、わたをぬき、骨肉共こまかにたたき、能程に平たくなし、醬油を付て、燒べし

はせの大根卷

大根を、二寸程に切、皮を去り、丸のまゝ、薄く

へぎ、はせの焼たるものを、へぎたる大根にて、こぶ巻の如く巻て、かんぴようにて結ひ、鍋にいれ、湯煮して、軟かくなりたる時、味淋醤油にて、鹽梅し、煮込べし。

栄花園

冬のくさ木くさ〴〵　（十六）

○冬梅　梅は春さけども雪まに咲き匂ふを、かくは云ふなり。

哥　六帖

いつれをはわきてならまし梅の花
　枝もとをゝにふれるしらゆき　貫之

同　拾遺

霜かれに見ねこし梅は咲にけり
　はるには我身あはんさはすや　家政

千載

山もとの垣根の梅は咲にけり
　かはかりこそははるも匂はめ

○早咲梅　早梅寒梅、いづれも早く咲たる梅をいふ。さて、早梅は、十月前冬至前に花を開くと梅譜にあり。また寒梅は香なし。九月、花開くと花譜にあり。あるは十月の季に出したる俳書もあれども、俳には十月の花は、かへり咲とするゆゑ、本月ころさくものは、たしかに早咲梅と云ふべかんめる。

○臘梅　常の梅の花にはあらず、花の形狗蠅に似たり。故に別名狗蠅梅ともいふ、色黄なり。香、甚し。故に檀香梅ともいふ。又色によらで淡黄梅ともいふべし。本朝は後水尾帝の御宇に始めて、朝鮮より貢す。梅に似て梅にあらずと活法に出づ。

○探梅　冬の末に梅をたつねありくを云ふ。

俳

香を探る梅に家見る軒端かな　はせを

○寒竹子　孟宗竹、薩州に生ずる竹、冬筍生ず。小さくして、味美なり。鳳尾竹といへる竹にも、冬筍生ずれども、細くして喰ふべからず。三才圖會に出づ。

冬の筍を孟宗と名つくる事に深き意味ある事は、皆人の知れる所なるが、善事は、いくたび聞かんも惡しき事やはある。そも〳〵唐土呉の國に、孟宗となもいへる孝心ふかき人ありけり。母いたく筍を好ませたまひけるが、老ぬるまゝ、兒供かましうなりて、未だ春の氣ざしもなく、雪のいとうふれる日、母、孟宗をよびていへけるは、我は、筍をたうべたし。かしこの竹籔にゆかば、筍あらむといふまゝ、いまはいとう雪ふり黄泉のその下をも凍らむに、筍などのあるべしやとは思ひしも、母の命なれど、鋤を肩にして、やぶのかたはらに行きてそゞろになみだくめり。あはれ、かゝる孝心のものには、神もめでたまひて恵みかりけむ。けなる事には、林のかなたこなたに、筍ありけりとか。これなむ彼の國の、こと〴〵しく云ふなる廿四孝の一なる。今はしも、此の竹の根に草藁などしきて、早春筍を出す事とはなれり。

一月手入すべきくさ木

門には松をかざり、神壇には、御年之神若年之神を齋きまつりて、屋内の人たち去年のあかをは拂ひきよめて、心をもあらたまりて、すが〳〵しく、なにとなくはえある心地ぞする。新たまの年の始のことほぎ聞えんと尋る人ひきもきれず。海山遠くたちへだてゝあらむ、友どちよりは、霞みあへぬ空ながら、あらたまの年の始と申せど、何となう、いと長閑やかに、立てなべし御旗しるしの初日影、外國人もゝろともに仰ぎまつりて、代の御光、いやまし輝き渡る御よろこび、門の松竹す

ゑながく御いはひをさめ候云々。

なほ〳〵、このころの寒さは、なか〳〵にいとなん堪へがたきを、御いたはらせ給へやなど、雁のたよりいく百章、いと、いとまなく、げに改暦とはいひ、時まさに極寒にむかはんとしつゝあれば、植物に手入など、思ひもよらぬ事ならめど、少しなりと暇あらむには、右のものだけは、何卒何卒御手入して置かれたし。

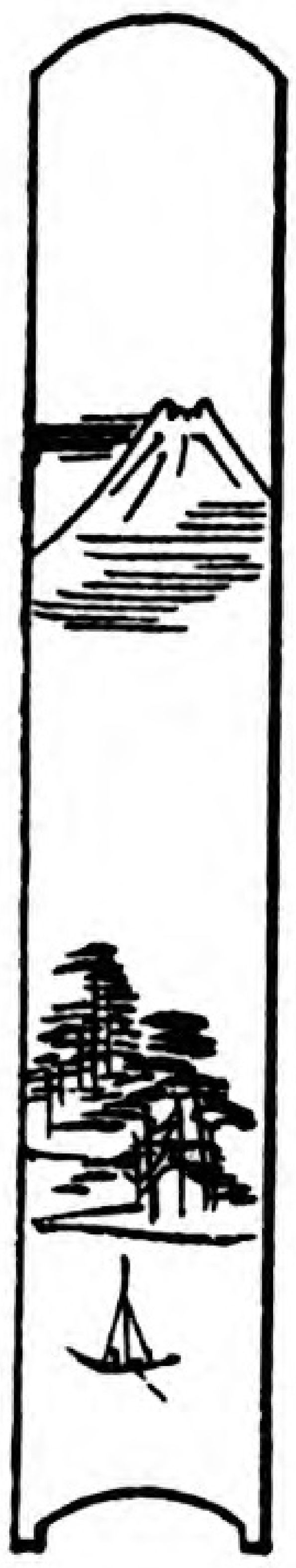
分栽すべきもの

水仙　桑　櫻草

移植すべきもの

海棠　柳　梅　櫻　桃　林檎

すべて、落葉木は移すべしと雖も、根を凍らしむること勿れ。



學藝



學園に學藝とあらためたるは、深き意あるにあらず。唯、世運の進歩にともなひて、女子必須の學術技藝極めて多くなりぬ。今後は即ちこの欄に於いて、これらの學藝について種々有益なる材料を收めむことを期す。

國文學講義

磯野徳文

初學の人々に、國語、國文の意義を解き示さんとてするなり。先、近代の人々の書かれたる文より、はじめて、やう〳〵、ふるきよの文にさかのぼらんとす。用書は、必しも一定せず。我が國の女子の心得べきほどのことがらをど、何くれの書より一節二節とぬき出でゝん。釋きざ

まは、くだ〳〵しきをかへりみず、專、平易を旨とせり。

（一）

太古に、　皇祖天神、國土を造りて、萬の神を生み給ひ、　皇孫を降して、天下の大君と定め給ひしより、　天皇つぎ〳〵　天位をしろしめして、天神をまつり、仁政をしきて、蒼生をなで給ひしかど、臣民は、まごゝろを以て、朝廷をたふとび敬ひしに、　天神ます〳〵幸福をくだして、　皇威海外にかゞやき、三韓したがひて、秦漢の後人まゐり、百姓ゆたかに、事たりとゝのひて、大日本國の名、いよ〳〵あらはれたりき。これ我が國上古の大體なり。

爾來三千年の間、おのづから盛衰はあれども、臣民の精神は、かはらずして、皇統一系の　天皇をあふぎまつること、なほ、天日を仰ふくが如し。彼の海外萬國の、朝に君となり、夕に臣となりて、定めなきものにくらふれば、豈、たゞ、天壤の差のみならんや。

○この文は、師久米幹文翁の書かれし大八洲史といふ書の端書の一節なり。翁は、常陸の水戸の人にて、性誠實に、神を敬ふ心深く、國學に名高かりし人なり。著書の數もすくなからず。明治廿六年、齡六十四歲にて、みまかられたり。

○太古は、タイコにて、むかし〳〵のおほむかしをいふ。この世の初の時に、となり。古は、イニシヘとよみて、徃ニシ方、又は、去ニシ方などのこゝろなり。我が國の語にては、ふるくより、方角にへといへり。時の上にめぐらして、過ぎ去りし方即、むかしといふことにあたるなり。およそ、語には、固より我が國にはじまれ

るど、外國のを用ゐたるとあり。心をとゞめなば、自、わきまふることを得べし。今用ゐる漢字なども、もと、我が國のものならず。昔、應神天皇の御代に百濟（今の朝鮮）より、論語と千字文とをたてまつりしを始として、漸、我が國に用ゐらるゝに至りしなり。平假字も漢字を草書に略して、其の文字の音を假りたるなり。古を音にてコとよむは、其のむかし、彼の國にていひしこゑを、其のまゝよぶなり。この文字、我が國のイニシへといふ語と義かよへば、假りて當てたるなり。文字の用ゐざまは、大方皆かくの如し。

〇皇祖天神、こゝには、クワウソテンジンと讀むべし。又、スメミオヤ、アマツカミとも讀むべし。 天皇陛下の 御先祖の神々を申し奉るなり。皇は、スメとよみて、統べくゝるこゝろ。君は、國中の親にて、萬の事を統べくゝりて、治め給ふより、天皇を申し奉るなり。祖は、オヤとよむ。君のオヤにまします故に、尊みてミオヤと申すなり。ミは御の字にも當りて、尊み敬ふこゝろなり。古は、我を生み給ひし親のみならず。さかのぼりて、祖先までをも、オヤといひならひしなり。先祖をトホツオヤといひしにても知るべし。我が身よりは、遠きむかしの親といふ義なり。ツは、今いふノに近し。天神は、高天原とて、天上におはします神なれば、かく申し奉るなり。

〇國土は、コクドと讀むべし。又たゞに、クニともよむ。今、我人ともに、住まふ、この國なり。おしひろめては、この地球をもいふべし。

〇造りは、ツクリなり。未、國土の成りとゝのはざりしを、造りかため給ひしなり。

○萬の神を生み給ひ、ヨロヅのカミをウみタマひとよむ。萬の神といへど、必しも、數にて、一萬と限りていふにあらず。多くの神々といふほどのことなり。萬の事、萬の物などの萬といふにひとし。給ひは、語のこゝろ、まはり遠くして、さとり難かるべければ、後にいふべし。只、尊み敬ひていふことゞと知るべし。今の語にて、なさる、又は、時によりては、下さるなどいふに當るべし。　（つゞく）

漢文學講義

佐々木天游

猿說

齋藤馨

猿之演レ劇也。衣冠焉而爲二士大夫一。裙帶焉而爲二婦女一。且立且坐。且周旋。且進退。擧二古忠臣烈婦之情狀一。一々依倣。視レ之儼然人也。而或擲二一果于其前一。則翻然自失。故態頓發。側二衣冠一曳二裙帶一。匍匐往食レ之。雖二觀者嗤笑一。弗二自知一也。嗚呼猿自飾而爲レ人。見レ果而爲レ猿。唯一果而人猿判焉。然今擧二君子于聲音笑貌一。而其節變二于斗升之利一者。是亦斗升而君子小人判焉。與レ猿何異。

猿の劇を演ずるや、衣冠して士大夫と爲り、裙帶して婦女と爲り、且立ち且坐し、且周旋し、且進退し、古の忠臣烈婦の情狀を擧げて、一々依倣す。之を視るに、儼然たる人なり。而して或は一果を其の前に擲つときは、則翻然として自失し、故態頓に發し、衣冠を側て、裙帶を曳き、匍匐して往いて之を食ふ。觀る者嗤笑すと雖、自知らざるなり。嗚呼猿自飾りて人と爲り、果を見て猿と爲る。唯一果にして人猿判す。然れども今君子を聲音笑貌に學び、而して

其の節斗升の利に變ずる者、是亦斗升にして君子小人判す。猿と何ぞ異ならん。

猿と云ふ獸の劇を演ずるで、芝居をなす時に當りてや、（也は語巳辭。又語之餘也と、字彙に在り。又柳宗元は決辭也とも云へり。此所の也字は、語之餘に用ゐてある字法なり。）衣冠を着て。（爲は字彙に語巳之辭也。又助語也。又淮南子と云ふ本の註には、爲猶レ於也ともあり、一口に申せば、ごゝにと云はむか如き意味の字にして、此所の爲字はやはり。語巳之辭なり。）士大夫（侍家老と云ふ意なり）となりて。男子の打扮をなし、或は裙帶で、裾を曳き帶を垂れて、婦人女子となりて、女人の打扮をなし、立ちてみたり、坐りてみたりし、又はあちこちと往來周旋し、（周旋は、左傳の僖公二十三年以與レ君周旋。註周旋相追逐也とあり。相往來して、世話するほどの意なり。）又は進みて出でみたり、退いて、入りてみたりし、古の忠義なる臣下の人やら、又貞烈なる婦女子の風情狀樣を擧け行ふて、一々依り倣うて、少しも違ぬ樣に、其のまねを演ずるものであるから、猿の芝居をしてをる所を視れば、儼然といかめしくして、人と少しも異なることなく。矢張人である。（所の也字は。決辭なり。人也は、人ぢやと云ふほどの意なり）（以上一段、猿の劇を演して、衣冠裙帶、儼然人と爲るの狀を寫す。）誠に立派なものである。然しながら、根が猿であるものから、若し或は人ありて、一個の果物を其の前に擲ち與ふれば、則ち翻然（ひらりとの意）として、自ら自己の忠臣たり、烈婦なりしとを忘失して、猿本來の魂情（故態は、もとの姿態と云ふことなり。）頓に（頓は・俄にと云ふに同じ。）發して、忽ち賤しき性根になり、今まで正しく着たる衣冠を側て、今まで形儀よく着たる裙帶を垂れ曳きながら、匍匐と、よつばひになりて、往きて果物を食ふ。醜態殆んと、捧腹に勝へぬものであるから、見物の觀客、嗤笑と、嘲り笑ふものありと雖も、自ら覺知せず、して、矢張むしやむしやと、果物を食うて省みず誠に笑止の限なり。（弗二自知一也の也は、決辭なり。）（而或より、此所の弗二自知一也迄は、今迄儼然と人のまねをなしたる猿か。其の欲すべきものを見て、忽ち其の本性を現はして、醜態を極むることを謂ふ。猿の狀態を寫出して、見ろか如し。老巧の筆と云ふへし。）嗚呼（嘆息の辭にして、ほんにと云はんか如き意なり。）猿、或

は衣冠を正うし、或は裙帶を垂れ、裝飾して、人間のまねをなして、儼然忠臣烈婦となり、擧止周旋、依倣異ならすして、人と爲り、一旦その果物を見るに及むでは、忽ち故態を現して、猿と爲り。唯々僅か一個の果物のみにして、人と猿との別が、判然として分る丶のである。（判焉の焉は、語已之辭にして、此の判ろさ云ふほどの意なり）誠に淺間しきものにあらずや。（嗚呼より以下、初めて本題に入りて。作者主旨のあろさころを發揮す。）されども、個樣のことは、獨り猿にのみに止らざるなり。今堂々たる六尺の人でありながら、君子を聲音笑貌に學むで、君子の聲色をなし、君子の扶態をなして、宛然君子の人なり。而して根が君子でなくて、君子のまねをなして居るものであるから、其の淺間しき性質は。依然として淺間しきものである。そこで僅の私利私益に逢へむ、忽ち其の地金を見はすもので、其の節と云うて、とりまもる所の操を、たつた一斗か

一升か位の。少許の利益に惑へ枉て、禮儀も作法もうち忘れて、人の彈指するのも、顧みずして、汲々として利を爭ふものは、是の如きの人も、亦僅か一斗や一升にして、君子と小人との別、判然と分る丶ものにして、斗升の利をみざる前は、其の聲音笑貌儼然として君子の人なり。其の斗升の利をみるの後に至りては忽然として小人なり。それ如レ是の人は、與レ猿何異で、猿の衣冠し裙帶して、劇を演ずるときは、儼然人となりし如くなれども、其の果を擲つものあるに逢へば、故態頓に發して猿となり、一果にして、人猿判る丶と、少も異なりたることはなく、誠に笑止の限りにて、強ちに、猿のみを笑ふべきものでないとの意なり。前には、一果而人猿判焉と云うて、猿を抑へ、後には、與レ猿何異と云うて、人を抑へて、却りて猿を揚ぐ。これ抑揚の法なり。然今より以下、何異

に至る、是全く作者の精神の在る處にして、猿を假りて人を諷す。感慨の情。楮墨の外に溢る。面白き趣向と云ふべし。それはとあれ。誰しも、もし、眞に君子を學ばずして、徒らに、其の聲音笑貌のみを學ひて、自ら得々たりとなせば、亦猿の人と爲ると同しく、一朝錙銖の利を見るに及むでは、故態頓に發して、忽ち小人の地金を現し、世の嗤笑を免るゝ能はざらん。當今世上、往々亦之に類するのことあり。徒爾に、此の文を誦するなくして、能く玩味するあらむ、亦以て大に警省する所のものあらん。是乍レ併作者意 思の在るところなり。





わが國家（上）

鹽井正男

葦原の瑞穂の國は、神ながら言あげせぬ國なりとは、萬葉の歌聖にきく所なるが、これ誠に、我が美はしく優れたる國家の姿なり。神ながら言あげせずとは、すべて、神のまゝにて、とやかくいひたてずといふ事にて、我が國家をなせる君臣は徒らに理をとかず、強て論をかまへず、唯一片の至情、一筋に天祖なる神々を崇敬して、天皇は、これによりて、民を愛兒と撫で治められ、臣民は、これによりて、天皇を慈父とうやまいまつるは、

我が古來の國風なり。實に我が美なる國風なり。はじめ天孫の、此の土に君臨せらるゝや、はやく、此の國風を示せり。葦原の中つ國は、我が子孫の王たるべき地なりとの天祖の御一言、皇孫はうけたまはりて、こゝに天降られ、臣民はうけたまはりて、うやまひ仕へたるや、はやく、此の國風を示せりといふべし。

富士の秀嶺の千秋高く、田兒の清浦の萬古蒼く、獨り東洋に美はしく聳え立ちて、古は日出の君子國としたはれ、今は天日の國光、世にうらやまるゝばかりなるめでたき皇國の姿よ。もとより、天壤無窮の皇運の、遠く凡夫のはかり知るべからざる神德の深きものあるによるや、明かなりといへども、思ふに、また、此の優れたる國風の力なるべし。我が君臣の間の、理論の淺きを以てあつまらず、唯一片の感情の深きを以てあつまれる、此の國風の力なるべし。一筋の至情によれるが故に、其の間、自から一家の親みの固きものあればなり。一家の力の強きものあればなり。

誠に我が國家君民の間は、一家の至情を以て立てり。父子の至情を以て立てり。

元明天皇が御即位の時の大御詔に

遠つ皇祖の御代を始めて、天皇が御世々々、天つ日嗣と高御座にましまして、此の食國天の下を撫で給ひ慈み給ふ事は、事だつにあらず。人の祖のれのが弱兒をやし治す事の如く治めたまひ、慈みたまひくる業となも、神ながら念しめす。

天皇の此の土に君臨せらるゝ業は、人の親が、弱兒を養ひ立つるがごとく、たゞ臣民をめで育つるにありとは、誠に歷代の天皇が神ながらの大御心にして、雨もる宮殿に民の富をよろこばれ、玉体

の御衣を脱ぎて、民の夜寒むを共にせられたる天皇の至情は、著くきこえたるものにして、秋の田のかりほの庵に、しほたるゝ民が衣手の苦しきを思ひかなしまれ、夜をさむみ閨のふすまのさゆるに、あらやの風を思ひやられ、照り曇り寒さ暑さも、時として民に心の安き間もなくてはすなど、實に民をおぼしやらるゝ至情は。

瓜はめば、子供れもはゆ。栗はめば、まして忍ばゆ。何處より來たりしものぞ。まなかひにもとなかゝりて、やすいしなさぬ。

と山上の憶良がうたひつくしたる我が愛兒を思ふの情も、たゞならぬなり。

世をさまり民やすかれと祈るこそ
わが身につきぬ願ひなりけれ

との元弘の天皇の御製は、やがて、歴代の大御心とすべし。起臥にねんじたまふ所、朝夕におぼしかけたまふ事、一も我が身の爲めにあらず、我が世の事にあらず。唯臣民の恙なかれ、國家の安かれとの御一念のみ。これを以て、天皇が唯一のみ心とせられ、これを以て、天皇が、唯一の事業とせらるゝなり。古來、我が至尊には、萬骨を枯らして、遠く亞細亞の中原に、一將の名を立てたるアレキサンダーの如きはおはさねど、なかなかに、至尊の御一身をすてゝ、國難にかはられ、萬民の患を救はむと祈りたまへる御方あり。百萬の國民をかけて、廣く大陸の中原に、一將の功名を博したるナポレオンの如きはおはさねど、なかゝゝに、かよわき女人の御身を以て、三韓の異境にさへ征鞍をむけられ、永く國民が患を掃蕩し玉へるお方あり。これ、實に我が皇室の大御心と、萬國のと異る所にして、我が皇室の心がけたまふ所は、一家の榮華にあらず。一身の功名にあらず。唯、國

民の幸福、國家の安泰を思ばしめす至情のみ。この爲めには、萬里異境の征鞍の苦も辭したまはず。かしこき至尊の御一身をも惜みたまはざるなり。誠に有りがたくも尊き我が皇室の大御心ならずや。

上の至情や、斯の如くおはせり。而して、下の至情も、また、よくこれに伴へり。

天皇は神にしませは天雲の
雷の上にいはりせるかも

持統天皇が雷岳に御遊しまへる時、萬葉の歌聖のよめる歌なり。なほ、現つ神わが天皇、あきつ神と大八洲しろしめすの語は、古人が數多いへる所なり。天皇は神なり、現つ神なりとは、誠に我が臣民の觀念なり。神聖にして片言も犯すべからず。寸事も違ふべからざる至尊の御上を仰ぎまつれ。

かしのふによくすをつくりよくすにかみし大御酒うまらにきこしもちをせ、まろが父。

吉野の國樔人が大御酒を獻せる時の歌なり。君が民を弱兒と見たまふが如く民は君を慈父としたひまつれり。かるかやの束の間も離るべからず。いそ松の常にやさしく仕ふべき至尊の御上とせり。かくて天皇はかしこき神なり。天皇は尊き父なり。この天皇のみ爲めには、

けふよりはかへり見なくて大君の
しこのみたてと出で立つわれは
(萬葉集二十の卷)

とて、もの知らぬ東夷だに、君の爲めとしいへた、馴れの故郷もかなしき妻子も、をしき我が身の萬事も、すべて捨てゝ更に顧みず。

海ゆかば水づく屍。山ゆかば草むすかばね。大君のへにこそ死なめ。のどにはしなし。

天皇のみ爲めには、山の嶮きもいとはず、海のあらきもいとはず。天皇のみ爲めには、身は藻屑とも朽つべく、野邊の露とも消ゆべく、天皇のみ爲めには悦んで水にも入らむ。笑うて火にも入らむ。天皇のみ爲めには、ある身を思はず、なき後をかへり見ず、

（萬葉集十八の卷）

もの丶ふの臣の男は大君の
委任のまに〳〵きくとふものを

（萬葉集三の卷）

進退も唯君による。起居も唯君による。生死もまた唯君による。とは、古の臣民が、君に對せるの心なり。

續人名（十一）

釋法忍

一むかし下ふさの國に、田地十石あまり持ちし百姓あり。ふうふの間に、一人の男子をもうけ、月花と愛し、いとをしみふかくそだて、はや二才になりける秋のすゑ、その母れいならずわづらひつき、いろ〳〵やうじやうつくせどもしるしなく、つひにはかなくなりけり。をつとは悲嘆のなみだにくれ、いまだ幼稚の子をのこし、何とて、われにおもひをかくるぞや、と打ふしてかなしみけるがさてしもあらねど、野邊のおくりとりいとなみ、一たいのつかとなしをはりぬ。さるにても、かくあるべきことゝならねど、子なき中にこそあらめ。いとゞおもひはますかゞみ、影さへ見えぬなき母をしたひなげくを見るにつけ、かれにつけ、これ

につけ、袂のかはく間もなく、晝は乳をもらひ、夜はふところにいれ、すかしなだめて、よもすがら泣あかし、とかく、艱難をして、月日をおくりけり。よくねんの冬わたり、となりのもの打より、いつまでかくてありなん。しんしやうのため、その子のためなれば、後づまをよせよと、しきりにいけんしけれど、今は、よう〱心もおちつき、げにもとおもひうけがひけり。そのころとなりむらに、ふえんにて立かへりし女のありけるを、かれこれ媒してよびむかへしに、そのよくねん、此の女房のはらに、男子いできけり。しかるにはじめのはとは、せんさいの子をいとをしがる樣にありしが、わが子のいできてより、へだて心いてゝ、そまつにせしが、をつとは、それとも知らで、いつしか、としもたち、そうりやうは六ッ、おとゝは、三ッに成りけり。しかるに、此の女房、せんさいの子を、いよ〱にくみ、何とぞうしなひ、わが子をたてんとおもふ惡心、いでき、千々に心をくだきけるが、さりぬべきてだてもなくうち過ぎける比しも、秋の夕、となりの庭へとかげといふ蟲出でたりとて、人々あつまり、此の虫は、大どくなりと、打ころし野邊へすてけるを、よく〱見すまし、人しれずこれをとりて、日にほして、かはかして、紙につゝみ佛たんの下へ、ふかくかくし、いつぞ、よき間を見合しよくに入れ、まゝ子にくはせ、びやうしのとくして、ころしうしなはんと心のうちによろこびゐけり。その夜、かの三ッになるをのこ、こよなうむしをなやみければ、母は、いだきかゝへて、かいはうすれども、いたみさらず。いかゞせんとかなしみけり。父もろとも、いたましくおもひ、とかくすれとも、夜中といひ、いしやは遠方なり。いかんともすべき樣なくて、あ

しをそらにして、おもひわづらひけるが、ふとおもひ出し、いつぞや人にもらひしくすりを、たしなみおきし事おもひつき、とく走りて、佛檀の下をさがし、とかくしてくすりをさがしあて、そう〳〵ゆにたてゝのませけるに、たちまちいろかはり、もんぜつして、血をはき、あへなく死にけり。母は、いよ〳〵かなしみ、きやう氣のごとく成りて、此のくすりはいかに、のむとそのまゝかく成りぬ。そなたのころしたるなり。もとのごとくにして、かへせとて、わめきなげきけり。をつとも、おもひよらねば、あきれはて、さるにても、此のくすりにて死ぬべきやうなしと、のこりしくすりを、火にかざして、よくよく見れど、もらひしくすりにてはなし。女房はこれを見て、きもつぶし、それをのませて、どうして、たまるものぞと何心なくいひけるを、をつとはきゝとがめ、心のせく

まゝくすりを取ちがへしは、わがあやまりなり。しかるにその方、此のくすりを見ておどろき、これをのめど、命のたまらぬといひしは、これ毒薬にして、その方たくはへおきしものと見えたり。何のために、此の毒薬を調へ持つや。さつする所、その方密夫をこしらへ、われをころさんためか、又、まゝ子をにくみ、がいせんためなるべし。眞直に申すべきよし責ければ、女房ちんすべきやうなくさしうつむいて、こともばなし。夫は、いよいよいかり、かゝるくせもの片時もさしおきがたしと、早々仲人を呼向へ、右の趣をかたり、かの毒やくを見せければ、媒のものも、興をさまし、言語にたへたる事どもなりとて、かの女を召連、親元へかへしけり。女の親委細に樣子を聞き、以ての外にはらを立ち、一度ならず、二度ならず、不屆をして、追出され、親にちじよくをあたふる不

孝者、ことに、此度の仕方、大それたる悪人なり。わが悪心ゆゑ、神佛の御罰を蒙り、おのれが、子にむくいて、うき目を見せ給ふ。聟のさけすみを請る所に、面目なし。おのれがごとき無道人は、此の以後、いか様の悪事仕出し、親になんぎをかけんもはかりがたく、七生迄の堪當なり。いづかたへも参れとて、追出しけり。此のことかくれなく風聞ありければ、皆、人、此の女をにくみ、村うちはいふにおよばず、きんがうがつぺきにて、よせつけず、親類の方もふさがりければ、身をやどすべき所もなく、手と身からにて、追出されぬれど、食をとゝのへ、うゑをしのぐこともならず、ろうにまよひけるが、うゑにつかれ五六里へたたりし所にて、たふれ死けりとかや。あさましき身のはてなり。心からこそ身はいやしけれとよみしも、實にまことなりけり。是ひとへに、天道、その邪悪をにくみ給ひ、たちまち、せき悪をあらはし罰をくはへ給ふものなり。おそれつゝしみ給ふべき御事にておはしまし候。さればのちのつまと成り給はん御方様がたは、かならず〳〵、まゝ子にくみをし給はで、わが子よりせんの子をいとしがり給ふべし。しかるときは、天道の御めぐみふかくわが子の行すゑめでたうさかえ、せんの子もかう〳〵しう、をつとたらん人も、その心ざしをかんじ、いよいよ、むつましく家内やはらぎ、はんじやうし、世上のかゞみと成給はんことを、いかばかり、いみじき御事にておはしまし候。たゞ此のだん、よくよく御わきまへ御取はからひ遊ばし候樣、希ひ〳〵、あなかしこ〳〵。

よきを、あしきにくらべては、誰かあしきをとらん。苦しさを樂しさにくらべては、誰か苦しき方によらん。白きを黒きにくらべては、見ま

がふまよひもなかるべし。されば、おもひくらべといへることのはこそ、萬の道にわたりて誠の情をも、おもひわくべきをしへならんかし。

いわけなき人をいたはれかくわりし
　身のいにしへをおもひくらべて

見ずしらぬ人の子とてもにくまめや
　わがうみし子におもひくらべば

（績人名なはり）

教梯抄（二十二）

千載集神祇
元暦元年今上御時大嘗會悠紀方歌奉りける神あそびの歌近江國諸神鄕をよめる
藤原季經朝臣

もろかみのこゝろに今ぞかなふらし
　君を八千代といのるまことは

新古今集同
十首歌合の中に神祇をよめる
前大僧正慈圓

きみをいのるこゝろのいろを人とはゞ
　たゞすの宮のわけのたまがき

續後撰集同
題不知
前右近大將賴朝

いはしみつたのみをかくる人はみな
　久しく世にもすむとこそきけ

同　同
大菩薩の御託宣の文をうたによみ侍りける中に
平　長時

ひさに經て君きみなれとまもるらし
　ひとの國よりわがくにのため

同　同
百首歌奉りし時寄社祝

藤原光俊

かゝしこそ賀茂の社のゆふかづら
上をまれば末もゝみだれず

同　同

三十首歌よみ侍りける中に

祝部忠成

世をいのり君をいのるとかみがきに
わが身は末らで年ぞ經にける

同　同

題しらず

賀茂氏久

きみをいのるたゞひとことの神のみや
ふたごゝろなき程はしるらむ

同　同

白川院の御時あらざる外のことにより
て御きそくこゝろよからず侍りける時
時康鏡を北野の宮へ奉るとてかゝみの
うらにかきつけゝる

左京大夫顯輔

身をつみて照しをさめよますかゞみ
たが僞りもくもりあらすな

玉葉集同

百首歌の中に述懐

參議雅經

神かきにひくしめなはれたえずして
きみに仕へむ事をしぞおもふ

後二條院御製

神祇の心を

世のためとあふぐとをしれをとこやま
むかしは神のくにならずやは

續後拾遺集同

鳥羽院の御時なきことを女にいひかけ
られて侍りけるころ北野社に籠りてよ
める

仁俊法師

あはれとは神かみならをおもふらむ

同

人こそひとをなきになすとも

同　神祇を　津守國夏

きみが代をいのるかたにはみしめ縄

神のこゝろをさこそひくらめ

同　同

題しらず　度會常良

民のため世のためいのるかみわざの

しげき御國はなはぞさかえむ

風雅集同

神祇を

太上天皇

たのむ世をふたつなければいはし水

一つながれにすむかとぞ思ふ

新千載集同

龜山殿七百首歌に平野を

後宇多院御製

今となはたみのかまどのけふりまで

まもりぞすらむわが國のため

（未完）

元日の拜賀

井上頼文

あら玉の年の始のほぎごとは、海の外の國々も、おほかたひとしかれど、元日の拜賀は、東洋のみの禮典なりとぞ。

そが中に、世界萬國にたぐひなく、めでたく尊きは、我が　大日本の正月の元日の拜賀にぞありける。

さるは、畏かれど、我が　皇室の御祖宗にまします、神倭盤余彦尊の中洲を平定し、畝火の橿原

宮に、天位に即かせ給へる日は、今より、二千五百六十年の前に當れる、辛酉の歳の正月の元日にて、此の日ぞ、やがて、拜賀の始にはありける。されど、舊事紀に、此の日の事を、凡、即位、賀正、建都、踐祚等の事、並に、此の時に發ると記されたり。

なべての禮典は、から國のをうつさせ給へるが多かるを、この拜賀はしも、皇國が始にて、から國のは、はるかに後なりけり。

そは、杜氏通典に(よみやすからんため、かき下し文に改む。以下の引書もおなじ)

漢の高帝の十月、秦を定む。遂に、歳首と爲す。七年、長樂宮成る。羣臣、朝賀の儀を制す。

と見え、

書言故事にも、亦、之を引き、其の下に、

武帝、夏正建寅の朔に改む。則、元日の慶賀は、高祖より始る。

と見えたるにても知るべし。

神武天皇の紀元は、周の惠王の十七年に當るを以て、之を推せど、惠王は、漢の世に、さきだつこと、四百六十年に餘れりけり。彼が四百六十年前に於いて、既に我に、拜賀の式ありとすれど、ものにこそ記されね。そのかみより、制度のおごそかなりし事は、さとられぬべし。豈めでたからずや。

ことに、中洲を一統し、天位に即かせたまひ、萬世の皇基を肇めさせ給へる、正月元日の佳辰に當りて、拜賀式おこなはせらるゝは、豈たふとからずや。

かくいはゞ、人、いぶかりて、

橿原のみかどの、御即位あらせられし佳辰の紀念は、紀元節と稱して、二月の十一日に祝し奉る

にあらずや。
と問ふらめれど、今、紀元節を二月の十一日と定めたまへるは、大陽暦に改算したまへるなり。例を引いていはゞ、いと畏かれど
今上陛下は、實に、嘉永の五年、九月の廿二日の御降誕にましませど、今は、大陽暦に改算して、十一月の三日を、天長節と定め給へると、ひとしき御事なりかし。
かゝる尊きゆゑよしを思ひ、國民たらんものは、萬國にすぐれて、めでたき、此の日をことほぎ、我が大君のみさかえを、千代に、八千代と祝はざらめや。

辨似抄（承前）

赤松景福

小島　小島

萬葉集　ありそよりまして思へや玉の浦はなれこ島の夢にし見ゆる

同　集　波間より見ゆるこ島の濱久木久しく成りぬ君にあはずして

此等はこじまとよめり。小は字の意なるべし。かやうの小は、古をと云へる語例多かれど、稀にはことといへるもあり。こ松こ萩などの如し。又、右の波間より見ゆる小島の歌を、後世備前の兒島となせる書ども有れど、萬葉の註に、地名には非ざるべしとあるに從ふべし。契冲師の勝地吐懷篇にも、小島とかきたれば、只小さ島なりといふのみなる由見えたり。

萬葉集　みなぎらふ奥津を島に風を痛み舟よせかねつ心はもへど

同　集　百傳ふ八十の島間を漕ぎくれど粟のを島は見れと飽ぬ鴨

此等はをじまとよめり。粟の小島は、即ち粟島を云へるにて、こゝは、語間に小の字を加へてよめるなるべし。(粟のをじまと云ふ元よりの名にはあらじ) 右二首の如きは、小川小山田の例にて、小は添へていへるのみなり。○但しこじまとよまれざるにもあらねど、猶慣例に依るべし。

古今集　今もかもさき匂ふらむ橘の小島の崎のやまぶきの花

續古今　袖の香や猶とまるらむ橘の小島によせし夜はの浮舟

新後撰　箱根路を我が越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ

康頼　摩薩潟沖の小島に我ありと親にはつげよ八重のしほかせ

後鳥羽院　浪間なきおきの小島の濱ひさし久しく成りぬ都へだてゝ

右の歌、初二首は山城の地名、次々は、其の歌にいへる國なり。又古今集にみつの小島といふあり。かやうの所、皆、こじまとよめり。又、備前のこじまの歌も多し。(こは、古より兒島とかけれど、其の兒の字の意なるべし) ○又、右の後鳥羽院のよみたまへる濱ひさしと云ふことは畏かれども違へり。濱楸などかきて濱ひさきとよむべし。木の名なり。庇には非ず。

むや

古今集　別れては程をへだつと思へむや且見ながらに兼ねて戀しき

拾遺集　睦じき妹背の中としらねむや初秋霧のたちへだつらむ

此のむやは、疑辭にて、云々すれむや、かくあらむと云ふが如し。第二段係辭なり。故に下の

まさらむは、即ち其の結辭となれり。

古今集　五月こは鳴きもふりなむ子規まだしき程の聲をきかばや

萬代集　子規待程ひさし山里はところがらかと行きてとはむや

此のむやは願辭にて、やはよといはむが如くして、二段係辭に非ず。右二つの別、今行くといふ語を以て、其の活段、及び續様を擧ぐれば、

行かむや（未然段を承く、願辭）　行き　行く　行く　行けばや（既然段を承く、疑辭）

よひ

古今集　人知れず我通路の關守はよひよひごとに打もねなゝむ

萬代集　よひの間けもらぬ木葉に袖ぬれて時雨になりぬ曉の空

竹取物語　かゝる程によひ打過ぎて子の時ばかりに云云、

此等は常に云ふ初夜のことなり。

萬葉集　玉釧まきぬる妹もあらばこそよひの長きも嬉しかりけれ

此は夜といふが如し。註によひとても、一夜の事なりとあり。集中、此の例、まゝ見えたり。卷十二に、明日よりは戀つゝあらむこよひだに早くよひより紐とけわぎもとあるは、上のこよひは、一夜のこと、下のよひは、初夜のことにて、一首の内に兩方あるものなり。又、卷五に、よいもねなくにとあるは別にて夜寐の義なり。

てし　てし

古今集　花のごと世の常ならは過してし昔は又も歸りきなまし

萬葉集　去年見てし秋の月夜は照せれど相見し妹は彌年さかる

此等のてしは常にいふ過去辭なり。
古今集　耳無の山の口無えてしがな思の色のしたぞめにせむ
同　集　春霞たなびく野邊のわかなにも成みてしがな人もつむやと
如此てしがなと續く時は、論なう願辭なり。(分ち言ゑ元がと云ふが願辭なる故に、もがしがもがなしがなと云ふも、皆、がを主とせり。)されど、此てしといへるは、常の過去辭のてしと紛らはしけれど、過去と見ては叶はず。そは、願望は、皆、未來を期して云ふものなれば、右の耳無の歌にては、思ひの色の、下染にせむ爲、彼の山の口無を未得ぬ前より、そを得まほしと未來を期して、云意なり。もし、此のてしを過去とせて、下のせむ（未然言）をも同じ過去のいひ樣に改めずては、一首の内、時の前後相違ふ理なり。此の類のしは按ふに所謂体辭のしなるべし。かく見る時は、妨なくきこゆ。先輩、こを同樣に見過したりけむやうにて、其の詳解、多く見ねず。又、後撰集十三、伊勢の海にあそぶ海人とも成りにしが波かきわけてみるめかつかむ、此のにしも過にし枯にしなどのにしと異にして、過去辭にあらざる事右の條に准へて知るべし。

（未完）

廿二番歌合（承前）

諏訪　忠元　寄贈

小杉榲邨先生判

十三番

左　持　　土岐常磐子

こゑなくはよせくる波とおもはまし
かもめむれゐる淀の川岸

右　　　　川合象子

にごりなくすめる世にしもわし鴨の
羽音にさわぐ富士河の波

このつかひ申旨ある持と定む

判詞に

左の方、よど川を浪うちよする處と思ひとり給へるにか。もとより川とて、浪のよせぬには侍らねど すべて海邊に浪うち寄するをよむがつねとして、川流は、ながるゝ水を、おほかたいひつゞくるが如し。殊に此の川は、流水、いといさぎよき所なるをや。
右の方わしがもの羽音にさわぐ浪とはむかしの軍の故事を、よみ出玉ふならむ。さるにても初二句は、ふさはしからぬこゝ地し侍り。これも、今少し修正なさまほし。

十四番

左勝　　　　土岐米子

よの中のうきしつみをは見せ顔に
河の瀬ちかくあそぶ水どり

右　　　　酒井鍈子

川風の身にさむしとや水鳥の
うらさひしくもなきあかすなり

此つかひ左のかたまされり

判詞に

左の方初二三句、世間の浮沈のありさまをしめしがほなるは、いと殊勝なれど、歌には、すこしく理屈めきてぞきこゆる。
右の方は、其の實情さもあるべし。この心まことにあはれふかけれど、二句に寒しとやとあるからには五句はなきあかすらむと疑ふべき程ならずや。
これをおもへば、左の方理屈は、理屈として

全首難する所あらざればまされるをといふまでもあらじとて。

十五番

左　土岐幾子

行かひの舟にもなれて墨田川
うきつしづみつあそぶ水鳥

右勝　南部銓子

古河のきしのゐくひをわたりつゝ
なにあさるらん鷺の一むれ

このつがひ右まさる

判詞に

左の方、墨田川なはこゝに限らざる御口つきまた出たり。しひて難とはいひがたけれど、照應とぼしかるこゝ地す。

右の方いとをかしくも、あさりつゝ、岸のゐくひをわたる鷺の一むれ。左のいたづらにうきしづみする水鳥にたちまさりぬ。

十六番

左勝　土屋理子

暮れのこる浪かとみればゆふ川の
みぎはにしろき鷺の一むら

右　清水靜子

風つよき河邊にたてるしらさぎの
みのけことさらさびしかりけり

このつがひ左に勝をゆつるべくなむ。

判詞に

左の方、これもあるが如き見わたしにて、いとをかしうなむ。

右の方、初句は、風より、雨そゝぐとあるかたしたしからむと、判者はおもふ。もとよりつよき風にふかれたる、みの毛とて、難は侍らねど、五句にさびしかりけりと、とぢめ給へるにあはせ

て、この修正せまほし。この愚見あるを以て、よくきこえたる、左にあはせて、すこしくたゝよはる。

十七番

左 勝　　　　大田金子

大川のゐくゐにつなぐはし舟の
　へさきに見ゆる鳥のかげかな

右　　　　大河内一子

雨風にみのけみだれてみゆるかな
　かもの川瀬にたてるしら鷺

この左右左の方勝とす。

判詞に

左の方、全首の意匠、曾丹集をうちよむがごときこゝ地す。いと興味おぼえ侍り。右の方加茂川の川瀬のしら鷺、實景なること、ちし侍れど、これもなほ、雨中のけしきとして、ふるあめにみの毛しをれてなどあらばやと、判者、又、おもふはいかに。とまれかくまれ左のはしふねのへさきの鳥かげいとめづらし。

十八番

左 持　　　　相澤求

小船さす棹にみなれて隅田川
　たちもさはがぬ都鳥かな

右　　　　諏訪晴子

行かよふ船にもなれて隅田川
　たちもさわがぬ都鳥かな

此　左右、また、兄たりがたく弟たり難し

判詞に

左右のみやこどり、おなじほどのすがたなれど。

（未完）

家兄遺文（九）

白松園主人

○營所の月

十二月八日、己らは、歩兵科に撰ばれて、歩兵營に入りて、大隊本部の前に列びぬ。營舍の前には、剝げたる小倉服を着けたる古生徒共、三々五々集ひ居て、予らをさしては笑ふ樣なり。新參とて嘲るならんと思ひしが、後ちに思へど、それのみにはあらざりけり。げに笑はれしも宜べなりや。髮は長く額に垂れ、面の色は生白けたるが、或は背廣の洋服着けたるあり、或は和服の地を引くばかりなるを、着流したるあり。草履をはきたるも、足駄も、靴も、さては帽子かぶれるも、かぶらぬもありて、已がじヽ種々異樣なる、平常の目よりは、さもあるまじけれども、一年余も規率の下に立ちぬる目より見れど、さこそ忌まはしくも、笑止なりけん。予らが古生徒となり代りて、新生徒を見るときも、亦しかありしなり。亦予らは、其の時古生徒の着たる、白剝けの小倉服を見て、如何にも賤しげに思ひしが、後に思へは、彼らは反へりて、その剝げたるを、予らに誇りしにぞありける。

羅沙服の袖に、廣き横線つきたる人々、四五人出で來りて、廣き一室に連れ行きぬ。其の處には、服や、靴や、帽や、横山の如く積み重ねたり。即て、一々之をとりて、各大小によりて、改め着つ。數れはき事なれど、袖袴の長きあり、短きあり、胴の大きやかなるがありて、故郷にありし時、服屋に命じて、精密に尺を取りて、仕立てさせたるが如くはあらず。靴は、ことに異樣にて、其のかた重箱の如く、左右の差別は見えず。汝は何文を

はくぞと問はれしこそ、可笑しかりしか。何文もあることかは。帽子は、いと嬉しかりき。徽章尊ければなり。率ゐ來りし人は、如何なる者ぞ。予らにものいふに、いと横柄にて、汝如何にせよ。此くせよなど、さながら兵卒に向ひていふ語なり。かやつ、惡きやつらかな。われ等兵卒にはあらざるをと思ひしぞ、さすがに新參なりける。此の人らは、これ、予等を敎育すべき人にて、予らが、後々望む所の者はこれなり。後日古生徒に聞きつるが、昔は、此處といへども、生徒に向ひての言語は、士官を始め、皆地方の學校敎師が、生徒に對しての語と全じく丁寧なりしが、勅令改まりて、軍人生徒は、一切、兵卒同樣に、取り扱ふべき事となりぬと聞きつ。

喇叭は、數千萬の兵隊を、一聲の下に左右する者にて、號令の最大なるものなり。凡べて號令は、其の聲の調子の緩急によりて、いたく運動の差あるものなり。其の聲緩るければ、從ひて運動も緩るみ、嚴なれば、運動も自づ活潑となる。されば隊長の號令を聞けば、其の隊の整へると、整はざるとは、見ずしてしるく、喇叭の音の、調へると、調はざるとを聞けば、一營の規率は、見ずして明かなりとぞ。燈火挑げ盡して、眠に就かんとする時、耳を傾くれば、消燈喇叭しめやかに聞ゆ、鷄しば鳴きて、曉近からんとする時、枕をそばだつれば、起床喇叭忙がはしく聞ゆ。

步騎砲工の各營毎に、一つが鳴り出づれば、一つが鳴り、孰れも譜は同じけれども、其の調自づから異にて、緩なるあり。急なるあり。我身步兵に在りし故、かくいふにはあらねど、四兵科の中規率の殊に嚴正なるは、步兵にて、中にも緩るきは騎兵なりしか。されば步兵營に吹く喇叭は、少し

だも亂れたる音なかりき。各營毎に、本譜の頭に必ず、其の隊の譜を附け吹く事なるが、歩兵營には、例へば消燈喇叭ならむ、幾回吹きても、一回毎に必ず更めて、歩兵隊の譜を附けて吹けども、他兵營には、最初一回のみ附けて、次回よりははぶきて附けず。師團にもみなかくはぶきて吹くとぞ。夏の比、ある夜歩兵營に火災ありし時、衞兵所の喇叭卒、あわてふためきつゝ、ヅボン前後に着ながら、走り出でゝ、火災の譜を吹きたりけるか、歩兵隊の譜を附くることを忘れぬ。夜明けぬれど、忽ち懲罰申し附けられきとなん。ある人のいひける。

喇叭の嬉しきは、消燈と食事、忌はしきは、練兵呼ひ出しと、起床と、さては人員呼點なり。自習わきも亦うれし。凡べて何も、休息の喇叭はみな嬉し。面白くて心の浮きたつは、君が代と軍旗

敬禮の譜なり。引擧げの譜も亦面白し。殊に心地よきは、すめらみくになり。皇國はいかなる時に吹くぞ。武裝せる軍隊が、衞門を出入する時、衞兵所に於て吹奏する譜なり。練兵畢りて、隊を整へて歸るに、衞門の步哨遙に之を見て、衞兵に正列を促す。衞兵は直ちに走り出でゝ、銃を執りて、衞兵所前に正列す。喇叭は列の頭にあり。其の右に衞兵司令立つ。司令は、下士官が務むるなり。かくて、隊は門の口に來りぬれば、步哨は常の如く、引率士官に向ひて、肩銃をなして敬禮す。己でに門に入りぬれど、衞兵司令は、衞兵に肩へ銃の號令を下す。此の時隊の通過する步調、サッサッと音して、號令が肩への豫令の聲長く引きて、銃の動令を下すと共に、喇叭は皇國を吹奏す。隊にも喇叭あるときは、早足の譜を吹き來つるが、俄に變へて、此れも亦、すめらみ國を吹奏す。其

の音相和して、面白き事いはんかたなく、隊中の者は銃擔へる肩も、自づから張られて、心地よきに、引率の士官が、刀をさゝげて答禮するに、日の光りきら〳〵と輝きわたるも、いと榮えあり。司令が肩へ銃の號令は、通過する隊の、右足の地につく時下すものにて、次の左足より喇叭を始め、左右と歩調に和するなり。中に喇叭卒無下に拙く、或は司令の號令、其の機を誤り、或は隊の喇叭と、衛兵の喇叭と和はざるときなどには、歩調、全く亂れて、反へりて興をさますことあり。(未完)

禽獸の言行

田端の隱居

如何なる鱗あればにや。妬婦を詠ずる賦に、忽に、其の妬鱗に逆ひ、その忌ををかす事あれば、即ち湯にれもむき、火をふみて、目を怒らし、袂をかきまくると。妬婦、邪心あり。邪心、即ち蛇心なり。總じて蛇は邪念つよく、その夏のあつき日には、我と我が毒氣に堪へかねて舌をはき、目をひるがへし、往々其の毒氣もて、人を倒れしむ。殊に蝮蛇と云ふ蛇は、天地陰陽の毒烈の氣を稟け生ずる毒虫なれば、利き牙の毒を持ち衆蛇はみな卵生なれど、これはひとり胎產にて、而して、其の子を生む口よりす。故に我と我が牙害となれど、この牙を折らんために樹をかみ、人を咬む。もとより毒氣の熾なるときは草木之がために枯死し、人之がため仆る。此の蛇、誠に生しおくべきものならず。之に逢はゝ速かに、其の頭をうちくだくべし。もし身尾をうちて、頭に及ばざるときはいたく悲鳴し、其の聲を聞きて、群蝮來りあつまり、之を如何ともする能はずと。けだし、是眞の蝮に

はわらずして、其のほとりの草莖化して、群蝮の如く、しかり。其の猛忿知るべし。而して、人、上下の唇を取て、之をさき皮肉骨の三段とす。其の寸々に切りてもなほよく蠢動くとぞ又農人、草刈して、途に此の虫を見る、殺さんと欲すれど、刀杖を携へず。故に罵り曰く、汝卑怯者、去るべからずとて、家に還つて鋤鍬を持ちてまた行く。蝮嚴然として待つが如し。或は竿などもて、其の首を抒るに、曾てにげ去らず。徐々身をちゞめて、肥つて僅かに五六寸になる。之まさに跳りつくべきためなり。果して、忽に跳かゝる。首を拗けど、則ち死すと。而して、其の鍼は尾にありて、つねは見えず。時に臨で出して、人を刺す。毒最も烈しと、妬婢、亦たつねは菩薩の如きあり。一旦妬麟逆するときは、面色火の如く。眼尻さけ、眉さかだち、口斜めにしたるはさながら、書にかける羅刹てふ鬼か、はた圖につくれる蛇の如し。たとへ容貌はさやうにかへずとも心には、くやし、ねたしと思ふ毒ねんもて、人をきづつけ、己をやぶりしためし世に少なからず。閩の王延翰が妻、崔氏は、其の性ねたみ深く、其の妾をとらへ、室の内におしこめ、械木に繋ぎ、縛りて錐もて刺してころすもの八十四人。撫州の監酒、范寺丞と云ふ者の妻もみめうるはしくして、妬心深し。丞、之を愛して、又常におそる。同官の輩、つねに休息のいとまには、妓を呼びて酒のみて興ず。或夜の宿直に、同官のやから、夜一夜のみあかして、微明に及び、丞が衾等まくらまで捜りあつめて、吏卒にもたせて、家に還す。李共奉と云ふもの、丞が妬深きを知り、たはぶれに妓女の履を取つて、ひそかに丞が臥具の中に入れてかへしたり。妻その衾をのべ見たりしに、女の履ありたり。妻わや

しみ、如何にして、此のものあるやと、吏卒に責めとへど、吏はたゞそのまゝ持ち來しにて、子細は知らずと云ふに、妻なきうらみ、遂に一間に入り、縊れて死たりとぞ。唐の中宗皇帝の時に、御史大夫裴談と云ふ者の妻も極めて妬猛かりしが、裴談、常に之を畏れ、かつて人に談ずる樣妻の畏るべきもの一生の中に三度へんず。一には其若くうるはしく飾りて出たちたるときは、生菩薩を見る如く、固とに畏れて敬ふべし。漸く年壯もかたぶき、男兒、女子多く前にならべて座したるは、鬼子母の如し、まことに畏るべし。すでに五十六十に及びて、吻に皺を疊み、唇に或は青く齒のぬけ上りたるに、かねをつけて、うすく粧粉を施したるは、これを見る事鳩盤茶の如し。誠に畏るべしと云へり。

これ人の中の蛇にて、蛇の中の蝮蛇なり。恐るべしく。

又蚺蛇は、いたく女を好む蛇にて、此の蛇の膽は小兒の五疳八癇の治すとて、人、その膽をとらんとするに、即ち女の着する紅衣を着、花をかざし、即ち女なのさましで山中にある蚺蛇藤と名くるものゝつるを手にして往く、蛇、之を見て凝立して動かず、即ち、婦人の衣を其の首にかけ、藤を以て、之をしばり、其の膽を取ふとなり、女のわなにかゝる人は、又、此の蚺蛇と云はんか。

蛇はそうして、夏のものにて、春のひがんより秋のひがん迄のものとす。其の前後に出るをめくら蛇とて、目見えぬよし。されど、己眼見えざれど、何處に雉のうかゞふや、猫のねらふやも知らざれば、中〳〵にのたりをりて畏れず。もし眼あき、此を見ど、かしこみも出できぬべき者を。故に世を見ゞ。己れを知らず、みだりに物云ひ、ものかき、

已のみありとし、人の身を知らず思はず、畏まぬこの翁の如き人をめくら蛇と云ふ。さては穴に入らんか、未だ〳〵。

みあたり次第

高雄の松

年あらたまりて、彼のものしりの翁をとへは、何時もかはらず、火桶のあたりにゐれふりなれつゝありけり。今日もとわらひつゝ入れば、おとろけろげに、見あげて、又といひつゝ年波のいたくよれる面をゑまひつゝ胡鬚をさりて、窓の外をながめやりたり。今日もふるな。

いざ、雪の事をいはうか、雪は、六花六出、飛瓊、藤六、玉塵、銀樟六霙など云うてと先づ口をそろ〳〵開き始めたり。雪は豊年の瑞といふこと、幷に雪女、其の外、雪のわけ委しく天地或問と云ふ本に出て居る。雪は、すさまじく云ふ人もあれども、大概は、皆面白きやう云うてゐる。

歌も多くある。まづ、古今集に貫之が

冬こもりおもひかけぬを木の間より
花と見るまで雪ぞふりける

また定家が山家の雪とて

待人のふもとの道や絶ぬらむ
軒端の松に雪おもるなり

また田家の雪と題して實蔭がのには

誰か見る稲田の穂の朝ぼらけ
外山をかけてはるゝしらゆき

など澤山あるが。有名い香爐峯の雪を知るか。香爐峯の雪とは、古、一條院、雪のいとふりたるあした、はしちかく出でさせ給ひて、かうろほうのありさまいかゞあらんとおほせられければ、御前に侍へける人々、たれもいかなる御意かを知るものあらざりけるが、清少納言ものもいはで、御簾を巻上たり。帝ことなう御感あらせられたる事

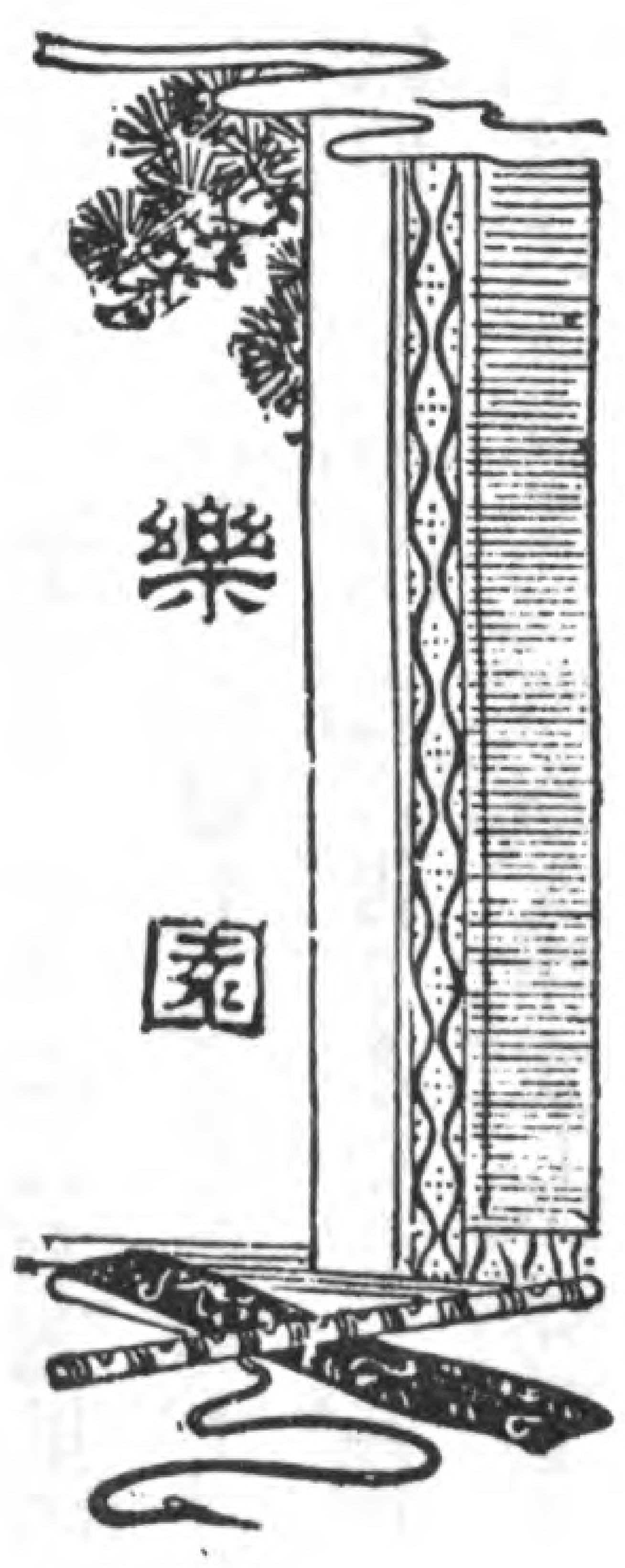
あるが、是は、朗詠集の詩から思付いたのである。

遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看

此は白樂天爐山といふところの山莊に居して、東の壁に、五首の詩を題せられたり。その内の第四の詩である。爐山といふところは、遺愛寺といふてらの近く、かうろはうのふもとになるさうである、と余桜得意面である。己しづかに山眠と冬の景色にいふはいかなる事ですか。山はねたり、さめたりするのですがといぶかしかれば、翁ふるひこゑをもて、

春山淡冶而如レ笑　夏山蒼翠而如滴　秋山明淨而如レ粧　冬山慘淡而如眠

いふ詞をしらんのかとあなづらる。
春の山は、あつさりとして、人のゑめるやうで、
夏の山は、あを〱として、うるはふやうで、
秋の山は、さつぱりとして、かざりたるやうで、
冬の山は、ものさひしうて、しづまつたこゝろである。それたから、春は、山笑ふとか、秋は、山粧ふ冬の山は眠る、夏は山滴ると云ふからの事だと云ふをりに、内より客ありと、使きたるものから、翁はなごりをしげなれど、つぎにとてたちかいりぬ。



大和ばなし

ちゝのみ

清の趙恒夫が著はす所の寄園詩話の中に、明初時嘗欲レ征ニ倭國一、彼遣使嗜哩嘛哈、奉レ表乞レ降、上問倭國風如何、嗜哩嘛哈以レ詩答曰、國比ニ中原一國、人如ニ上古一人衣冠唐制度、禮樂漢君王、銀甕

蕕新酒、金刀鱠錦鱗、年々三二月、桃李一般春と、これ遊聞錄より轉錄したる所なりとぞ。憎くむべきからごと。倭國とは、即ち日本の事なり。日本、如何で彼に征せらるべき。日本何とて彼に降を乞ふべき。彼こそは元のむかし、大擧して、日本に仇なせしを、鎌倉の男子、之をみなごろにして、やう〳〵三人を生かしかへしたる弘安の事は、誰れも知る所なるべし。日本男子、如何で彼に降を乞ひしためしあらん。明とは太閤秀吉の征せし國なり。秀吉は、はやくより大度あり。そのはじめ織田信長にしたがひて、山陽を平らぐるや、秀吉、はやく、韓、及び、明を攻むる事を請ひぬ。信長は、たゞ猿面冠者の大なる志をいだくよとて笑れけり。のちつねに、其の志を成さん事を思ふ。たま〳〵明王、朱翊鈞政を失ひ、武備具はらざるを聞き、機こそ來りつれとて、遂に宗義智、及び、玄蘇を韓につかはして、韓主李昭、其の大臣黄允吉等をして隨へて入貢せしめぬ。此の時までも、韓は、我が國に貢物をもたらせしなり。韓使來りぬ。秀吉、乃ち明を征せんために、道をからん事を以つてしたれど、韓は、たゞ恐れをのゝきて、あいまいに答へて、歸りたり。

折りしも秀吉愛兒を失ひ、心うつ〳〵としてこもりをりけるが、大丈夫、まさに武を萬里の外に用ふべし。何ぞ自から悒鬱をなさんやとて、乃ち、大に諸將帥を會し、之に告ぐるやう、吾れ、諸君のたすけによりて、海内を平定し、少しく休むを得たり。しかるに、諸醜夷の王化を阻むものあり、吾深く恥づる所なり。願くは、我が國家は内府にまかせおき、自から將として朝鮮に入り、其の兵を先鋒として、明に入らんと欲す。彼れ、なほ、我が命を拒まば、則ちうちて之を滅し、遼東より、



樂圖

直ちに北東を襲ひ、國を奪ひ、土壤をさきて、諸君を奉じ諸功臣をして、其の望みにつかしむ。亦快ならずやと、思ひの外なる大事に、諸將たゞ默して、答ふるものなかりけるが、浮田秀家すゝみて曰く、殿下、此の無外の事をあげんとし玉ふ。誰か努力せざらんやと答へたるに、諸將も、之にふるひ從ひたり。秀吉、大によろこび、やがて九鬼嘉隆なるものに命して、大艦船十艘をつくらせ、二月廿八日京師を發したり。四月、安藝に至り、嚴島の祠に詣で、百錢をなげて、祝して曰く、秀吉、もし、勝を得む、面するもの多からしめよとて、之をなげしに、皆面むきたり。秀吉、大によろこび、ふるひて會するもの亦五十萬人。韓に入り、韓兵を先き立てゝ、いざや、明を征せんとす。明國は、我が軍至ると聞き、はや辟易して、戰かはずして、我をあざむかんものとて、小西行長に賂し、

太閤韓俘をかへさば、慶尙、全羅、忠淸の三道をさき、王となさんと、行長等不學にして封王の故事をしらず。明に王たるの謂とし、之をゆるしたり。

その後、明國使を遣はし、冊書をもたらしめぬ。秀吉、卽ち、冕を戴き、裴服を被り、德川家康等七人をして、各章服を被らしめ、僧承兌をして、冊書をよましめたるに、豈はからん、汝を以て、日本國王に奉ずべしとしたゝめありけるに、秀吉大に怒り、忽ち冕をぬぎ、裴服をなげて、日本國王たる、何ぞ汝等醜夷の奉ずる所とならん。而して、我が國王は、むかしより、一統を以て連めんたり。我日本國に王とならむ、帝皇を如何せん。憎さも憎きゑみしの言、汝、征せでやはとて、使者をばかへし、又や兵をむけたり。加藤淸正が、虎を生捕りせしは卽ち此の時なり。秀吉、事果さずして死せしかど、我が日本國の武は、後も、なほ、明國のかしこみれそるゝまでにふるひ上げたり。秀吉は、かやうの豪傑なり。しかるに或人、秀吉を評するやう、彼の明智光秀が信長を弑せしは、秀吉に天下を與へさせしにて、かの猿面冠者、光秀に謝してもあまりあるを、主人の仇敵と呼はりて、誅する狡かつも、また極りなしなど云ふ人あれど、そは、又、けしからぬ言なり。秀吉は大志あり。何ぞ豈海内を以て意とせんや、もし信長をして、不幸なからしめど、秀吉、又、内に心をおかすして、はやく外事を、巳れが任とせしならん。さもあらむ、明國は、たやすく彼が掌中に歸せんを。信長の不幸は、卽ち秀吉の不幸なり。かやうの說をとなふるは、卽ち鵬鯤の大なるを知らぬ蜩か、鸞鳩の言と云ふべし。大丈夫たらんと欲するものは、よろしく秀吉の如き大志を忘るべからず。

而して、之を敎ふるは何れにかある？母たるもの、
また、此の氣を養成せずむあるべからず。

ねむけさまし

後咲

○冷淡なるものは
元日の早朝に年始に行きたる玄關、
證文なしの借金の催促、
無錢にて勸工場を冷見す時、
不人望なる先生が辭職して去る時、
落選議員の選擧人に對する、
……冷たいものよ……

○羞を識らぬものは
舅の富貴を當てにして緣組するもの、
自分の作つた歌や文を高らかに讀み上げるもの、
雅人の中て遊藝のうぬぼれ話。
下手な書畫を書いて人に與れるもの。

樂圃

書畫の贋物を珍藏するもの、
村夫子の大學者氣取、
自筆の寫しものを屛風に貼り付けて喜んで居るもの、
婦人のえらそうに漢語をつかふもの、
束髮先生の片こと英語、
……傍から見る目も羞かしいのに……

○耐へ難きものは
不親切なる看護婦、
情を知らぬ主婦……（婢僕からいふ）
うぬぼれの強き御孃さま、
若輩ものが人の歌文の批評する、
虎の威を借る猫、
……どれも〳〵……、

○用處なきものは
去年の暦さ　破れ草鞋さ　古洋服さ　折れたる針さ
禿つこうの筆さ　老朽の屬官さ　失敗續きの議員さ
はやらぬ醫者さ　滅法意氣な女學生さ
……ごめんなさいよ……、

くさむら（春）

白魚女史

一よに、二よ、君がみよと小玉をつきし羽子の音もしづまり、上るよ上ると雲井にうなりどよみし、いかのぼりのかげも夕陽と共に落ちて、なほ年のはじめのめでたさを燈火のかげにうたひぞよむ子らがまどゐ。

元雄さん、もう唱歌などはやめて、早う賽をおふりなさいよとて、さし出す少女が賽を元雄はうけとり、何、がちや／＼め、己をおとまわしにしたな。何の狗鼠、女などのしりにつくものか、よし／＼おれは學校や勉强は通りこして及第ぞと云ひつゝころがす賽は五つ。

そんなおとびこしは出來ませんよ、まづ、正統に勉强をおしなさいよと、先きの少女は、元雄と云

ふ札を勉强の部に入れ、さ、松代さんとて出す。

私も勉强、鈴代さんは、之も勉强、今度は私と先きの少女は、賽をふり、おや／＼不品行、いやだは。さ、おきよさん、あら憎くらしい褒美。武男さんは、遊歩。さ元雄さん、もし雪の進軍などどうでもよくつてよ。早くおふんなさいよとひとり饒舌り、ひとり世話をやくは十四五ばかりの席中一番年重なる少女なり。

よし、今度こそ及第、いや、ちく生、おこたりだ。よし、今度は勉强するぞとて膝をかためてすわりなほす元雄と云ふは、年頃十三ばかりの活潑げなる小兒なり。

私は親孝行よとて、おとなしげに、賽を次にまはす、松代と云ふは、九つばかりの愛らしき少女なり。

私は三つよ、何不勉强、おや／＼と聲もおどげな

る八つばかりの少女は鈴代なり。一つに六つふれば改心、二つ三つ四つは拘留南無けんげんかうりきとをがみし故か、先きの少女のふる賽は六つ。

や、改心〳〵。この所に來るものは、心のわらたまりし證として皆〳〵の前に三度辭儀すべし。さアー、さア、おつるさん、お辭儀〳〵とて一同わつとばかりにさやぎ立つ。

善と惡との敎育雙六、學校よりふり出して卒業に上る。上られんとしては下り、下りては居すはる。淸子と云ふ十二ばかりのすゞしげなる少女は、まづ一番先きに上らんとして、又、正直にかへり、高等敎育に入り、上りもせず、下りもせず。つる子は、ともすれど不品行、零落の部におちて、ふり出しにかへる事二度、三度、武雄はなほ勉强中。松代は上らんとして、時をまつべしと云ふ部に入り、之は一回お休み、鈴代は、人だのみの部に入りて、勉强にかへる。幾度か、不勉强の部に入りしかど元雄やう〳〵卒業して、一番上りとなりたり。時をまちたる松代つゞきて上りたり。つる子はなほ改心に入りて、お辭儀をなしをるもをかし。

あサーまだるい〳〵、もう、こんな雙六はやめて、骨牌をしませうと、淸子の發起に、何れも贊成して取り出す百人一首、花も半開、酒も微醉、興も、また、酣を過ぎては爭ひ起る。元雄さやぎたつ、武雄もまたあばれ出す、つる子はね出す、淸子怒る、鈴代なく。上を下への大騷ぎ、もう喧嘩はおよしなさい、サアサア分けなほし、武雄さん、あばれるのはおよしなさいよと松代はおとなしく人を制すれど、さやぎだつ人々の心、中々にしづまらぬふすまをあけて、どうだな、大分さわがしい



が、誰おふくろを脊負か。いざ之から先生も、一番おなかまに入らんかとて密柑の籠を携へつつ、やさしげに入り來る、五十ぢかりの翁のうしろに、三十六七歲、まだ若げなる妻とおぼしきも、大きなる袋ひつさげて入り來り、サアサア、まけたものは、此のおふくろを脊負てをどるの。おや鈴子は何をおなきなのと聲をかけつゝ、やがてならび座す。鼻つき眼つきよく似たるは、誰が見るも爭はれぬ母子なるべし。

いざ先生はよみ手にならん。くみはきまりしか。よし、さらぞよむぞ、出た〳〵、はら出たはじめから、そらつらぬきとめぬ玉ぞちりける。出た〳〵、今度は大役、うべ山風をあらしといふらん、あらしが、あつたか、それでは、今度は大入道、前の關白大政大臣、花さそふ。又出た、はとゞぎす泣きつる方をながむれば、たゞあきれたるつらぞ殘れるなど、たはぶれよむに、興も改まりて、しばしは眞面目にとりをりしが、之れ私し。いや己だと果はひつぱりあひ叩きあひ、つる子は何かがや〳〵とよみ出る。淸子はづるしとて、眼を丸くして怒る。又や戰場とならんとするを、先生はうち制し、男腕力を出すはひきやうぞ。元雄、正統にせよ、つる子、相かはらず、がちや〳〵なりたつるな。淸子は、また潔白ならぬを怒る。泰山は土壤をゆづらずと云ふ。今少し心を大きく、かゝる時には大目に見ておけや。いざ今度は源平、どうしてもひとりたりぬなとくみを分くる先生の言葉に、賤どんまだ用事はすまぬかしらと云ひながら松代は、つと立ち、しばしありてつれ來る賤子、年はまだ十を一つ二つばかり、此處らの子たちと共にまどゐしたき年なみを、孤兒のかなしさ、慈母を失ひし去年、先生に救はれて、つれ來られし

より、みづしめのわざ、妻君の云ひつけか、我が子にひきくらべても見よと、かむふ先生　、之がため、をり〳〵浪風を立つる事も多かり。流石に今日は新らしき衣をつけたれど、人々の如きあや錦はとり重ねず、松代につれられて入り來れど、同じくは膝もならべで、しりへに座するもいぢらし。

もうすつかりかたづけしか。鼠にくはるゝやうの事はなきかと、妻君のしりめにかくるを、はい、松代さんがすけて、よく見ても下さりましたと云ふ聲少しくふるへを負ぶ。それが、あらぬが、先生はふと眼をしばたゝきしが、人しれず拂ひて、賤しつかりせい。サアよむぞと、座敷は、又、一しほのにぎはひ。

雀のおやど

聽雪女史

世俗の物語に、雀のおやどと、いひ傳ふるものありと云ふ。こゝに、京都の市を去ること、三里ばかり南にあたりて、深草村といふがありけり。その村に、この昔物語に、似かよひたる家族、今もありて、そが名さへ、雀のおやど、とつきたりとかや。近頃わが友の、彼の地にものして、その實況を、いひおこせつるまゝに、幼き人の爲、こゝにものせんとす。深草村といふに、さゝやかなる、茅ぶきの屋あり。さしこめたる、柴のあみ戸のかたへに、雀のおやどと、いふのぼりをたてゝ、内には翁と媼とすめり。そもこの家は、何にして、またいかなる人の、すめるにかあらむ。風流人の、世をしのべるにやと、このあたりすぐる人の、ゆ

かしがらぬはなし。今は昔、この村に生れたる、農夫の某、その正質なる性は、呉竹のすぐに、そが慈愛のこゝろは、わだつみの底ひしらぬが如くなむありける。またがそ妻なる媼も、かゝる賤の女には、ありがたきまで、すなほなる性にて、よく人の乞を入れ、めぐみぶかきものなりければ、つひには、誰いふとなく、その夫婦が、志のうつくしきを、ほめたゝへぬ人なし。富める人は、これを親しみ、貧なるものは、これを慕うて、そが下僕下婢とならむことを、願ひけり。されど、夫婦は、たえて驕ることなく、よく働きては、よく人を救ひ、朝たに起きては、田にはたらき、夕にかへりては、草のかまどにけふりたて、あまれるところあれど、人をめぐみて、快樂となむしける。さるに、世は浮雲の、たゞよへるが如く、かゝる善良なる、夫婦がもとにも、いつしか悪魔の襲ひきて、杖とも柱ともたのめりし、太郎といふ兒をはじめて三人まで、或年の春二月、まだ吹きそめぬ、花の蕾の色ふかゝりしが、夜半の嵐にちりうせにたり。大方、この年は、はしかといふ疫の、流行して、此の里にも、多くの人を失ひけるが、此の三人の兒どもゝ、また、此の病によりて、かく一時には、失せけるなりとぞ。げにこの春は、翁ら夫婦の爲めには、月日も光りあらざるべし。たゞその後は、氣もうせて、よる年浪の數、一時にましたる心地しつゝ、賤が手わざも、おぼつかなく、朝たに起きては、寺まうでし、夜はよもすがら、念誦にのみ明しけるが、後には若干の家財田畑を、身にそへたるも、わづらはしくおぼえて、出でてば、鋤とる力もぬけはて、たゞかなしき月日を、おくりむかへたりけるが、遂に家財田畑は、悉く小作人に、雇入れたりし家僕にまかせおきて、お

のれ等夫婦は、なくなりし子の、墓の、近きわたりに、いとさざやかなる茅の庵を、むすびて、これに世を、そむきたりけるが、あはれ、人の心の恐ろしさよ、人の悲哀をよそに見て、年ふるまゝに小作人は主の田畑を、ことごとく、他人に賣り渡し、翁ら夫婦にはそが代だに、渡さずして、いづこともしらず、はひかくれにけり。翁ら普通の人ならむには、訴へもして、田地も取りかへすべけれども、天性慈仁にみちたる人々なれば、かゝるものは、世をそむきさし、おのれらが身に、いかで要あらんとて、とがめず、にくまず、たゞその後は、夫婦二人の、糊口の道をぞ、もとめける。このこと村長の耳にきこえて、いとあはれにおぼえしにや。村内の人々より、翁に少しばかりの田地を與へ、嫗には糸くる手わざをすゝめたり。されど夫婦は、亡兒の事のみわすれがたく、ひるも夜も、むせぶ涙に袖ぬれて、いとしめやかに、この草のいほりに、わびしき月日をぞ、おくりける。或日のこと、翁畑に出でたるに、一羽の小雀とび來て、翁の袖に入りけり。翁これをはなちやらむとせしが、小雀はいなど、首をうちふりて、心ありげなり、翁は、すべてに、あはれぶかき、性なれど、終に家にもち歸りて、嫗と共に何くれと、よせ集め、一つの巣をつくり、ここに小雀を養へり。一月程にもなりぬれば、漸く外にとびいでて、松の枝には、千代の春を謡ひ、花の梢には、うちねふりなどし、晝はひねもす戸外に遊び、夕べには巣にぞ、かへりける。或夕、翁は、窓の戸をたてんとする時、此の小雀また、一羽の雀を伴ひて、あかねさす、西の方より、かへりにけり。翁いぶかしみつゝ見れど、小雀はおのが巣にゆきて、共にたのしげに謡ひけり。嫗は日日の手わざに、身も

勞れ、夕べは雀の、かへりくるをまちてうちふし朝たはかれよりも、とく起きいでて、草のかまどに、ほそき烟をくゆらしけるが、翁は三人の子供を失ひし身の、ひたすら無常を感じて、心さびしき折から、いまは此の雀ども、おのが家族のここちせられて、おのれに先きだちし子らの、なき靈の再び生れて、こゝにたづねこししにはあらずやとまで、うたがはれ、食物までに、こゝろを入れて、いたはりけり。日數ふるまゝに、伴はれ來し一羽の雀、ある夕べより、少しも外にとびゆかず、ひねもす巣にひそみけるが、他の一羽の小雀は、さとくも虫よ毛髪よと、ついばみ來ては、とびゆきぬ。嫗いぶかしみ、巣をうかがひしに、白き卵三つばかり握りしめたり。あれれもしろやと、さけびければ、翁も立よりて、見るほどに、いつしか卵は孵へりぬ。あはれ淋しき翁のすまひ、うつかねの音と念誦より、外に音なふものとては、かけひの水のみ、所得貝なりしが、いまは雀のかれこれとびちがひて、謠ふ聲さへかしがまし。翁と嫗は、よくはたらきては、よくめぐみ、雀のむれさへ養ひしが、いまは、村人の惠に、報ゆることさへ、かなへりしかば、三日に一度の墓まうでさへ、今は心安く花さへ、たむくる身とそなりける。あはれこの時、かの雀の家族は日にまして、室のすみずみ、または、この翁の室に、飾れる家具の蔭に、あるはうちつけれきし額の後などと、おのれ、自ら巣をつくり、綿に糸よ毛髪よと、はこびゆきては、温密なるすまひに、雀の子孫のみ、多くしなしてけり。翁が肩にさへ、はや四つ五つなど、うちより來て、いともむつまじく、馴れ親しみけり。かくて、嫗は、朝夕二度大いなる小麥の團子を調じおけば、翁は、それを一つづつはこび

あたへたり。さて一年許へて、後にあまりのいぶかしさに、この里の村長に、かくと申出でければ、村長はじめ、村の人々、三々五々、日毎日毎にたづねきて、雀のわざに、おどろかぬ人とてはなかりしが、今は翁夫婦も、何不自由もなく、その日をやすく、おくる身とはなりしが、今より七とせ前に、このふしぎなる、雀の話、京の市にきこえて、名媛紳士の、ふりはへてとひ給へるもありて、終にこのいほりを、雀のおやどと名づけ給へり。さるからに、たづねらるゝ人毎に、雀の料にとて少しばかりの銭めぐみ給ひければ、翁も嫗も今は雀のために、手わざなど、するひまもなけれども、いつしか、翁はとみ榮えて、昔、小作人の爲めに奪ひとられし田地も、もとにかへりて、安樂なる身にはなりぬ。されど、いまは、翁嫗ともに、いたく年つもりて、いまはいつともしらぬ身の、もしやおのれらが、死たえんには、相續すべき我子は先立ちぬ。いかでか、この屋はたちゆかむ。おもひめぐらせど、いとものたらず、心もとなければ或日翁は嫗と共に、いまは家族の一個なる、雀の群をよびあつめ、汝ら恩をおもはゞ、よくきゝわけて、おのれらの願ひを助けよかし。おのれ年いたく老て、いつとも知らず、もしもの時のあらむには、此の屋は人にうばはれむ。汝等は、悉く追ひ拂はれもやせん、燒かれもやせん、またそが上に、わが祖先の家名も絶えもやせん。かゝらん時は、汝らいづこの里に、誰が軒端をかたづねらむ或は森のうばらの梢に、宿りもとむとも、ふくろふの爲めに、苦しめられもやせん。そが行末のおもひやられて、けふこゝに、村長のむすこを養子にもらひうけ、我なき後を續がせんとす。汝等、嘗恩をしらで、鳥類なりとも、よく考へて、答せよ。

もし汝等よしと願はゞ、今より、三日は、外にないでぞと、人に語らふごと、利非得失をときしらせけれど、あなあやし、多くの雀は三日の間は、少しも外にとびゆかず、千代八千代と謠ふ聲のかしがましきに、いかに翁らも、そが心あるに感じて、老の涙にむせびけるが、其の後は、この雀らに何事も打ち明けて、語らひぬ。養子も、今はむかへられたり。雀も、いまは數しらずなりぬ。とひくる人毎に雀の團子を、めぐみ、かくておのれらが命つ、終りなば、いかなる樂しきむれに、遊ばむ。この世ながらの極樂なと、語らふ聲も、雀の千代よぶ聲に、きこえずなりぬれど、嫗はかたへにたちて「コレコレ小僧、何ヤカマシクヨロコブカ。お客ノサマタゲ、シテハナラヌソヨ」。と、室のすみずみうちたゝけば、一家肅然となりたり翁は、口すげみながら、嬉しき時は、小僧なる小雀までが、さわぎけるよとうち笑みたるすがた、畫にもかゝまほしき樣なりとかや。あはれ、天は、正直なる人を、惠む。人は利慾をうちわすれ常に仁惠なれば、必ず、必ず、我が身に、天より幸福を與へ給ふなり。此の話はいぶかしきやうなれど、今日猶、深草村に語りつたへたり。雀は天使にやとぞ、れもはるゝよ。



常宮周宮御氣色伺ひの文

小川直子

おのれが仕へまつる、御ふた所の姫宮は、夏ごとに下野國の日光山なる離宮にいでまし給へれぞ、

今年も同じごとわたらせ給ひぬ。されば、御氣色うかゞひにとて、文月の末つかたまかりのぼりぬ。此の日は雨もなく、又、いみしき迄にはてりもせず。夏の最中なれども、いとめつらかなる涼しさなりけり。朝の九時といふに、上野を出る汽車にて行く、車の中には、かよわき老の身なれど、四方を眺むる力もなう、只、打ふして、時をうつしけるに、午後二時三十分に、日光には至り着きぬ。例のごと、小西の家に立ち寄り、沐浴しつゝ、衣かへなどして、御館へまゐりければ、御ふた所の宮は、御門の側なる岡にのはらせれはしまして、遠く見やり給へり。恐る恐る拝しゝ、御まへをも過ぎ、御館へ入りぬ。貞子繁子の君たちよくこそとて、御くたものよ、何くれとたびけり。かくする程に

ふた宮も御ましに歸らせ給ひければ、何くれと、都の空の御ものがたり聞えあけつゝありけるに、后の宮よりとて、畑つもの、あまた、大きやかなる籠どもにいれて、まゐらせたまひければ、ふた宮は硯ふたなどの廣らかなるに、御手づからうつし給ふ。紅葉山に作らせ給へりける蠶豆、あるは茄子など、種々の物どもの、色さへうるはしうていとうづ高し。かゝる程に二位の御局の君まうのぼり給へりとて、打さうとけど、ふた宮は、謁見場に渡らせ給ひて、御對面あり。くさ〴〵の御物がたりに、時もうつりぬ。御局は、宮の御前なれば、いたうかしこまり給へど、げにかしこくも、天の下をたもち給ふ大君をうませ給へる君にしあれど、立居につけて、氣高うおはします。御裝束は、こき紫のうき紋のうすものに、白かさねうるはしうて、帶は、白地に金にて、何かはしらねど、種々の摸樣あるをものし給へるが上に、御くしの

ふさやかにかゝれる御うしろ手、昔おぼえたる宮人のさま、いとうるはし。日もはや暮かゝりぬれば、まかりまをしてたち歸らせ給ふ。おのれもおりて、輪王寺にものしぬ。此の寺は、宮につかへまつる人々のとのゐ所にせさせ給へるなり。されど、從二位園基祥卿も宿り居給ふ。此のとのより。

なつかしき聲はすれども木がくれて
　すがたは見えぬふる寺の庵

となむいひおこせ給ひけれど、御返しになづらへて、

寺よりも猶ふりにける身にしあれど
　人に見えじと木がくれて居り

と御心易きにまかせてものしてけり。此の夜は、車のつかれをかごとにて、宵の程より打ふしぬ。つとめては起きいでつゝ、庭の中を、せうえうするに、池の面のかはらぬ氣色山どもの、木ふかくて、雲のたちのぼるさまなど、年毎に見れどもあかでなむ。

見れどあかぬ眺めなりけり世のちりも
　かゝらぬ峯にかゝるしら雲

など口すさびつゝ入りて、それより宮のおましへまゐりたれど、例のゑませ給へる御けしきうるはしうおはしませど、喜ばしき事限りなし。折しも、春宮のみやより、爰の御馬場へいでましあらせ給ふよし、御使にていざなはせ給へど、そゝやと、ふた宮は立いでさせ給はむとす。かゝるに、ゆくりなく雨の降りいでにければ、やめさせ給ひぬと、又御使あり。さて、しばしありて、ふた宮は近きわたりせうえうせさせ給はむとて、御傘まゐりて、いでませど、おのれも御供つかうまつる。歸さに、輪王寺に立ち寄らせ給ひ、客人居の間にて息はせ給ひ、かるたの御遊びなどせ

させ給へど、老の身も、其の人數に加へられて、負じなどかしこけれど聞え奉りつゝ、日ひと日あそび暮しぬ。かくて、またの日は、高崎大人の鹽原のさとなる、なりどころにものせむと契り置きける事にしあれば、かしこけれど御いとま聞えあげて、かしこをさしてまかむ出でき。

寒曉鐘　　東久世通禧

横雲もゆきけもよほすたかねより
かねの響の冴えわたるかな

初雪　　鍋島直大

みやこにはまだならねども打渡す
山にはみゆるけさの初雪

海眺望　　高崎正風

和田の原ゆくとも見えずゆく舟の
しまのあなたにいつ成ぬらん

夜聞水聲　　前田利嗣

さわがしき旅のやどりも小夜更て
水のおとのみきこえぬるかな

望遠帆　　津輕承昭

眞帆あけてはしる小舟を三保か崎
まつより沖にはやなりにけり

福羽美靜

ふじのねの高きを人の道とみよ
あふがぬものはあらじ世の中

海邊煙　　宮地嚴夫

あひきつる聲にきはひてあまか住む
宿にもたかくたつけふりかな

鹽家煙　　北郷久政

沖つ風ふきしつまりてのとかにも
しほやのけむり空にたなびく

晴後遠望　　坂正臣

けさはれし雨のなごりか打わたす
遠やまもとのけむりこめたる

社頭杉　植松有經

生茂るすぎの木かげにかくれても
このよの神のみぞなはすらん

沖舟　松本高明

眞帆かけていてつる舟の遠つ沖の
とりのつばさとみえも社すれ

德川光圀卿　蜂須賀隨子

植てみし花はもゝ世をかさぬれど
わかきこゝろの色そにほへる

國旗　鍋島榮子

日のみ旗掲げしふねはとつくにの
なみの上さへ安くぞありける

煙草　南鄕柳子

草の名のけむりのごとく成にけり
くゆらしながらむかし思へば

藤原藤房卿　柳原愛子

千さと行駒のみやこにいでしより
かげもとゞめずなりし君かな

以利沙伯　岩崎寧子

おなじ根に生ひし園生の呉たけを
折ぬてたてのなどなかりけん

郭子儀　小池道子

家の子のたち榮えゆくためしには
このから松ぞまつひかれける

和布利　北島以登子

めかり人かまおろすらん關の海の
底までてらすともし火のかげ

夜話　常盤井文子

こゝろあひの友ときく夜ぞ面しろき
珍らしからぬむかしがたりも

張良　　原田蒼生子

老人にとりてさゝけしくつよりや
よをしる道もふみゝそめけん

藤原百川公　　服部磯子

君を思ふこゝろふかさはもゝかはの
みなかみ今もくみしられけり

富士　　安藤さく子

いつみてもおもかはりせぬ富士のねの
高き心にたれもならはむ

元日　　佐々木濱子

めつらしくよそほふきぬのうら／＼と
はれしむ月のついたちのそら

新年女兒につぐ　　岡部讓

あら玉の、年たち來れば、はしけやし、をとめが

友は、おもふどち、いむれ集ひて、まりつくと、身
さへおち居ず、はごやると、こゝろそらなり、や
よをとめ、一言いはむ、人妻と、やがてなりなむ、
そのまりの、まろきが如く、まどかなる、家庭を
つくれ、そのはごの、あがるがごとく、いや高き、
名をもあげてよ、をとめらが友。

女子勸學の歌　　下田歌子

見よや少女子　夙夜の　雨に嵐に　心して　養ひ
立てし　花園は　薫りも深し　色もよし　老曾の
森に　向ひては　百千の悔も　何かせん　二葉の
ほどに　怠らず　摘めやまことの　敎くさ

明治三十二年十一月十九日東京府高等
女學校秋季同窓會のをりによめる長歌

並に反歌

東宮鐵眞呂

指折りて　かきかぞふれば
今ははや　むかしとなりぬ
春秋の　たのしきをりに
うちむれて　遊びし事も
夏冬の　つらき時しも
もろともに　勵みし事も
しかれこそ　をり／＼ごとに
思ひ出でて　なげかひ居つれ
今日はしも　いかに吉き日ぞ
なつかしみ　吾がれもふ友の
一にはに　うちつどひ來て
たのしくも　遊びくらしぬ
うれしくも　語りあひたり
たのしさは　いまだ盡きねど
うれしさは　いまだ飽かねど
秋の日の　いと短くて
夕けぶり　たなびきそめぬ
なつかしき　學びの友よ
來ん年の春をちぎりて
いざや　別れん

反　歌

おのがじしよきもあしきもうち出でて
心れきなき今日にもあるかな
へだてなく心のおくもかたりあひて
今日のまとゐぞたのしかりけり

み雪

吉野眞澄

隙もなくとぢこめて、ふすまふくよかにかつぎて、いねたる夜半、あやしき物音、ふと、夢をさまし

てけり。いと、いぶかしと思ひながらも、なほ、まどろむ間に、雀からすの、軒近う鳴きさわけば、日もたけぬらむと、やをら起きいでゝ、窓の戸おしあけんとすれど、打ちきしめくに、力の限り引きゆるがせば、あなや、まどの呉竹、ふり積れるみ雪に、打ちふせられて、戸にさやれるなりけり。よべのものおとも、さてこそとおぼえてをかし。見わたせば、野も山も、白たへの銀しけるににたり。かてゝ、朝日かばまばゆくはえいでたるけしき、更にいふばかりもなくなむ。

大君の深き恩とふる雪は
何處のさとも變らざりけり

室咲の梅

鹽井ふく子

しるらめや、霞の空をながめつゝ、花も匂はめ春をなげくと、中務のむかしにはあらねど、おくれがちなる主人に通ひてか、軒端の梅もほころびねば、谷の鶯も來鳴かず。あはれ、さう〴〵しき宿かな。いでや、他處の春をとはましとて、立ち出でぬれども、何處も同じきさまなり。今は、歸らんとするほどに、此方の庵に、白妙に、紅に、いとうつくしう咲きほこれる梅のはちの數あるに、なつかしくて、主人は、誰とも分かねど、尋ね入れど、こは花づくりの家なり。おそきも、はやきも、つくりさまによれりけり。あはれ、我が庭にうつして、軒端のをして竝はせてんと、一鉢を求めて、かへりぬ。

やがて、軒のはしにおけば、此方は、たけも短くて、いと小さきに、はやくも春をしりぬるに、庭の梅のおくれざまはよそ、いとうとまし。今は、此の花をうつしたれど、鶯も、やがて、香をとめて

んと、あした、夕と待てども／＼、庭なるは、くちびるをだも開かず、鶯も聲なし、今朝は明朝はと待ずるのみのあけぼのなり。とかくするほどに、うつくしかりし鉢の梅は、いつしかうつろひて、つぼみさへ、そのまゝ開かでしをれはてんとす。水注げど、肥かへど、またもとにかへらんともせざりけり。如何してんと、花つくりが許に尋ね行けば、何處に、如何に、おき給ひしと云ふ。かうかうとつぐれば、おろかなる事をし給ふよ。かれは、あたゝかき室に入れて、咲かせたるものにて、云はゞ、玉だれのをすもる風もいとふばかりなるを、夜半深き露霜にあてゝ、何にかは之堪ふべきといふに、力なく、歸りきて、

　後るとも誠にさけよ梅の花
　　しもにしをれて何にかはせん

と、軒にたちてうたへば、庭の梅もふくよかに、はゝ笑ましげなり。



●勳章捧呈式　わが東宮殿下へ、獨逸皇帝陛下より、黒鷲第一等勳章（星章付）を御贈進せられたりといふ。同勳章は、同國最高貴のものにて、我が菊花大綬章に相當するものなりとぞ。右につき、去にし十二月廿一日、東宮御用邸にて、捧呈式を行はせられたりき。當日式場に參列せしは、中山東宮太夫、黒田同武官長、高辻同侍從長、三宮式部長等の人々にて、殿下には、御席にて、直に、獨國公使より捧呈せし勳章を佩用させ給ひ、御懇篤なる御辭さへ賜り、なほ正午には公使以下近侍の人々にも御陪食仰付けられたりと承りぬ。

●巴里博覽會御出品　巴里博覽會法隆寺美術參考部へ陳列を許されたる帝室の御物は、阿佐太子作の聖徳太子の像、陛下御手許なる蝶、千鳥の御手箱をはじめ、總べて十二品、先つころ、林事務官長、宮内省より、之を受領し、十二月廿二日の便船にて、佛國にもちまゐれりとぞ。

●慈善家　富める人には、物をさゝげ、貧しき人よりは、飽くまでも貪り奪り、強きを助け、弱を挫くなど、さかさまごとのみ多き世には、今更、驚くべきことにもあらざれど、彼の慈善といふことも、我が食を減じ、我が衣服を脱ぎて爲るにあらざれど、能はぬ程の人々の間にのみ行はれ、衣食に華美を競ひ、無用の事に豪奢を恣にする輩は、決して睹らぬ様に定りしこそ慨かはしき極なれ。余輩は、世の所謂富者强者を惡むものにあらず。たゞ或者は、金錢と唾壺とは溜るほど汚穢くなると、彼の人々が常に言ひはやす如く、吝嗇にのみかたまり。又、或者は、自己の賤しき慾情を滿足せしむるとのみを思ひ、背つて、世の人の上を顧みるとなきが故に、余輩は今の所謂富者强者を惡む。豈また、他意あらむや。府下芝區白銀猿町に、岡見清致といふ人あり。貧しき人々の子の、學校に得ゆかぬを、いたくあはれに思ひ、先づ、我がわたり近き貧民のためにとて、明治十一年三月、邸内に小學校を置き、彼等の小兒を集めて、敎育せり。十八年にいたりては、此處彼處より其の惠に霑はむと、來り集ふもの多く、元の校舍も狹うなりしかば、同所二本榎に校舍を新築し、頌榮小學校とぞいひける。それより二年を經て、また狹さを感ずる様になりしかば、更に猿町に校舍を新築せり。即ち今の校舍なり。目下尋常高等を合せて、三百の生徒を敎養せり。是よりさき、女子敎

育の等閑に付せらるゝを嘆き、中學程度の學校を起し、頌榮女學校と名づけき。既に廿五名の卒業生を出し、現に百餘名の生徒あり。是も亦小學校と同じく、極めて少額の授業料を徴収するのみなれば、月々手許より補助する額、百金を下らずといふ。自ら奉ずることは、極めて薄けれど、氏の惠の下に煙を立つるもの、市郡を通じて四十餘戸なりといへり。慈善のために費す所の多きこと知るべし。世の富者、之を聞きて如何にか感ずる。斯の人にして、斯の弟ありて、實弟千吉郎氏（米國農學士）二弟彦藏氏（獸醫學士）三弟義治氏（獨逸農學士）皆共に氏の事業を扶け、孜々として生徒教育に從事すといふ。事に羨しきは、家庭の圓滿なることにて、夫人達も皆良人の志を翼け、慈善と教育とに身を献くる人々なれば、世の浪風は、この人々の家にうち寄せむやうもなかるべし。親族睦み會といふものありて、毎月一回定所に會し、兄弟姉妹、むつまじう談り合ふ中に、來るべき月になすべき慈善事業を議し、各節儉して得たる財を醵出するを、此上なき樂とする由。あはれ、人は皆之の心あれかし。世の家庭は、皆斯の如く善美なれかし。

●殊勝なる婦人　熊本縣菊地郡城北村大字木野の、内村ツナといへるは、明治十六年、夫金兵衞肺患にかゝりしかど、豊かならぬ中にて、醫藥のと心ゆかぬふしなく手當し、少しの暇を見ては、蚊帳を織り、莚を編みて、僅の賃金を得て夫の平素嗜むものを調へ、朝夕の膳に供へ、日夜の看護ひとかたならず、他村にさへ聞えて感せぬ者もなかりき。斯くて三年の間、心を盡しけれど、遂に其の甲斐なくて死去りぬ。九ッなる男の子と十二歳なる女の子と、當歳の乳香兒とありけるが、

ツナは、か弱き手一つして怠らず夫の追福を營み、また、是等の遺子を養育し、今は近隣のほめられ者に育て上げたり。かく心がけ異なる女なれば、去年の十一月、舊主人の分家に、赤痢病にかかりし者ありし時、自ら乞ひて病者を看護し、以つて、舊恩に報いたりとぞ。

●各府縣教育豫算　本年九月末日、其の筋の調査によれば、一廳三府四十二縣の教育豫算、一戸賦課金額、左の如くなりといふ。參考のため、之を掲げむ。

佐賀	一、七六一円	山形	一、五五九	石川	一、五二七
高知	一、四〇九	京都	一、四〇一	埼玉	一、三九五
滋賀	一、二九八	宮崎	一、二八〇	大阪	一、二三八
大分	一、二〇四	福岡	一、一五四	栃木	一、〇八三
宮城	一、〇八三	福井	一、〇五七	新潟	一、〇四七
富山	九九七	群馬	九八六	秋田	九七九
熊本	九六一	岩手	九五一	青森	九一七
千葉	九一三	鳥取	八九八	兵庫	八八七
奈良	八七三	三重	八五〇	山梨	八四三
香川	八三二	長野	七九四	茨城	七八〇
福島	七七四	岡山	七五三	岐阜	七二七
東京	六八九	長崎	六六五	島根	六四四
静岡	五七五	山口	五七一	廣島	五六四
愛知	五四五	德島	五三三	和歌山	五三二
鹿兒島	四九七	愛媛	四八二	神奈川	四五一
大島々廳	一六五				

●石盤廢止の結果　福井縣師範學校附屬小學校にては、石盤石筆を廢して、白紙鉛筆を用ゐしめたりしが、其の結果、樂書するもの尠く、緻密の性を養はしむることを得、窃視を防ぎ、獨立の精神を養はしめ、また、復習に便に、成績を、家庭に知らしむることを得る等の利あり。たゞ、時間の徒費、鉛筆の削屑のために、不潔を來す等の害ありといふ。

●學生奬勵資金　文學博士、故島田重禮氏の息鈞一氏は父博士の遺志を繼ぎ、後進の子弟を奬勵

する資として、若干金を帝國大學に寄贈したりしより、井上哲次郎氏等主 唱者となり、更に特志家の義金を集め、大學の内に、學生奬勵資金といふを備ふることに定めたりと。

●契沖阿闍梨　荷田の大人加茂本居の翁たちに先ちて、國學復興の偉業を成し丶、契沖阿闍梨、沒してより、今年にいたりて二百年になりぬ。ここに、阿闍梨墳墓所在の大阪東高津圓珠庵の庵主、其の他有志相計りて、五月廿五日に、盛なる法要を行はむ計畫なりといふ。猶、阿闍梨が遺愛の梅に因み、寄梅懐舊といへる題にて、汎く和歌を募集する由なり。又、阿闍梨とは淺からぬ關係ある水戸義公のためにも、圓珠庵にて、本月六日に二百年遠忌の法要を營むべしといふ。又、彼の國學の泰斗と仰がる丶、本居宣長翁のためにも、本年は百年忌に相當するをもて、翁の德を慕へる人々、相計りて、盛なる祭典を行はむとて、其の準備に怠なしといふ。

●家婢の奇特　越後國三島郡與板町の小柳ハツといふは、慶應三年に、同町なる三輪某の先代に仕へて婢となり、今日に至るまで、三十三年、よく忠實を盡したるのみならず、平素勤儉の志厚く、わづかなる傭錢を貯蓄しては、公共のために寄附し、主家の吉凶禍福を、自己の喜憂とし、嘗つて渝ることなし。このごろ新潟縣知事、金貳圓を下賜して、この奇特なる行爲を賞せりと。

●雇女の拂底　日清戰役後、會社工場競ひ起り、女子の職工となりて、之に趨くもの多くなりたるに加へて、世間の、にか〳〵しき現象は、妾に、酌婦とかいふものに、何に、彼にと女子を誘惑するもの多く、普通の家に雇はる丶者の、頗る少くなりしことは、人々日々の實驗にても、能く

知れる所なるが、昨年にいたりては、更に甚しく一人の家婢を求めむにも餘程の困難を感ぜざるを得ざるほどなりき。然れど、之を撰擇するの餘裕もなく、心ならずも、心術の素直ならぬもの、擧動のあら〳〵しき者、よろづ、物のわきまへなき者どもをも、わが父母愛兒等のかたわらに置かざるを得ざるが如き場合多し。事、小るなに似て、甚だ世人の注意を要することとなりかし。さて彼等の給料も隨つて貴くなり、一昨年に比して、二割強の値上なりといふ。即ち、當時普通の給料を記せど左の如し。

○お炊女　一ケ月一圓六十錢より三圓まで　○仲働　二圓より三圓　○小間使　一圓五十錢より二圓五十錢　○お針　金三圓より三圓七八十錢　○子守　六十錢より一圓　○乳母　年に四十五圓より六十圓　○牛乳　三十圓より四十圓まで

●ゆかしき談　岩代國小濱村の齋藤鐵之助といへるは、嘗つて、伯父の妻たることとありし、齋藤ナカの、今は、いたく老衰して、身體も、自由ならぬ上に、たよるべき人もあらぬを憐がり、我が家に引き取り、夏のころは、日々湯を沸かしては身體を洗ひくれ、このごろに至りては、之を背負ひて浴湯に連れゆくなど、我が親に仕ふる如く看護し、衣服のこと、飲食のこと、其の他よろづに親切を盡さゞるところもなしと。▲福井縣南條郡長郡山軍助といへる人は、風俗の、日に奢侈にのみ流るゝを憂ひ、郡內に諭告を發して、冠婚葬祭の大事といへども凡て虛禮虛飾に屬する事を廢し、衣服は、華美を飾らず、木綿を用ゐること、季節に、物品の贈與を節約すること等を定め、大に勤儉貯蓄の實を擧げしむといふ。▲山陽鐵道會社にありて、機關學實地練習に從事する堀、小栗といふ兩工科大學生は、常に赤毛布を身に纏ひ、襷にて、其の襟を結び、又は、洋服の上に袢纏を

着、色も褪めたる青毛布一枚を、布團の代にし、日常車中に起臥して、研學に餘念なしといふ。あまりに奇裝にすぎたれど、翩々たる公子をまなばんとする學生のみ多き中にとおもへど、さすがに、ゆかしからぬにもあらず。

●東西南北　大鱶捕獲　福岡縣津屋崎町の垣内源次といふ者、同地海岸を距る一里許の沖合にて捕獲したる鱶は、身長二丈二尺、重量三千五百斤ありて、一艘の漁舟にては、引きあぐる能はずして、他の數艘に應援をたのみ、やう〳〵に捕へたりと。　◎鷄卵大の雹　安房國勝山町にては、去にし十二月十四日の夕刻より降雹し、其の大さ鷄卵程ありしと。凡三分間ばかりして降りやみたれど、多少作物をそこなひしとぞ。　◎數萬金をおくる　和歌山縣三尾村の漁民數十名、さきに日米貿易商會の移民募集に應じて、渡米したりき。昨年の末にいたり、右の人々より、家族にあて、送附したる金額、總計七萬餘圓、同村にては、前代未聞の珍事となし、渡米を望む者、はなはだ多しといふ。　◎年賀の儉約　大分縣大分町にては、年賀に郵便切手、はがき等を用ふるは、不經濟なりとの趣意にて、この新年には、年賀名簿といふを調製し、之を加入者に配附して、交賀に代へしといふ。ついでに、三ヶ日は、食事をとゞめ、裸にて家の内に籠り居らば、如何に經濟といふものにかなふらむとぞ思はるゝよ。　◎日本娘　米國サンフランシスコなる某方に召仕はるゝ、二十三四の日本婦人あり。某が布哇ホノルヽに在りし時乳母として、傭はれたる者なるが、爾來主人の信用を得、今は殆と家族同樣の待遇を受くるやうになれりといふ。さてこの婦人は、始より、いたく外國風に裝ふを嫌ひ、服裝は、常に、黑縮緬の紋

付をどかり、頭髮は、いつも蝶々髷にのみ結ふよし、同地にては、日本娘とよびて、其の評判たかき由なり。本國にありて、とかく外國風をまなびたがるものどもへの、つらあてとかや云ふ意にてにや。あらずや。

●中流以下に於ける所謂親の慈悲(たゞり生) 心の狂へる者は勿論格別のことゝして、わが子の行末について、心を苦めぬ親はあらざるべし。金殿玉樓に住みて、錦繍を纏ひ、玉履を穿く方々は云ふも更なり、いふせき伏屋に辛うじて雨露を凌ぐ親々なりとて、いづくにか、わが子の行末幸福なれかしと祈らぬものあらむや。然れど、彼の、**賤業婦** といはるゝともがら、人は彼等を普通の人の子として考ふることをだに、不快を感ずるものゝ、親の心は如何ならむ。或者は、**身の貧苦** に堪へ兼て、賤業と知りながら、苦境と知りながら、可惜愛子を、其處に捨つるなり。捨てらるゝ子も、亦、親のため家のために、忍どるべくもあらぬ屈辱を忍びて、身を賤業に置くものにて、寧ろ甚、憐むべき者どもなりといひ、又或者は、**身の素行** の修まらぬ果は、身をおくべきところ世になくなりて、おのづから、彼の境遇に陷りしものどもにて、大に惡むべきものなりと云ふ。數多かる中には、前なる事情にても、後なる事情にても、其の境に、身を沈めし者もあらむ。また他に、多少道理らしく聞ゆる口實を有する者もあらむ。唯、驚くべきは、**眞實なる親の慈悲** にて最愛の子を、進みて賤業婦たらしむるものあることなり。是を以つて、或は實際世にあり得べからざることゝ思ふ人もあるべし。然り、余も、亦、嘗つては、大に之を疑ひ

たりき。然れども、中流以下に於ける親々の心には、子をして賤業婦たらしむるは、其の子の行末を多福多幸ならしむるに、最も適當なる捷徑なりと信ずるもの多きを如何にせむ。

彼等は何故に　斯る無慈悲至極なる、慈悲を行ふを敢てするか。まだ、如何なる事情より、斯る殘酷なる信仰を求め得しか。これ大に、先進先憂を以つて任ずる人々の、注意研究を要する事ならずや。

聞く所によれば　彼等の或者は、現今の家庭の不圓滿なるに飽き果てたる結果、斯る信仰を得るに至れりと云ふ。古來、彼等の間には、姑を鬼と假名せり。而して小姑一人を鬼千に喩ふ。現今なは、是の比喩を、否定する能はざるのみならず、ます〳〵、之を實にする方にのみ傾くなきかを疑はしむ。見よ。たゞ嫁の短所をのみ擧げて、苛責垢罵を絶たざる姑。嫁の失策を搜りて、母鬼に報告するの榮を得むと待ちつゝ、若し、搜し得ざる時は、事實を揑造してさへ、讒訴せむと努むる娘鬼は、一町内一村の中、必ず數十を有せざるところとてもなし。斯く不愉快危險の中へ遣りて、其の子多福多幸なるべしとは、誰も信ずる能はざるべし。然れば、是等の事情も、たしかに、其の一因たるには相違なかるべけれど、世の親をして、無慈悲至極の慈悲を敢てせしむるに至りたるは、猶、他に種々なる誘惑が、彼等の無智なる慈悲心、わさはかなる情を、攪亂するものありて然るなり。いざ、次々に是等の事情について物せむ。（未完）

●新年附錄　例は新年附錄を添へたりしが、今年はおもふところありて、その事をとゞめつ。ただこれより、大に面目をあらため。記事をゑらび、以つて、多年愛讀の榮に報いむことを期す。讀者

幸に之を諒せられよ。

新刊

●日本婦人　帝國婦人協會發行

帝國婦人協會の機關雜誌として、發行せられしものなり。二號の發行に接して後に、委しく紹介せむ。（一册定價十五錢）

●姫百合　四谷區右京町　姫百合社發行

論說學藝史談家庭文苑小說叢談時言の諸欄あり。余輩は甚だ、女子のために力を致さむとする多くなれるを喜ぶ。姫百合、雪霜にしほれず、幸に健在せよ。（定價一册拾錢）

●女大學評論、新女大學、　福澤諭吉氏著

阿房陀羅坊主が木魚を叩きつゝ、阿房陀羅口調を以つて天下の大勢を說き、人倫の大道を論じたりとて、誰かは耳を傾くる者あらむや。また、放蕩兒を訓戒せむとするにあたり、賤女の卑陋なる物言ひざまをまなび、あさましき風態をならひつゝ、而も、洵々として不心得を諭す親あらば如何。これ痴愚にあらざれば狂なり若し之を聽くが如き者あらば、其は寧ろ頗る甚た滑稽なりとして、一時の興を貪るに過ぎざらむのみ。女大學評論、新女大學の如き、全く彼の親彼の阿房陀羅坊主の口吻なり。其の用語の野卑なる言語に絕せり。しかのみならず、說くところの趣意も、亦いたずらに奇矯を衒ふのみにて、はなはだ、淺薄なり。若し夫れ彼の言ひ樣にならひて之を評せば、（イサヽカ恥しき感あれど）世の中には、飛んでもなき馬鹿者もあればあるものにて、何でも僅に聞く用ゐらるゝものを、片端よりブチこわせば、イラキ者の樣に誤り考へ、無暗矢鱈と、ブチこはし主義をふりまはす者多きこそ歎しき次第なれ。さるからに、ものゝよき所などは勿論見ることなく、唯々短所を探さうとするに急なるより、遂にはのぼせあがりて、さうでもなきことに喰ツてかゝるなど、所謂メクラ滅法界の次第なり。この評作者も亦其の類にて、先づ女大學は女のために作りし者といふをさへわすれ果てたるものなり。イヤこんなことは、女子ばかりにでもアンメイなどゝ、くりかへし評論するところは、丁度、先生にむかつて、先生といはるゝ程の者は言語をつゝしみ品行を正しうせねばならぬものといへるを、なにをヌワケな、ソンナ事は先生ばかりでもアンメイと、イラさうに小理窟を言ひたてると同じことにて途方途徹もなきヌワごとならずや。又新女大學の中には「都々一は三味線に撥を打付けてコリヤサイなど囃立つるが故に野鄙に聞ゆれど三十一文字も三味線に合してコリヤサイの調子にて唄へば矢張野鄙なるべし」などいふ調子の議論のみ多し。新女大學など言はむより、お轉婆大學、アバズレ大學とでもはたゞ適當ならむ、と思はるゝ、我が女鑑の讀者には、聞きも及ばぬ言語同斷の脅き樣なり。余は斯る者を新聞紙にて公にするのみならず、一の敎訓書として發行するが如きは、福澤諭吉という人の名のために之を惜み、又かゝるものを敎訓書にせよとて與へられたる女子のためには、寧ろ非常に侮辱せられたる者との感なきあたはず。（まに生）





教の庭

一月五日兼題　山家新年

天　甲府市山田町　名取正代子

山の井の千代のわか水くむごとに
にごらぬ御代をまづあふぐかな

地　大隅國肝屬郡鹿屋村　山田稻子

やまたかみ人もとひ來ぬ松の戶に
はつ日のかけのまづそにほへる

人　信濃國東筑摩郡顯尻村　高砂き代子

かた山のひなの里りもにきはひて
御代ゆたかなるとし立ちにけり

人　肥後國玉名郡川沿村　德永篤子

さはがしき世をしら雪の隔つれば
しづかにとしをこゆるやまさと

秀逸（十二首）

自からおひたつかどの若松に
としをむかふるやまのしたいほ　鹿兒島　丹下花子

仇し世の塵も浮ばぬ山の井に
さすやはつ日のかけのさやけさ　長崎　日高かず子

山里はおのづからなる門松に
千代をちぎりてとしたちにけり　東京　久松誠子

家每にみ旗かゝけてやま里の
としのひかりをあふぐけふかな　三河　服部正子

山里も年立つ今日はしかすがに
御代ほぎかはすこゑぞにぎはふ　青森　阿保まつ子

よにうとき片山里もあら玉の
としはみやこにおくれざりけり　松山　二宮敏子

降積る雪に閉ぢたる柴の戶は
あけてのどかにとしむかひけり　三河　永井さい子

初日陰さすかにけふは山里の
しづかふせやものどけかりけり　石川　山崎あくろ子

山里の雪まの梅もほゝゑみて
のどけきとしをむかへけるかな　岡山　降田楨子

年たてど人まだ訪はず咲く梅も
ゆきにうもるゝやまのしたいほ　甲府　坂田喜美子

山里にのかれすむみも新玉の　としはうれしくむかへけるかな　石川　井上つさを子

人かげの常はまれなる山里も　としたつけさはにぎはひにけり　東京　井川　澄子

（以下原稿到着順）

ことほぎにくる友もなしやまざとは　よしやのどけくとしはたつとも　菅谷とみ子

人とはぬわがやまざとのかくれがを　いかにたつれてとしはきにけり　伏脇米子

よにもれぬためしなるかも山ざとの　おくともいはすとしは來にけり　屋舗鈴枝子

たくはへのま柴たきつゝにひとしを　ゆたかにいはふゆきのやまざと　綿野りき子

あら玉のとしのはじめはやまざとの　みやこもおなじこゝちこそすれ　田中俊子

初がすみたなびきにけりやまざとも　ゆたけき御代のとしたちぬらむ　南里佐多子

たつ春はいつこもおなしけさのそら　まつのはしらにしめなはそはる　田山芳子

やまがつもかたふく軒にうらやすく　としをむかへてみはたたてけり　千勝よし子

訪ふ人もなくてすきぬるやまざとも　みはたとゝもにとし立ちにけり　千勝みへ子

あしひきのみ山がくれにすむひとも　うごかぬ御代をいはふけふかな　酒井れい子

としたちて老いもわかきも遊ひけり　みやこもおなじやまざとの家　赤尾よそ子

すみわひてうきみをかくす山ざとも　かすみたちこめはるはきにけり　駒澤しげ子

柴のとにたつるかど松いろそへて　みやこもおなしはるはきにけり　駒澤まつ子

よにうときみやまの賤もあらたまの　としのはじめやうれしかるらん　本多靜子

門松と思へばいろもまさりけり　みなれし山のまつの梢も　佐藤君子

とふ人もなきやまざとのわがやども　としたちかへるけふのうれしき　高やす子

ことさらにしづけきものは足ひきの　やま家のとしのはじめなるらむ　佐々小琴子

齒がための餅をいはひてやますみも　みやこにおなじとしやむかへむ　佐々有鄰子

人とはぬやまざとなれはうくひすと　ともにいははんとしのはじめを　道家しつの子

山すみの家のゆたかにあらたまの　としのひかりやみちわたるらむ　川島歳子

山家にもとしやたつらしすみがまの　けむりもけさはかすみそめけり　河村君子

柴の戸も八重のくまちもおしわけて　とよさかのぼる初日のでかな　矢田部信枝子

あらたまの年たつけさはやまざとも　みはたかゝげていはふのどけさ　萩原章子

雪ふかきみやまのさとも日のみはた
かゝけて御代をいはゝぬはなし　西川順子

山か川もふるきの岩にしめすへて
のほるはつ日のかけをながむらん　小川初野子

花さけごとふひともなきやまざとに
まづあらたまのとしの來にけん　栃塩齋子

山ざともうたけのこゑのにきはひぬ
ゆたかなる世のとしのはしめは　尾倉益子

何ごともよはなれたりしやますまひ
さすかうれしきとしのはつかせ　永山登子

あら玉のとしたつ今日はなにとなく
しはのあみ戸ものさかなるかな　佐野幾代子

やまふかきわがいほなれど乙女子の
はれつくおとのうちしきりけり　鵜澤千代子

はろかすみまだたちそめぬ山さとも
としのはしめはのさけかりけり　小笠原元子

すみかまのけむりたなひく山さとは
いかにのさけきさしむかふらむ　立神富子

さわかしきみやこを遠くへたてゐて
こゝろしつかにとしむかふなり　齋田直子

うくひすの鳴くれ床しくあけそめて
はつ日のさけきやまかけのいほ　安原國子

雪ふかきたにまのさともあらたまる
としのはつ日にうちとけにけり　松本きくの子

ちりのなききよけき春はゆきかすみ
こむろやまべのさとにこそ見れ　松本みよし子

あらたまの年のしるしやゝまさとも　小野たつ子

のころくまなくはるかせのふく
こよみだに見ぬ松かづのやまざとも　田中こま子

さすみひかりにはるや知るらん
おとゝひもきのふもすぎて山家なる　菱田花子

おきながのべにはるはきにけり
あらたまのとしたつけさはやま里の　磯野こと子

しづかふせやもはるはきにけり
年たてばみやまのおくもあしたづの　内藤順子

千とせをいはふこゑのごかなり
初日かけうらゝにさしてやますみの　田代艶子

いほりのさかにさしたちにけり
かけひよりおちくる水ものさかにて　田代綾子

さしたちかへるやますみのいほ
みやこにはおくれかちなるやま里も　道廣やね子

さしのはじめはおくれさりけり
賤が家のゝきのまつかぜおさたねて　佐々敏子

しつけきみよのとしたちにけり
聞きなれし松かぜさへものさかなり　高橋かれ子

としのはしめのやまかけのいほ
たちかへる年はきにけりひさゝはぬ　羽田三緒子

かたやまさとのくさのいほりも
山さとはおのつからなるかさまつに　河田いし子

またみさりそふとしはきにけり
やま里のしつかふせ屋もまつ立てゝ　高砂菊代子

たのしきとしをむかへつるかな
なにごともおくれがちなる山ざとも　清河照子

したつけふはおくれざりけり

ゆきふかみひとさと遠きわが家にも
はつ日うれしくさしはきにけり　菅原ゆき子

山家なるわがすむさともあづまなる
みやこともにはるはきにけり　亀井玉子

山ざとにかゞやくゆきのひかりこそ
としたちかへるしるしなりけり　駒井うたの子

雪ふかき小やまのさともいまさらに
はつねのかげはかゞやきにけり　柳塲はつゑ子

いかにして年つきしらぬやまがつは
あらたまる年のけふをしるらん　齋藤ふさの子

霞たちたねまく〳〵に見ゆるかな
あらたなるとしのはるの色はも　山崎ひろ子

なにごともさびしさがちのやま里も
としたつ今日はにぎはひにけり　柳塲さく子

あら玉のとし立つけさのはつ日かげ
山へのさともかはらざりけれ　永野愛子

ひと訪はぬ山のおくにもさりぞなく
いつこもおなしあらたまのはる　柳澤みよ子

山ざとの御代のめぐみにあたらしき
としのひかりはあふがれにけり　名取よし子

よにうとき賤のすまひもあらたまの
としのはじめはひとつなりける　水川みつね子

うきよにはとほきやま家もあらたまの
としたつかげはへだてざりけり　椎野ぬき子

やまふかき賤のふせやのはつ日かげ
くもりなき世のためしなるらん　永田うめ子

あらたまのとしいはふなり柚木こる
おきなも神にしめがざりして　敷島花子

山ざとはおのづからなるまつたけに
注連ひきはへてとしいはふなり　笹子茂子

はつはるを祝ふこゝろはやまざとも
みやこもさらにかはらざりけり　山根久子

大きみのふかきめぐみの立つとしは
すみたく小屋ににほふ日のまる　村田嘉子

やまざとの門にたてたるまつたけの
ちとせをこめていはふなるらん　早川信惠子

あら玉のとしたつけさはゆきふかき
このやまざともかすむのどけさ　鮎原董子

千とせふるいほりのまつに新たまの
としをそいはふたつのひとこゑ　山田きよ子

うすみ火のもとをはなれぬ山ざとは
としの明くるも名のみなりけり　諸井久良子

をとめ子の手まりの音のきこゆるは
やまべのさともとしやたつらむ　柳田里子

あらたまのとしたつけさは山ざとに
ゆきげのみづのおともしづけし　片山あや子

松かぜをともきゝつるやますみも
たちかへるけさのとしをいははむ　河郁幸子

手つくりのわかざりかけて山ずみも
こゝろやすけにみゆるしづかな　舘脇ます子

霞ながらかすむをみればやまざとも
としはへだてず立ちにけるかな　戸塚てつ子

世にうとき山家に住めばあら玉の
としのくるまへおそくもある哉　吾妻ちか子

雪ふかきやまざとなればたちかへる
　としむかへさへいかゞしてまし　内田とく子

あしびきの山にすむ人もあらたまの
　わかもちいはふはしはじめかな　宮田けい子

あら玉のとしたつけさはましらなく
　やまべのひともいはゝぬぞなき　榛本錦佐恵子

さびしらにとふ人もなきやまざとも
　としたつけふはきのふにもにず　村田のぶ子

松の落ばひらふをとめもとそくみて
　まつむかへけりとしのはつぞら　寺尾さかへ子

み山よりとしやたつらむやまざとの
　みやこにしらぬけふののどけさ　寺尾まさ子

年立てるけさとしいへはやまざとも
　さけにほきことくみかはしつゝ　八木沼里子

年たてはつれはさびしきやまざとも
　みよほぎかはすこゑぞにきほふ　坂田彌代子

やまざとのしづがふせやも年立ちて
　ことほきかはすこゑそにきはふ　濱野時子

天さかるひなにしすめとあらたまの
　としをむかへていはふきみかよ　上村ちと子

のがれすむかた山ざとのいほなれど
　としたつけふはにぎはしきかな　尾崎嘉子

山の奥もいづこもおなじあらたまの
　いくよかはらぬはるのみいはひ　敷島ふみ子

新らしき年は来れどもやまざとは
　雪ふりつみてとふ人もなし　吉田定子

やまざとはにほへる春にほころびて
　いろかゆかしきしづがをとめ子　玉井ひで子

こととしけきみやこをさりてやま里の
　としのはじめをむかひぬるかな　横手こう子

あたらしき年のはしめののどけさに
　をのへのまつもにきはひにけり　横手たつ子

あらたまのとしたつけふは山ざとも
　しばのあみ戸にしめかざりして　横手ふく子

松風の日もすがらたえぬやまざとも
　みやこにおなじとしのたつらん　今井まん子

かご松にはつ日さしそひことさらに
　あらたまりても見ゆるやまざと　青木たま子

明けぬれは雪にとぢられし山がさへ
　はつ日のかげにのどかなりけり　月野さへ子

あら玉のとしのはじめののどけさは
　みやこにもますみやまべのさと　内野千代子

さをしかのこゑあはれなるやま里も
　としたつけさはへだてざりけり　杉村壽賀子

まつたけのいとなみもなき山ざとも
　とし立つけさはのどけかりけり　高野さと子

やま里もかまどのけむりかすそひて
　ゆたけき御代のとしはかへりぬ　池江榮子

あしひきのかた山ざともあらたまの
　としのはじめはにぎはしきかな　池江もと子

しめはへてとそくむけふは山かぜの
　吹きすさひにしやさしもなし　西村章子

目になれし嶺のなみまつあたらしく
　とし立ちかへるやまもとのさと　竹村竹里子

ゆきふかき深山のいほもあらたまの　白石さだ子
としたつけさはのどかなりけり

のどかなる御代のひかりとやま人も　林　久子
のぼるはつ日をあふぎこそすれ

月日にもうときみやまのかけながら　林まさか子
としたつけさはのどけかりけり

あしびきの山に住む身のうれしきは　三野てい子
かすみのうちにむかふはつはる

あらしふく山邊のさともあらたまの　松原りう子
あしたになればたのしかりけり

うち日さすみやこにちかき山ざとは　吉富彦子
みそらのどかにとしたちにけり

十かへりの花むれやまのおくのさと　村上昌子
のどけきとしをむかへつるかな

山ざとにいとなみたてしかどまつの　松永信子
いろものどかにとしはきにけり

なにごとも世にはおくるゝやま里も　佐々木忍子
今朝あたらしくとしたちにけり

山かげのささののきはにたちかへる　佐々富枝子
としもゆたかにみゆるはつそら

大きみのめぐみにもれぬやまざとの　受樂院圓子
みやこにおなじとしは來にけり

山ざとのしづがわら家もおほきみの　平山政子
めぐみにもれずとしたちにけり

とふ人もたえてまれなるやまの家も　稻津千子
みやこにおなじ今朝のにひとし

やま里はおのつからなるかどまつに　二宮春枝子
ゆきふりながらとしたちかへる

のどかにも年たちにけりちりの世に　由井浪子
たつとはりなきやまかげの里

やまざとも年のはじめぞにぎはしき　二宮章江子
はなのみやこはいかにかあるらん

手つくりの酒あたゝめてやまざとも　柴田久尾子
としたつけさをいはふみ代かな

めづらしく柴の戸あけてやまひとも　齋藤よし子
今朝ははつ日のかげあふぐなり

山ざとはまつたてぬ庵もあるものを　尾島幸子
いかでかとしのさきに來つらん

くすりざけ汲みかはすべき友もなし　都水春子
かたやまざとにとしは來ぬれど

こゝろから軒のやまゝついろそへて　目黒佐喜子
いほりのどかに今朝としたちぬ

天つ日のひかりあまねしみやま邊も　河原芳子
としのはじめはのどけかりけり

降る雪にゆたけさ見ゐてやまざとの　津村さみ子
しづがいへにもとしは來にけり

なげきこる斧のひゞきもあらたまの　坂倉さし子
としのはじめはのどけかりけり

子らつれてとひつとはれつ山ざとも　持地桃枝子
としのはじめぞにぎはひにける

のきちかきみねのこ松にたづみゐて　藤村識子
みやこにしらぬとしをむかへき

あら玉のとしたつけさをうぐいすの　戸倉信子
はつねにしらんしばのいほりも

やまかづのはかなき庵のすみかにも
としたちぬらしまつたてにけり　上田綠子

ゆたかなる御代のしるしと年の端に
やま家のけぶりにきはひにけり　小河畔子

さしのぼるあさひの影もけさよりは
のどけさまさるやまのしたいほ　三木壽子

やまさとの草のいほりもはつはるの
あさ日ににほふ日のみはたかな　吉田政榮子

やま里もまつたてわたししめはへて
こゝろもひろくいはふ今日かな　酒井鐵子

ことさらにたてしにはあらぬ山松も
としたつかどににぎはひにけり　東野さく子

かぜさむく野げながらのやまさとも
としたつけさはのどけかりけり　石川樂子

ふるゆきのつもりて消えぬ山さとに
はやあたらしき年はきにけり　石川久子

御代ほきてとそくみかはす山かつも
あかきこゝろをいろに見せつゝ　石川なゑ子

山かつのあれしのきばも日のみはた
かゝげていはふ御代ぞたのしき　石川ろい子

手つくりのみきくみかはし山かつも
としのはじめをいはふけふかな　神田秀子

里の子も千代よろづ代をうたひつゝ
としたつ今日を祝ふなるらん　小野花子

山さともあさ日のみはたひるがへり
としのはじめといはふはつはる　辻さみ子

訪ふ人もなきやまざとのあらたまの
としのはじめはのどかなりけり　石内富久子

あら玉のとしたつけふはそれとなく
みやまのいほものどけかりけり　大谷津峰子

あらたまの年たつけふのことぶきは
みやまのさともにきはひにけり　富田壽子

九重のくもゐはるけきやまざとも
とし立つけふはにぎはひにけり　宮田郁子

やまさとはうき世の道のたえぬれど
のどかにかよふとしのはつかぜ　鈴木秀子

新たまのとしたつ今日はやまさとも
みやこのそらにおくれざりけり　藤本ろく子

鶯はなきすゝめはうたふやまさとの
としのはじめはたのしかりける　林はる子

何こともおくれがちなるやまさとも
としたつけふはかはらざりけり　河方喜代子

あら玉のとしたちかへるやまさとは
おのがまゝなるかどのまつがね　德永萬壽子

山さとのしばのそでかきしもながら
今朝あらたまのとしはきにけり　德永廣子

あし引のやまのいほりもとしたちて
ゆきもひとしほながめよき[illegible]な　澤田春子

山さとも年のはじめはうなゐ子が
よききぬきるをよろこびにけり　村上操子

あらたまの年のはじめのうれしさは
ひなもみやこにかはらざりけり　田村多豆子

をさまれる御世のしるしと山家にも
千代ろよづ代といはふけふかな　北澤はつ子

やますみはみれのおい松さながらに　かさまつさみてひさりいはゝん　吉崎世根子

めでたしさこさ住ぐ身にも聊つらむ　さかひらおほき深やまべのささ　德永そう子

おほ君の御代のめぐみにやまささも　さしたつ今日はにきはひにけり　彤山ささ子

やまざさの人もさひこねしばの月に　はつ日を千代さこりのつげゆく　根田よし子

治まれるみよのめぐみにやまざさも　さしたつけふのにぎはしきかな　金森俊子

山ささのおのつからなるかさまつも　千代〳〵めか住にみゆるけふかな　新井さ代子

あたらしき年はきぬれさやまささは　いまたいさなきさしのくれなり　河合縫子

しらゆきの道ふりうつむやまささに　あさこそみねぬさしはきにけり　服部萬子

白ゆきのいよゝふりしくやまささは　年のひかりなになにゝしるらむ　加藤數子

ふる雪にみちたねはてしやまささは　ひさこそさはれさしはきにけり　伊東千代子

しはかきも去年のまゝなるやま里は　さしのさかりなになにゝしるらむ　伊東以左子

門まつはおのづからなるやまささの　かはらすさしはたちわたるらむ　三宅中枝子

立ちかへるさしのはしめは都のみか　かたやまささもかすみそめれり　久松かれ子

人さはねわがやまささはたにかはの　友永章子

天つちさしづかなる世のさしたてば　みづのおさよりさしやたつらん　那須昌子

あたらしきさしのかざりゝ山すみは　やまささもなほにぎはしきかな　中山庫子

松のはしら竹のゆかにもこさたりて　おのづからなるかどのまつがね　村崎包子

山すみもさしたつ今日はまつかぜの　わがやまささもさしたちにげり　黒田明子

人さはぬかたやまささはこささらに　こゑあらたなるこゝちこそすれ　黒田美津子

一月五日兼題　新年を賀する文

天　京都古門前通大和大路東入古西町十二番戸　川島篤子

あら玉の年立かへりて、明ゆく空の氣色、きのふにかはりたりとは見えねど、ひきかへ、珍らしき心地せられてなむ。實に、高きいやしき、其程々につけて、樂しみ、打興じたるさまは、いつの朝かはかはらむ。去は、人のうへのみならず、門の松たけ、靜なる朝風にそよめくも、君が代を、千代とうたふ聲かと聞え、床の梅柳、美しき日影に色めきたるも、家人のよろこべるさまを、もてはやし顏に見ゆれば。軒の雀も、千代〳〵とさへづ

り、よろこびを告るなるべし。かく、いづこを見ても動きなき、治る御世のめでたさ。誠に、わが大御代の、いやさかえに榮えゆくべきためしならむと、いともく、貴くことはきまつるになむ。あなかしこ。

地　　四谷傳馬町一ノ五十四目黑方　都水春子

大御代の惠あまねき日本の榮え、いよゝ限りなく、實におだやかに、また立ち返る年の初日に逢ふ嬉しさ、まことに目出度くも、目出度くなむ。储も、かそいろの君を始め參らせ、打揃ひ給ひて、鶴の齡を重ね給ひぬる御こと、限りなうことはぎ參らすになむ。こなた事、またひとしなみに、年迎へ侍りぬるを、御心やすうおぼせ。去年は、何かと淺からぬみ情けを給はり、嬉しうも侍るを。爰に亦、年は變れど、變らせ給はぬみ心の程を、只管賴みまつるにこそ。何くれと、聞え上ぐべきふし、さわに侍れど、靑柳のいと長き日にゆづりて、まづは、新年のよごとのみあなかしこ。

人　　三重縣度會郡宇治中之切町　河原芳子

明らけく治まる御代に生れあひて、來る年ごとに、つゝがなく、天つ日影ののどかなる御光をかゞふりまつることのたのしさよ。千代に八千代にさゞれ石のと、君が代うたふうなゐ子の聲のめでたさよ。あはれ、このたのしき、めでたき年のはじめのほぎ言は、つたなき筆もてのぶべくもあらずかし。山深き賤が伏屋も、何となく心すがくしきを、まいて、九重の花の都にましますおもとは、いかに、御心ゆたけく、年の初日をむかへますらんと、おもひまつるもうらやましうなむ。いでや、若水を料に筆をしめして、思へるまゝをかくなんきこえまゐらす。

九重の花の都にあら玉の
　年をむかふる君をしぞ思ふ

秀逸三篇　　西川順子

かけまくも、かしこき御わたりより、あやしきしづが伏屋まで、たちかへるとしのはつ日かげ、うらゝかにさしそひて、旭のみはた、朝風に打靡き、君が代の千代を祝はぬはなきを、玉しきの都にゐまして、祖父の君をはじめまつり、いつくしき和子たちまで、にぎはゝしく、新らしきとしをむかへさせられしめでたさよ。こなた、父母はらから、

いづれも事なう、とそ汲みかはし侍れど、み心安うおぼし給へかし。稚子どもの羽根よまりよと、ののしるにつけても。互にむつびし折の床しうなむ。よろづは、春たちてこそ。あなかしこ。

名取正代子

年立ちかへりぬるけふのめでたさ、天つ日の照さん限り、いづこの里か、よろこび壽ぎ侍らざらむ。さるが中にも、玉しきの御わたりは、かゞやきわたる初日の御旗をはじめ、門毎に立渡したる松竹の色も、いかばかりめでたうにぎはひ候らん。まして御やかたの內は、御一方をはじめまゐらせ、和子君たち、御揃ひ、爽かに、御年むかへさせ給ひつらんと、御うれしうこそ。こなた、數ならぬ伏屋にても、ほどほどに例の祝ひごとゞもつかうまつり侍れば、よそ事ながら、御心易うおぼし給ひてよ。さても、昨日の程は、一夜明けなば、まゐのぼりて、新としのよごと、さては去年のあつき御情のよろこびなど、これかれ申聞えまほしう思ひ給へりしに、今朝とくより、こなたにも、訪來るまろうどのおくりむかへにいとまなきまゝ、なめけながら、今しぜし、えさぶらはず、いづれ、松の内すごし侍りて、よろづはきこえあぐべくこそ。

あなかしこ。

岡田はる子

一夜あけぬれど、己が心も、とみにはれ〴〵しうなりゆきて、乙女子が羽子つく音にも、年の始のゆたけさは、思ひしられ侍り。さても君には、たひらかに、御齡かさねさせ給ひけんと申しのぶべきほぎこともおぼえずなん。實に人の心もあらたまるとかや。常にみなれたる、庭の老松も、今日はいとはえあるさまなるに、たづもきて、まひなど、いかにのどけからましと、物しらぬ身にも思ひ侍るを、まして敷島の道に秀で給へる御身には、定めて、めでたき御言の葉も、あまた打ちいでさせたまひつらん。二つ三つだに、伺はまほしうてなん。あなかしこ。

（以下原稿到着順）

菅谷さみ子

あらたまの年たちかへりぬ。君には、いかにおはしますらん。こゝにもことほぎせんと問ひくる人、たれかれつどひて、つゝがなく年の始じめをよろこび侍れど、君のみ、雪のゐる峰をへだて給ひて、まのあたりきこえうけたまはぬをいかにせん。さはいへ、雁のゆきかひだにたえずば、遠くて、近きたぐひとや云はん心地せらるゝまゝに、うちつけなるものから、年のはじめのことほぎ申し侍る。

よしや君にしと東にわかるとも
　　ともに祝はん年のはじめを

菅谷ゆき子

年改まりて、御許には、いかにおはしますらん。さだめて都には、門毎に立渡したる松竹、いと賑やかに、日の御旗きらめき、うま車にものし給ひて、年のはじめのよごと申しにのぼる司人のため、ひろき大路も所せくて、にぎやかに侍らんこそゆかしけれ。こなたもつゝがなく越年致し侍れば、幸ひにやすんじ給ひてよ。さはれ、うらやすの民とうまれしかひをもえ立てず、かゝるひなにありて、御代のたのしみに、はらづゝみうちならすばかりにて、何のいさをしもなく、新しき年のみむかへて、深山のうもれ木とくちはてん我に、ひきかへて、御許には、都にものし給ひてより、學びの道にいやすゝみ給ふぞ、中々にうらやましくなん。まづは年のはじめのことほぎ聞えまつる。めでたくかしこ。

三島しづ子

立ちかへる、年の始め御ことぶき、めでたく申納めまゐらせ候。先以て、御やかた、皆々様御揃へあそばし、鶴亀に御齢重ねさせられ候御事と、千代萬代とほぎ申上候。降りて、こなた、皆々替りなく、加年いたし候まゝ、心安く思召下さるべく候。此の箱根細工粗末なる品にて、御はづかしき限りに候へども、御笑納下され候はゞ、こよなき幸にこそ。なほ今年も、去年にいやます、御交らいの程、偏に願上候。餘は、ゆたかなる春の若竹萠出る頃を待得てと申殘候。目出度かしこ。

綿野りき子

あら玉のとしたちかへる初霞、浦々津々までもゆきわたり、いともめでたきおほんことになむ。御やかたの君々、打ちそろはせ、若葉の春をむかはせ給ひしとよ。濵のまさごのかずよろこばしく、野邊の小松の末かけて、御ことほぎまつるになむ。次にくさの庵も、一ごう恙もなう、としを重ねはべれば、みこゝろやすうおぼしめしたまひてよ。此の竹の子、いささかにはべれど、たけかはの代々にさかへまさむやうにと、雪間を分けてもとめさせ侍りぬ。何れ程ちかきにまう上りて、よろづ御ことほぎ聞ゆべくあなかしこや。

駒澤松子

鶏のこゑにさし昇る朝日の影は、照さぬ隈もおはさず。戸毎にたつる門松の、みどりゆかしく、春を向ふるさまえもいはず。野邊の若草色そひて、池の氷も、消えうせ、霞こめたる梅が枝に、こゑも長閑にさへづるうぐひすも、いとなんおかしうおぼえられ侍る。目出度春の御祝儀、都も千里の外も、同じ玉椿の八千代をこめて、祝納候。さて御許様には、不相替、御賑々しく、幾千世のよわひ重ねさせられ、御嬉しうこそ。次に妾事も、同じく年をそへ候。御安心もじ下され度、何れ御目にかゝり、萬々申上候。先は年の初の御祝ひまで。あなかしこ。

佐藤君子

軒端の霜だに見え侍らず。あけ渡る、みどりの空のにほひやかに、まして風なき大路には、やり羽子の音など、はや心もあがるやうにてなん。お許には、御あたりさわやかに、はがための御式つゝがなう御すませ給ひし御事と、門の松竹末かけて、汀の亀の萬代つきぬためし、いとゞ嬉しうことほぎまゐらするになん。こなた童も年一ッとり重ね侍れば、御心やすうおぼし給ひてよ。こぞは思の外の、御うと〳〵しき、去りところなき罪は、暮行きし年と共に、流るゝ水にながし給はゞ、いと幸にこそ。年甫の御しるしまでにまがきの、梅が枝一本、かはらぬしるしばかりにて。萬は青柳の糸の長きはるの日に、さふらひてきこえ上ぐべくなむ。

あなかしこ。

佐々有鄰子

立かへる年のはじめのことほぎに。硯の海に、松のけふりをすりながし、鹿の巻毛の筆を以て、こをろこをろにかきなせば、沖の方には、波文うるはしく、うかび出て、紫の雲にまがひ、鶴さへ舞ひかなづべく、鯉さへ踊りつべくみゑて、いとうるはしき年の初の日影のどかに、御越歳あそばされたまひしならん。妾も、父母をはじめ、姉弟ともに、靜けき年をむかへ侍りぬ。おなじこゝろによろこばせ給へかし。あなかしこ。

河村君子

昨日の、空の氣色なごりなく晴れ渡り、うら／＼とのぼる初日影、いと花やかに、人の心の浮雲も、一夜のほどに、いつしか消ゑゆきて、童ならぬ身にも、をさな心のむかしにたちかへりて、うれしきは年の始じめなればなりけり。されば、都にすむ人は、云ふもさらにて、草刈る賤、藻鹽くむ海人に至るまで、祝ふべき手ぶりこそかはれ。いづれの里々、門毎に色ふかき松竹かざり、旭の御旗かゝげて、今日を、いく日のたる日と、ことほがぬものはあらじ。曉つぐる鳥の聲も、軒端に物語る雀の歌も、君が大御代を千代とよろこぶらんかし。いでや、我もこのめでたくたのしき年のはじめをことすくなに、祝ひ侍らん。

大八島さかゆく御代に年たちて
　都もひなものどけかるらん

鹽見春子

まづとよ、平らかに物し給ひて、めでたき御よはひかされあげ給へらむ。年のはじめのよろこび、なほ八千世にとことぶき申す。ここにも、皆々打つどひて、よろこびの重土器とりかはし、屠蘇白散など祝ひ侍りき。昨年の程は、年かへらばやがてまゐらひて、昔よりも積る物語をきこえまほしう思ひしに、ほきことせんとて、問來るまろうどの絶間なくて、中々にいとまなければ、今しばしはゑさぶらはず。むらいのつみは、さるかたにゆるし給へかし。あなかしこ。

細野摯子

初からす、勇ましく曙告れば、若水を汲む車の響りて、窮みなき御代の春立ちかへり、「元日や後に近き大晦日」の面影は、曉の霞と共に消ゑ去りて、麗かなる晴空に、いとど浮き立つ人こゝろ和氣洋々として、千門萬戸の軒に翻へる旭の御旗も、本年はわけて、芽出度ぞ見ゑ侍りぬ。さればにや、七五三飾り門松も、色替へぬ常盤の千代八千代、家々の初春を壽ふき顔なる飾海老は、龍の珠を抱けるに似て勇ましく、一年の計ば、皆元日にありと、本年はとり分け、初日の出盛らぬ三方の鏡餅、御服は、四海同様美服を着け、屠蘇に醉ひ、雑煮を祝ふ。いとも、芽出度き年にこそなん。あなかしこ。

松本きくの子

あかつきしらす、鷄の初聲に、天地こめし霞も、やう／＼うすらぎ行き、聖の御代の三十餘より三年の世にも、ためしなき新玉の樂しき年の初めとはなりぬ、こと／＼めでたうこそ見ゆれ。軒端にかざせる日の御旗の、うら／＼とさしのぼる旭日に、照りかゞやける、千歳をちぎる松竹の緑りなる、いづれも、千代に八千代と榮ゑます、大君が姿とぞ見ゆる。常盤なる松に旭日のかゞやきて、いよゝ榮ゆる君が大御代。先づもちて、御許様かた、御一統、いよゝ御揃はせられ、安う平かにみ齢重ねさせられし御事、いといみじうめでたうなん侍る。わらはかたも、なに異なう、一同老の阪を越ゑぬれば、御心やすうこそれがはしけれ。お互にやすらかに、此のめでたき大御代に生れいでゝ、のどけき春を迎へ、ありがたき御恩にうるほふ事、一すぢに、皆大君のたまものにな

ん侍れば、露に濕ふ眞の民草、誰かはけふな祝きまつらざるべき。いで諸共に、此の樂しき年の初めの春時に、一歳のみかは、一生のこゝろざし、打ち定めて、勉めて勵みつゝ、せめつ大御心の萬の一だにも報いまつらむとこそ希ひはべれ。聊か新玉の年の喜ひのあまり、一言と祝ひ上げ侍るになむ。あなかしこ。

永野愛子

くれ竹の一夜に成ぬる、あら玉の年立けさの樂しくも、老もわかきも、うちよりて、くすりの酒をくみかはしつゝ、あけゆくそらをながめつゝ、惠もふかき君が代の、かぎりあらじと、ことほぎて、ふと思ひうかびぬ。「大君のふかきめぐみにたみくさのなびきふしけんけるのしつけさ」初日かげ、ことさらはれわたりたるけしき、家ごとの軒は、さゝげつる日のみはた、ことほぎがほなるも、ねもいはれずうれしくもありがたく思ふ心の、ひとふしを、祝ひはべるになん。

高砂きよ子

我大御代のきはみなき、年の始めの御壽、いつはあれど、御許樣には、いよ〳〵御榮ゆさせ給ひ、御そろひみ年加へ遊ばされ、限りなういく代目出度祝ひ納め侍り。こゝにわらはも、一同つゝがなくはかなき年を加へ侍りぬ。よそながら御心安め給ひてよ。先は、年の初のほぎ言まで、かくなんかしく。

佐々敏子

あらたまりぬる、としのはしめの御ことほき、千代よろづ代もかはらぬためしにて、うら〳〵とのぼるあさ日影、いとものどかにおぼね候。皆々さま御揃ひあそばし、御きげんよく、このめでたきはるを祝ひ給ふらんと、嬉しうぞんじ上候。こゝもと、いづれも、無事にとしをむかへ候まゝ、御心安く思しめしくだされたく候。さて、粗末ながら、さるかたより到來にまかせ、菓子一折進申上候。試みに、今朝よみいで、短冊にかきたる新年御題一首、つたなけれども、そへて、御目にかけ候。なほ近きうちに參上、御祝詞申述ふべく候。あなかしこ。

服部嘉子

新玉の年の始の御壽、玉椿の八千代をかけて、いはひまゐらせ候。御許樣、御揃、御うるはしく、つるかめの齡、御重ね遊ばし、限なう愛度存じまゐらせ候。此方、一同無事に年むかへ候まゝ、御氣もし安く思召下され度候。偖さや、さもしき品には候へ共、御年玉のしるし迄に、進じまゐらせ候。尙幾とせも、御かはらせなう、御引まはしの程、ねぎたてまつり候。先は、御祝儀まで申上まゐらせ候。あなかしこ。

畑中よれ子

新年の御慶賀千代かけて祝ひ納め候。皆々樣、いよ〳〵御機嫌よく、御年向へさせられ、數々の御目出度さ、萬代の御よはひはてしなう奉存候。こなた、何れも恙なくとしをむかへ候へば、御心やすく、思召給はるべく候。先は年始の御祝詞申上たさ、あらあら申上候。猶、春ふかく申述べく候かしこ。

永田うめ子

新玉の年立ちぬれば、晴れわたるみ空と共に、世の人の心もあらたまりて、ゆきかふ人も、思ふことなげなり。みやかたには、わかきおさなしきが、打ちそろひ給て、ことほぎ申すになん。わらはかた、いづれも恙なく、雪間の若菜に、年をつみそへ侍りしを、御心安く思し給ひてよ。萬は、春ふかくまうのぼりて、聞ゆべうこそ。あなかしこ。

伏脇米子

天地は、昨日の天地か。朝な〳〵、同じ山より出る日も、今朝はことに、未だ霞まぬ空ながら、何となう、昨日にかはりのどやか

にて、何がしの詠じけん、「神代のことも思はるゝ」。古手振中々に珍らしうなん。昨日迄、雪に埋れし深山木の、それとも見ねず、立續きたる門の松、打靡きたる日のみ旗、諡せぬ千代の色見ねて、あらたまりぬる、この新玉の年の始な、御許には打揃ひ、健に迎へ、しか〳〵の設して、祝ひ玉ふらんと、いと〳〵嬉しうこそ、思ひやり侍れ。こゝ許、亦いづれも平かに、一つ宛とり添へたれば、其方此方の喜取り集めて、廣らかに裁ちし袂も、包むに倚ほ狹き心地せられてなん。今朝の若水酌み競ひ、筆始にものしたる短冊二ひらに、毋刀自の一片とり添へまゐらす。同じうれしさな、同じ心よりよみ出るものから、何時も乍らの同じ趣向にて、恥かしかれど、例のお笑種迄にもとて捧げまつるなり。「繰りかへし只めでたしとうたふかなとしのはしめなとしの始は」御許にはとりどりなかしきが侍らんと、いとゝ床しうなん思ひ給ふる。例何心なう讀みふるしたりし、「世にありとある人の姿形心ことに粧ろひ、君なも我なも祝ひなどしたる樣殊になかし」てふ言の葉も、今朝ここにおほねてなん。いづれ近き程にさぶらひて、萬祝ひ言聞ね上げん。後れ勝なるみにも、こればかりはと思ふ心から、年の始の、此文ながら、只何事も言ひさし侍りぬ。あはれ嬉しさ、身にあまりての心躁、年の運さへ空にてなん。なめげの跡はさる方にて、とても天地は、昨日の天地か。改りぬるは年か心か。めでたくかしこ。

村田よし子

きのふより、空はれわたり。背斐の山も　うるはしく、早や新玉の年尾の上に来たる心地せられ候。けさうれしげになく、小鳥のこゑ〳〵にめさめ、あたりを立ちまはり候處、東の空に横はる、あけ方の雲、庭の樹がねにさへづる鳥、筧より落つる水、遣水より立つけぶりなど、何となく新らしげに、そよとふく朝風に、さそはれ來たる、あら玉の年こそ、萬里の外まで、御同樣めでたきことと存ぜられ候。そなた樣に於いては、御家内、皆々樣、うち揃へ、うち喜び、御重年なされ候ボと、乍陰よろこび居候。こなたにても、何のさはりもなく、加年仕候間御放念なされたう存候。一年の謀は、年の始めにあるとかや、昔の人のいはれしも、げにさることとこそ存ぜられ候。この新らしき年の初めに、いろ〳〵のわざの基を定められ、もろともに、ことしを愉快にさはりなく、送られんやうにと、喜ばしき年の初めに、祈り申上候。うれしき新玉の年を、御祝ひ申上候。あなかしこ。

山下やよ子

年たちかへりぬる今朝はしも、何となくことと新らしうおほねはへりて、軒はの松の風の音も、君が代祝ふ千代のしらべかと思はれて、いと〳〵うれしうなむ。さてもその御もと、皆々樣打そろはせ、御にぎ〳〵しう、つるかめの御よはひを重ねさせられ候御事、たてつられたる門の松竹、幾千代かけて祝ひなさめまゐらせ候。次にこゝもと、とり〳〵かはりなく、年むなかへ申候。いつも〳〵、撰にもれさせたまはぬ、おに見せまつらむは、いとやさしけれど、獻笑のたにとく、御笑草までに、一ひら二ひら巻こみ侍り。なこのわさとなごかめ給ひそよ。目出度かしこ。

稻原菫子

新玉の始の御壽、幾千代と祝ひこめ侍り、御あたり、いよゝのどかに、初春の御祝ひ事ども、いさゞにぎはしう、いかばかりかおはしますらんと、中々に、めでたくなん。幸方も、いとあねかに、齢をかされ侍れば、御心安くおぼし給ひてよ。まづは、一ひらの文さゝげて、ことほぎ聞ねまゐらするになん。よろづは、若菜のせりの根にかけて春深うこそ。かしこ。

野里もと子

りぬる、年の始の御ことほぎ、かど松の色かはらぬためしに申納め候。伯母上様、御はじめ、どなた様にも、御機嫌麗しく、新玉の春を迎へさせられ、いと〲嬉しく存じ候。此方、みな〲、事なう年一つとり重ね候間、御心安う思し給はれかし。こぞは、誠に思ひのほかの御うと〲しさ、去りごころなきつみのほども、年立ち、やがて、御目もじの上、御詫び申上べきを、心ならずも、猶まらうどなどの、あはたゞしさにまぎれ、文にてのりやくぎ、おぼしゆるし給はらば、かたじけなく候。此の品あらけなきものながら、御年玉のしるしばかりに、進め参らせ候まゝ、御笑納下され度候。先は、新玉のことほぎまで、あなかしこ。

矢野なを子

あらたまりぬる、年の始めの、御ことほぎ、限りなき、御めでたさ、濱のまさごの、かづ〲祝ひ納めまゐらせ候。まづ〲、御家内様、御そろひ、ます〲、御機嫌よく、御超歳あそばされ、目出度ぞんじまゐらせ候。つぎに、私方にも、皆々、ことなく、年重ね候まゝ、御心やすく、おぼしめし下され度候。此の品ことなることもなきを、御年玉のしるしばかりにとぞ。何も申述べ候。かしこ。

八木沼里子

璞の年は、たちはべりぬ。げにや日出づる國の年のはじめとて、うら〲とあけわたるみそらのけしきは、神代おぼゆるこゝ地にして、初日のかげをあふがるゝぞめでたき。わが大君には、御稜威年々にいやたかく、榮ゆく御代をば、なほ千代にも八千代にもと、ことほぎたてまつりぬ。御許にも、家門たかくひろく、うからやから、いやさかねにさかねませるは、いと〲めでたききはみになん。こなたも、おい人をはじめ、なべて、まめやかに、たのしきけふにあひしを、よろこびはべるなり。あはれこの豊かなる御代のめぐみに、うるほひあまれるを、いかにしてか、むくいまつるべき。まいてこぞよりは、外つ國人もきよりて、おなじく大御恵の下につとむることゝはなりぬれば、かずならぬおのれらも、ひとしほ、かたきこゝろがまへもて、心の玉もとろわざも、みがきにみがき、御國の光をそふへて、いそしまんとて、あたらしき年を、ほぎまつると共に、心の奥のひとふしを、もらしはべるになん。あなかしこ。

坂田彌代子

年立ちかへりぬれば、一夜の中にもの、皆改まりて、初日の御影、花やかにさしのぼりたるなど、神世の心地し侍り。四海おだやかに、ゆたけき年のしるしにや、御雪さへ門松の枝もとをゝに降りつもるは、いと〲めでたき事に祝ひ侍りぬ。姉の君にもうるはしう、のどかなる御年迎ひなされし御こと、こよなき御事とことほぎまつるになん。姿もかはりなく、年重ね侍れば、御心安うおぼしめし給ひてよ。さても〲、昨年中は、いと厚き、御心もて、御交ひ給りしのみならず、くさ〲の御教さへ賜はりぬれば、たのしくよろづ益あることとのみ、年を終りぬる事の、いとゞうれしく侍りぬ。なほこの年とても、こぞに倍し、御交ひ給はる様、ねぎまゐらす。おもふ心はねつきせず。唯新玉のほぎごとにそひ、一言きこえまゐらするになん。あなかしこ。

内野千代子

初春の御慶、松竹の千歳を籠めて、目出度申納めまゐらせ候。御前様御始め、方々様、御爽に、鶴亀の御齢重ねさせられ、目出度いく千代までも、さかねさせ給ふらんと、限りなく、御歡び申上候。手前みな〲、恙なく、年加へ候儘。私事ながら、御心安うおぼしめし下され度候。いづれ、改め参上いたすべく候へ共、取敢へず、文して同様の御祝詞申上候。この梅花一鉢、わざと御覧に入れ候。餘は、御目もじの上にて、よろづ申上べく候。かしこ。

月野まへ子

去年より待ち渡りし、のどけき初春深きめぐみのうちに、むかへ侍りぬるめでたさ、誰かはよろこびきこゆざらん。いつはあれど、御わたりの、御にぎはへいかばかりかはおはしますらん。明なばさくもうのぼりてさ思ひ侍りつれど、常はさびしき賤がやも、さすがに打ちまぎるゝ業のつどひ侍り、なめけながら、取敢ず、拙き筆に、よごさきこゆさするな。よろづは、春深うこそさゆるし給ひね。此の脳髓草、おかしちも侍られど、尚編壽の、つどひおはしますやうにさ、御文机の辺にくらすな、笑はせ給ひてよ。かしご。

敷島ふみ子

鳳代もかわらぬ春の御齢、玉椿の八千代をかけて、祝ひ納めより〳〵。今朝は年なみの、立ちかへりたるしるしにや、空の景色も、いさうらゝかに、治る御代の御栄も、家ごさにたて並べたる御旗の色にあらはれて、人の心もおのづから改り侍りつる心ちするに、其の御もさ皆々様には、御機嫌いさうるはしく、若葉の春を迎へさせ給ふらんさ、目出度存じ上候。こなたも、皆々事なう、齢を重ね候まゝ、御氣もじやすう、思召させらるべく候。去年にもまして、御厚情のほど、願に願上げより〳〵。まづは新暦の御よろこびまで、あら〳〵、目出度かしこ。

渡辺たき子

新玉の年立ちそむる御寿き、千代も、八千代もかはらぬためしにて、まだ暮れぬ、空ながら、昨日には、引きかへて、今日は、何さなく、長閑に覚ぬ候。まづ、御許様はじめ、御一統様にも、御機嫌よく、御よはひかさねられ候はんさ、こよなく、芽出度存じゝゐらせ候。こなたことも、かはりなく、年一つかされ候まゝ、憚ながら、御心安くおぼしめし下されたく候。さて、ふる年は、何 さ御心にかけられ、いろ〳〵、御世話に、あづかり、あつく御禮申上候。倚本年も、野辺の小松の末ながく、御音なひ願はしく存じ候。一度御館へ、参上いたし、去年の御詫を兼れ、年の始の御祝ひ詞も、申上べき筈のさころ、兎角、客人などこれあり、心ならずも、御無沙汰いたし候段、幾重にも、御ゆるし下され度候。いづれ、青柳のいさ長き日に、御目もじの上、御こさほがひ申上べくさ存じ候。先ば、心ながく餘みぢかに、祝ひ納めまいらせ候。あなかしこ。

西村章子

新玉の年たちかへりぬれば、賤が伏屋ゝのご〳〵しう、うらゝかに覚ぬ侍りぬ。まして、玉敷の都の、今日の御有状さこそさゆかしく思ひやり侍り。身は睦じき御まさゐの中に、年を迎へ給ひ、如何に頼もしき御嬉び多く侍らん。こなたももし歸り給はゞ、ふる年の御物語、きこゆ承りなどしてさ思へりしを、それのみはかざれど、皆々賑々しく祝事どももし侍り。わざて去年の冬は、殊に冷ぬ〳〵かりしにもかゝはらず、御両親の君には、御持病も出です、いさすこやかにおはし候まゝ、御心安く御思召なさるべし、この四月には、御卒業の事さて、甚しう待ち楽しみておはすれば。たゆまず勤しみ、名誉の花をかざして、父母の待ちまさん御顔を、ながみ給はん事こそ願はしけれ。あなかしこ。

三野ていこ

あら玉の年立ち歸る今日の空、野山の景しき、なむさなく永閑に、ゆたけき大御代にこそありけれ。わけてめでたきは、女鑑てふ文の、年をふるにつれ、いやましに栄ぬて、みたれなく、東の都にも、たくひすくなき文にそありける。されは、世の婦女子のきそひて、よみ給ふめり。我等も、さくより、身を修むるよすがさ頼みぬ。そのことにかゝはり玉ふ、恵みあさからぬ、師の君たちには、露ばかりの御障りもなく、年を重ねられ候はむさ、幾千代か

けて、めでたく　ひ參らせ候。猶、日頃の厚き御敎、いとうれしく、こむ年もかはらせず。敎の庭の撫子を、おゝし立てたまひてよ。

いでやをしへ子らと、ともに、新玉の年の御ことぶき申上げ、併せて、かた／＼の健やかならむことをいのり參らせ候。

あなかしこ。

由井涙子

新玉のとし立ち返る今日はしも、空のけしきも、人の心も、なにとなくのどかにて、のきばにひらめく大御旗は、朝日に輝き門毎に立てわたす松竹は、君が代を、千代に八千代と、ことほぎがほなるぞ目出度き。まづ御わたりには、御各位そろはせられ、かひある年を重ねさせ給ふらんと、よろこびきこえ侍るになん。次いでは手前方も、一同つゝみなく年をむかへ申候まゝ、御心安く思召し玉ひてよ。偖てもくれつかたは、日足みじかくかてゝくはへて、世間なみに、なにくれとなくいそがはしく、心にかけながら、御訪らひ申さゞりし罪は、ひろき御心にゆるし給ひてよ。この梅、けさしがた庭におり立候へば、ふりつもる雪の中より匂ひ出でしがいとゆかしく候まゝ、一枝おくりまゐらす。松の内は、御邸も、御せわしくあらせらるべく、妾方も同事なれば、雪のごとつもる御話のよろづは、いづれ若菜のせりの根にかけて、春深くと。あなかしこ。

二宮春枝子

初日かげうつれる庭の清水を、硯にうけて、一筆祝ひまゐらす。さて年たちかへる今日の空は、昨日にかはらねど、羽子つく乙女子のこゑ長閑に、軒の雀と千代をさへづり、何となく心うきたち侍り。まづ姉君たちには、つゝがもましまさで、あたらしき年をむかへさせたまへるは、いかばかり目出度かるらん。數ならぬ身も、人なみ／＼に、年をむかへ侍りつれば、憚りながら、御心やすませられよ。

先は、年の始のほぎことと、かくなん。なほ、すがの根のながく御さち祈りまつる。あなかしこ。

吉田政榮子

一夜あくれば、空のけしきも何とのふかはりはね　あるやうにて、年なみのたち歸りたることゝちいたし申候。まづ／＼、皆々様、御機嫌よく、御年かされ遊ばされ、こよなう目出度ぞんじたてまつり候。當方皆々、無事年を越し申候まゝ、乍憚御安心被下度候。先は年始めの御祝儀まで、余は、春長々ゆる／＼御目もじの上と、あら／＼かき殘し申候。早々かしこ。

三木森子

新玉の年立ちかへるあしたより待たゝものはうぐひすのこゑ。げに、四方のけしきも、春めけるみ空となりはべりけるを、御許さまには、いやましにさかえさせ給へる中に、御年を加へさせられ、こよなううれしうなん。こゝにも、つゝがなう年をかされ侍れば、みな安う思し召したまひてよ。ふる年は、一方ならぬ、御心づけにあづかり、よろこびきこえ侍る。ことしもまたかはりなう、御いつくしみのほど、いのりはべるにこそ。すぐさままゐり、御ことほぎきこえたく思ひはべりけるを。母刀自年賀に參ゐられ、そのるすゐ申付けられ侍れば、御許したまへや。つきては、こむ五日、女學校の新年宴會には、よろづをさし置きて、その御席にまじはりたく、いづれ、そのせつ御目にかゝりたくと、今よりたのしみ侍るになん。さて申すまでもなきことながら、ひとゝせのはかりごとは、睦月にありて、睦月のはかりごとは、今日にありとか、古よりの諺になん侍れば、御許さまには、深く思ひはかられ給ひて、ます／＼文うたの道を、御いそしみはべりたまひて、そ

のいさなしの、世にあらはれ給ふことの、昇る朝日のごとくあふまほしくなむ、思ひはへるにこそ。さるは、あら玉の年のはじめの、御ことほざきこゆんさてになん。文のあまりは、御目もじのさきにと、かくなん。あなかしこ。

富田郁子

明ぬれば、昨日のけしき、名殘りなう、所せうたて渡したる門松の、いつはあめれど、いやましに榮ゆさせ給ふ。君か御世は、千代に八千代にさゝれ石の、苔のむすまで、かぎりなき、御壽めでたう、悦ばしうてなん。この御あたりに加はらせ給へる、年の御祝言、にぎはしうおはしますらむ。さるは、春の初祝詞、一ひらの文まいらせ侍るぞかし。萬はいづれ春深うこそ。あなかしこ。

大谷津峰子

あけ渡る天津みそらも、うら〳〵と、朝風にひろがへる日の丸の御旗など、何となう長閑にて、おきらけくおさまれる御代の目出度さよ。先々、皆々樣には、御揃ひ遊ばし、若菜の春を向へさせられ、濱の眞砂のつくしなく、數々、ことほぎ參つるになむ。草の庵もつゝがなう、年を重ね侍れば、御心安う思召し給ひてよ。こは、世の常のものながら、四の方より、ふりはへおこせ侍れば、まゐらす。先は、新玉の年立つけふの御禮申しのべ度、猶、近き程にさふらひて、野よりも、つもる物語りを聞ゆまほしう思ひ侍りぬ。あなかしこや。

河方喜代子

新ら玉のとし始ばかり、うれしく心よきはあらじかし。年の内は音づれたゆにし友どちさも、相見ゆ、うから、やからのとかうのいやるへめでたき中にかはし、千代の友つるは、みぎはの綠木に、萬代のかめは庭もの池に今日をはつ日と朝日子の光りに、おのがさなばほしつゝ、御代祝ふらんさまの見ゆ、あまたのなと

ゞひに、さそはれて、おひはれのをもしろきに、門には、れき〳〵たる音のきしろかさおもへば、年賀の、名刺さへ、小ぶたの上にうつたかく、めてたやの聲、四方八方に、御代萬歲をいはふなる唱歌の聲もいさまし。あはれ、都も、ひなも、おしなべて、いさど目出度く、よろこばしきとしの初めにぞある。

北澤はつ子

いつはあれど、年のはじめのめでたさは、鳥のこゑさへ、千代と轉づる樣なり。聞ゆ侍り、目出度祝ひ納め參らせ候。貴家には、御兩親樣を始め、皆々樣には、みけしき麗はしう、いよゝ賑々しく、御越年遊ばされ給ひけむと、嬉しく存じ參らせ候。降て私家にても、一同恙なう齡を重ね候へば、御こゝろやすう思召下被度、先は御よろこびまで、めでたくかしこ。

村上操子

あら玉の年の始の長閑さは、いつこもおなじ空なれど、まづはおん家ぬちかはらせられず、門松の千代のひさゝせ、迎へ給ひけむ。こよなうめでたくなんおもひ給ふる。さても、去年のまゝなりせば、おなしおんむしろの末につらなりて、歌かるたをもとり侍るべけれど、今は白雲の遠くたちへだてたる、旅の空なれば、ことにおんなつかしうなむおもひ給ふる。きこへまほしき事、いとおほかれど、鳥のはがきのひとひらにつくすべくもあらず。まづはひとことのほきごとまでに。またのたよりをこそ。あなかしこ。

吉崎世根子

新玉の年立つ今朝は、さし出る朝日の光りくまなき大御代をぞ先づ仰がるゝなる。次に故郷には母君をはじめ、姉妹うからの人達つゝがもなう、如何なる年を迎へ賜ひしこそ、いと目出度思ふになん。妾もひさしほ、すこやかに、年重ねせしかば喜び給へかし。思ひ出せば、去年の今日は、隣りむかひの友たちをつどひて、姉

君妹等と、歌留多遊びに、一夜をあかして、衛生にさはりありとて母にたしなめられしこともありき。今年は、東の都に旅寓の身の、家族まどゐのたのしみこそなけれ。畏こきあたりへ、年賀に參る大臣官人の勳章禮服綺羅をかざりて、馬車をはせて、大路を往復ふいかめしさ。戸々の門毎に、立つられたる若松の色新しく、常盤をきそふうるはしさ、さては學校生徒の、軍歌うたひつゝ、紙鳶をあげくらべする。乙女子らがよそほひして、手球つく歌も、君が千代をことほぐさまなど、見るも、聞くも、目出度からぬはなし。斯る賑はしく樂しきさまを、故鄕におはす、母君はじめ、姉妹等にしらせばやと、そこ〳〵に、此の文章をものし、都の新年の有樣を詳しくしるしたる、新刊の新聞紙壹葉を添へて、おくりたてまつるになん。あなかしこ。

新井と代子

年の新まるばかりのとけくたのしきものにはあらず。つごもりの夜半までは、何やらむ、足も空にて、さわき忙はしげなるちまたも、いつしか、夜あけぬれば、さすがに昨日の樣と、いみじう打ちかはりてけり。さしもに繁かりける都大路も、しづまりはてゝ、いとのどやかに見ゆ。門に飾れる松竹の千代しめかほなるに、朝日の御旗は、風にひるかへり、軒の術の千代よばふなど、目にふるもの耳にきこゆるもの、何かはうれしからざる。家内打ちつどひて、屠蘇雜煮に、新玉を心にほぎつゝ、押し戴く心地はいかに。庭の老松のけなげに、枝さしのべたるは、み空に舞ふ田鶴むらを招くさまあり。春は花、秋は紅葉と、四季をり〳〵の、ながめはあれど、年あらたまりたるけさのけしきとむとの、こののどけさには、およばしかし。まして、四海浪靜なるみづほの國の、進みに進みて、八隅しゝ吾が大君のみぐめは、年と共に、いや遠に及ぶを見ては、學び屋に通ひそめたる、うなゐ子さへ、君は千代ませ八千代ませと、祈るもさるべきにこそ。常にはならはぬわざながら、けふのめでたさごのけさに、そゝのかされて、おのづから筆とりつれば、いつしかかゝるふみとはなりぬ。あなかしこ。

松上鶴

　　　　　　　　　　　　　　　　　　鷗原菫子

幾千代をきみにさゝげてときはぎの
　　まつのうへにもあそふつるかな

同

　　　　　　　　　　　　　　　　　　竹村竹里子

朝日かけまつかこすゑにあしたつの
　　千とせのゆめをいくへむすはん

同

　　　　　　　　　　　　　　　　　　三野てい子

あかれさす朝日のかけもさしそひて
　　まつにとひかふたつののどけさ

明治卅二年十二月十二日熊本縣玉名郡東高等小學校の新築より三年になれる紀念日の式につらなりてよめる長歌

　　　　　　　　　　　　　　　　　　吉富彥子

かけまくもかしこきろかも　天皇のみことかしこみ、御代の名の、明治の三十年、ふみまなぶをしへの庭を、ひらきてゆいよよますます、咲に匂ふ花うるはしき、撫子の年ふる每に、かずそひて、はや三年てふ、春秋をふりぬる今日は、亦ひとつ新はりたてし、學の舍ともに千年の、すゑまでもさかえゆかんと、諸人がうたげのむしろ、織りはへて、いはふ足日ぞ、たのしかりける。

反歌

千五百秋さかえゆくらむふみまなぶ
　　をしへのにはの黃さく白菊

戊戌春日弓棚岳に遊ふ記

木川里子

よべよりの春雨、いつしかはれて、けしきの長閑けさに、霞ならねど、心もそらにうきたつなりしも、いと、春の山べに、ものせんとさそはるゝまゝに、近きあたりの人々と、ともにさかしき山路をさしてたどりゆく、人里とほくなりゆくまゝに、路もせにもゆる若草ふみわけ、あるは、生ひしげれる松の木の間をくぐりゆくに、木末をわたる風音、いとしづけく、谷の小川にひびきあひ、おのづから妙なるしらべに、心も清くすみわたり、仙人の住家とやらんにいりたるもかくやあらんとおもはれ、高根をさしてのぼりけるに、いと廣やかなる、燒野に出ぬ。こゝかしこに、をりしはかほに、わらびの萠いでたれば、われおさらじと、袖かきあはせて、をりゆくに、いつしか絶頂につきぬ。しばし岩根にゆすらひ、おのがじし携へし、破子をひらきて、四方をみ わたすに、東北の方には、烏帽子嶽、國見岳など、山また山につらなり、西南の方には、青海原かがみのごとくなぎわたり、九十九島は、つくりなしたらんごとく或は大く、あるは小く、つらなりて、千代のみどりの色ふかき松生しげりたるひまを、つり舟のこなたかなたに行かふさま、給畫にうつしたらんごとく渚の方には、相浦村よばゝこたへつべく、海士の苫屋より立のぼるけぶり、いとをかしく、いまだ見もせぬ、陸前の松島、鹽釜とやらんのさまもおもひやられ、八重の潮路かすかにこめて、こぎ行舟のかげも消ね平戸五島もみねわかず。實にのどけき春のけしきたとへんかたなくをかし。家路は、いかに隔りぬらんと佐世保の 方をかへりみるに、御國の鎭と、いかめしくならびし建もの、いと嚴に、港内もひとめに見わたされ、外國かけて、日本の光をかがやかす軍ふれ、あまたかゝれるさまも、いといさまし。市の方には、軒端つづきに立のぼるけぶりもしげくながめられぬ。人々の今はとて、かへり路につきぬるもしらで、居たるに、彼方より來る、賤の翁ありけり。岳の名をたづねつるに、こゝぞ弓棚と答へぬ。いと武士に緣にしふかきも、所からをかしさかぎりなし。麓の野べは、黄金白銀しきたらんごとく、さきにほひたる菜花の　畑にまじりて　麥生の青やかに穗をいたし、遠近の民の軒ばの、今を盛りの桃花、かすみの色もくれなゐににほひ、梨の木末は白妙に、雪か波かとあやまたれ、うちなびく柳糸はけふりにまがひおしなべて、錦をさらすがごとく、なかなか、都の春にもまさりて、をかしきながめ。いつしかあくべきならねど、峰より下りくる人々のかげ、とほざかるにおどろき、こゝろばかりをのこしてかへる。路すがらおどろふみわけ、あるは燒野の原をそこともなく、たどり歩きて、手をりける、わらびのいつしか、袂にあまるばかりになりぬ。

家づとになりしわらびもたのしさも
　　いまはたもとにあまりけるかな

やがて、家にかへりて、をかしかりし、今日のさまを、都の友にもつげまほしと、燈のもとにて、かずかずものにしるしぬ。



三輪田眞佐子著

第八版

女子の本分　全

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸嬢が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さむ、

定價　金二十五錢
郵稅　金六錢

目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

三版

家庭の鑑

菊版美本 全一冊

定價金拾八錢 郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれは皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれは其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へさる可らず、

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋入入）國光社

伯爵佐野常民君題字
子爵品川彌二郎君題字
子爵松平乘承君序文
華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井乞溟著

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩

定價一冊代金貳拾四錢郵税郵券一錢代用一割增

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらず然れども婦女の身にして能く有爲の男子を凌ぎ之が旗幟を翻すものは甚少し

瓜生岩女は渺たる一婦の身を以て畢生七十餘年間一日の如く社會の爲に國家の爲に粉骨碎身し以て**天下百世の龜鑑**を垂れしもの岩女を推して**當代の女傑**と爲し**慈善家の泰斗**となす豈過稱ならんや**本書**は其畢生を叙せし者なり**天下の人士**一度本書を讀まば貪婦も廉に惰夫も猶起つべし

讀め！本書を讀め！請ふ本書を讀め！

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　日本赤十字發行所

社告

〇代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
〇郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事〇別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事〇未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹　四	
全國無遞送料		

明治三十三年一月四日印刷
明治三十三年一月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衛

東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木From良雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號新橋八八）國光社

時計價格概表

金側

●十八金無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價九十五圓ヨリ百七十圓迄●同中硝子價七十五圓ヨリ百二十圓迄●十四金無双中硝子價五十五圓ヨリ七十五圓迄●十八金無双裏三枚蓋七曜月日指シ月ノ滿欠十二月及引打付價二百五十圓ヨリ四百五十圓迄◎米國製十八金廿一形無双中蓋付龍頭卷百二十圓ヨリ百五十圓迄●同十四金價五十五圓ヨリ九十五圓迄●同十六形價六十五圓ヨリ八十五圓迄

銀側

●無双裏三枚蓋廿一形龍頭卷價二十三圓ヨリ七十五圓迄●同片硝子價十五圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子裏三枚蓋二十圓ヨリ六十五圓迄●同片硝子九圓ヨリ卅三圓迄●同片硝子器械シリン價七圓ヨリ八圓五十錢迄●無双裏三枚蓋廿一形引打付價八十圓ヨリ二百五十圓迄●同片硝子價七十五圓ヨリ百七十五圓迄●同コロノカラフ付百七十五圓ヨリ二百五十圓迄●同コロノメートル價六十圓ヨリ八十五圓迄◎米國製廿一形無双中蓋付龍頭卷價十八圓ヨリ三十五圓迄●同片硝子價十六圓ヨリ十七圓五十錢迄

金著側

●米國製廿一形無双中蓋龍付頭卷價二十三圓ヨリ五十五圓迄●同十六形十八圓ヨリ三十五圓迄

銀七寶

●瑞西國製銀七寶側裏三枚廿一形龍頭卷價廿圓ヨリ卅五圓迄●同四十圓ヨリ五十五圓迄

鐵側

●瑞西國製片硝子廿一形龍頭卷價五圓ヨリ八圓迄●同九圓ヨリ十二圓迄

白銅側

●瑞國製片硝子廿一形龍頭卷價三圓ゟ七圓五十錢迄●米國製廿一形片硝子價六圓五十錢ゟ十二圓五十錢迄

（明治二十四年八月四日内務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）